一撃少女

ラキア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「またワンパンで終わっちゃったの……」

目次

1撃目 1
2撃目 8
3撃目 16
4撃目 24
5撃目 32
6撃目 39
7撃目 47
8撃目 55
9撃目 64
10撃目 74
11撃目 84
12撃目 90
13撃目 97
14撃目 105
15撃目 113
16撃目 120
17撃目 129
18撃目 136
19撃目 146
20撃目 155
21撃目 162
END

1撃目

闇夜――――静けさが支配する夜の町で、異変は起こった。
町の一角にある小さな動物病院。そこで何かが暴れ、そして建物を破壊して衝撃が辺りに包む。煙が舞い、その中から現れたのは異形の化け物。それはおよそこの世のものとは思えない光景であった。目は赤く光り、口は何もかもを飲み込むような凶悪な形。その破壊された建物から、新たに一つの影が現れる。
小動物。フェレットに似ている何か。それはこの世界とは別の世界から来た使者、ユーノ・スクライアだ。彼はは異世界から来た【魔導師】である。――――魔法。この世界【地球】には存在しない力である。
これだけの騒ぎだというのに、周囲に人影は無い。それはユーノが周囲に【結界魔法】を展開しているからだ。これで一定の範囲と時間はこの騒ぎを周りの世界から隔絶することが出来る。ユーノ・スクライアは魔導師として優秀な能力を持つ結界魔導師。結界魔法による防御・治癒などの補助魔法を得意とし、また豊富な知識を持っている。
彼は元々このような小動物の姿はしていない。本来は人間である。しかし事情によってこのような姿になり、現在は異形の化け物に襲われている。
異形の化け物はユーノを見つけ、襲いかかる。しかしユーノはその小さな姿を利用し、化け物の攻撃を回避し、その建物の周囲から脱出する。だが道路に出たからといって安全というわけでは決してない。化け物は直ぐに塀を破壊してユーノの目の前に現れる。
彼は後ずさりし、苦い表情で噛み締める。自分ではこの化け物に太刀打ちできない。誰か協力者が必要だ。その為に彼は事前に目星はつけている。あの時――――自分を助けてくれた少女には、魔法の才能があった。
彼女には既に念話と呼ばれる方法でコンタクトを取っている。それに彼女が気付いてくれていれば、後は時間を稼ぐだけだ。

――賭けるしかない。
だが、運悪くユーノは立ち回りを間違え、化け物に攻撃を与える隙を作ってしまった。それを見た化け物はこちらに咆哮と共に襲いかかってくる。ユーノは目を閉じ、己の終わりを悟った。しかし、彼の前に一つの影が現れる。
化け物の気配ではない。ユーノが瞳を開けると、そこには一〇歳くらいの少女が立っていた。そう、彼女だ。自分が救いを求めた人物。
だがタイミングが最悪すぎる。これでは少女は化け物の攻撃を食らい、命が危ない。ユーノは全力で防御魔法を展開しようとするが、間に合わない。何もかもが絶望すぎる。化け物が少女に触れるその瞬間――。

――異形の化け物は一瞬で消滅した。

「……え？」
ユーノは思わず呆気とした声を漏らす。何が起こったか理解できない。数秒瞳を瞬させて、頭を整理する。少女は先ほど化け物とユーノの間に入ってから態勢を変えて、腕を前に突き出していた。まるで何かを殴ったかのような。
そこでユーノはありえないことを考える。もしかしたら今、少女は素手で、しかもパンチ一撃であの異形の化け物を倒したのだと。そんな筈はない。直ぐに意識を切り変え、別の考えを展開しようとした時――。
「また……ワンパンで終わっちゃったの……」
虚しさを込めて、少女は呟く。ユーノはもう、考えるのを辞めた。

◇

三年前。少女――高町なのはは孤独を味わった。

それは父が大怪我をし、家族全員が父の看病に徹していたからだ。なのはは幼く、母も父も、兄も姉もなぜ自分に構ってくれないのかと、幼い為に感じた孤独感。それを一人だけの家で考え、考え、考える。その結果彼女が求めたのは――――強さだった。

高町家は武術を継承する家であり、父も何代目かの継承者である。いずれ兄がそれを継ぐだろう。そして姉もそんな兄に負けずに毎日稽古を怠らず、強さを磨いている。それに比べて自分はどうだ。自分は運動が苦手だと思い、身体を鍛えるのを諦めていた。

そんな自分に、家族は見放したのではないかと、なのはは導き出した。

ならば、強くなればいい。姉は疎か、兄も超え、父も超え、いずれは最強になろうと、なのはは決心した。そこから彼女の努力は始まった。

まずは毎日のトレーニングだ。三六五日欠かさず、毎日のように地獄のトレーニングを行った。

――――思えばあれから三年経った。

「ぐはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーッッ!!」

朝。道場で兄の叫び声が響く。なのはが兄の稽古に付き合い、パンチを一発入れたからだ。勢いよく吹き飛ばされ、兄の身体は壁に叩きつけられる。壁に穴が開かないのは手加減をしたからだ。姉が慌てて兄に駆け寄って心配するが、この程度で命に別状はないことは分かっている。

なのはは無気力な感情で兄にタオルを渡し、朝食の時間だから早く来てと伝えて道場を後にする。

――――なのはは死に物狂いで特訓して無敵のパワーを身につけることに成功していた。なりたかった最強になれた筈だった。だが、彼女は心が満たされなかった。

父は大怪我の後、無事に退院した。だが仕事については怪我の事もあり引退して、現在では自営で喫茶店を開いている。家族はその後のなのはの特訓については応援し、そして励ましていた。だがまさかこ

のような形に変貌するとは思っておらず、なのはの強さを知ってからは驚愕として云い様がなかった。術を継承する父も、自分の今までの努力は何だったのかと悟るくらいに、それは驚愕だった。
なのははその力を生かそうと、日々トレーニングついでに町に出ては困っている人を助けている。その際に強盗などの事件も拳一撃で解決したことも数回あり、そのあまりに非現実的な光景に、周りの人々は強盗の自滅としか思えず、なのはの強さを知るのは家族や友人だけであった。

◇

いつもの様に朝、父と母の手伝いで朝食の準備をし、朝稽古をしている兄と姉を呼びにいく際に、兄に頼まれて稽古一本申し込まれ、そしてワンパンで終わらせる。タオルを渡してリビングに来るように伝え。家族で朝食を取る。朝食だというのに肉や魚、野菜などがあるものの、とても朝から食べるには重過ぎる献立だが、皆朝から体力使うから仕方ないと納得できる。なのはは食事を取りつつ、冷静に朝の出来事を頭で整理した。なのはは今年で九歳だというのに、もう精神年齢がかなり成長している。あの地獄の日々のせいであるが、更に最強になってしまった無気力な日々が、なのはの感情を無くしていった。
朝食を取り、準備を済ませた後は学校に行く。迎えのバスに乗り、友人であるアリサとすずかに挨拶する。
「おはよう！　なのは！」
「おはようございます、なのはちゃん」
「うん、おはよー」
流すような発音で挨拶を返して、アリサとすずかの間に座る。なのはが無気力な挨拶の返し方をしても怒らないのは、アリサとすずかはなのはの心境を知っているからである。だから悪気がないのは知っている為、アリサとすずかはなのはに話しかける。昨日あったテレビの話や、すずかの家で起こった珍事など、日常らしい雰囲気に包まれ

る。なのはもテレビは観るし、すずかの話にも笑えるくらいには普通の思考回路をしている。
しかし、ただ思う。もっと面白い日常は無いかと。今の自分には緊張感も何も無かった。
そんな日の夕方に起こった出来事である。
いつもの様に授業が終わり、校舎の門を越えてからアリサとすずかと別れ、帰宅しようとした時、なにやら頭に直接響く声が聞こえたのだ。
【助けて】――――と。
なのはは駆け出し、アリサとすずかはその只ならぬ様子に後を追う。着いた場所は林の中、自然公園がある場所である。その人が少ないところに、フェレットに似た生物が倒れていた。
「(――――私を呼んだのは、これなの？)」
なのははとりあえず、フェレットに似た生物を抱える。林から出ると、そこにはやっとの事で追いついたアリサとすずかの二人が息を切らしながらこっちに走り寄って来る。
「何この子、フェレット……？」
「この子、怪我しているわ!!」
二人の言うように、直ぐに動物病院に連れて行く。病院について、医師の話によれば命に別状はないらしい。アリサとすずかはほっと胸を撫で下ろし、安堵する。しかし医師はフェレットにしてはおかしいという言葉を呟いていたが、助かったのなら問題は無いだろう。そう思い、なのは達は帰宅する。
問題はその日の夜に起こった。風呂上りに髪を渇かして、いざ寝ようとした時に、また頭に直接話しかけられたのだ。なのはは急いで着替え、家を飛び出す。向かうのは先ほどの動物病院である。近くまで来ると、一定の範囲から空間が変わったことに気付く。こんな経験は初めての事だ。
体験したことの無い出来事に胸を高鳴らせて、動物病院に着く。そこにはフェレットと、それに襲い掛かる化け物の姿だった。なのはは一瞬でフェレットの間に割り込み、拳を構える。身体を捻り、パンチ

を一撃叩き込む。
――普通のパンチ。
すると化け物は破裂するように消し飛んだ。なのははそれを見て、数瞬だけ思考整理する。
結局、非日常的な化け物が相手でも、なのはのパンチで一発で倒せてしまったのだ。つまりは、相手が変わっただけの、同じ日常。それを理解出来たときには、心のなかでくそったれと叫ぶしかなかった。
だが、そう思った矢先である。化け物だった細胞が独りでに動き、また集まろうとしている。その中央には青い宝石のようなものが輝いている。
「君！　頼みがある！」
「うわっ、喋った!?」
フェレット――ユーノが喋ると、なのはは予想外な出来事に軽く驚き、肩をびくつかせる。
「僕に協力して、あの化け物を封印して欲しいんだ！」
「封印？　どうやって？」
なのはが首を傾げると、ユーノは自分の首に付いていた紅い珠を銜えて、それをなのはに渡す。ユーノの話によれば、あの化け物はあの青い宝石みたいなものが原因らしく、それを直接解決するには魔法を使わなくてはならないらしい。
その為、この紅い珠で変身をしなくてはならない。なのはは紅い珠を見る。正式名称は【レイジング・ハート】。デバイスと呼ばれるそれを使って、バリアジャケットと呼ばれるものを装備しなくてはならないらしい。そのために、先ずは使用者登録をしなくてはならないらしく、ユーノの指示に従う。レイジングハートを握り、ユーノに言われたように復唱して、登録を済ませるとなのはの身体にバリアジャケットが展開された。
姿は学校の制服と似たデザインをしており、魔導師らしい杖が手に握られた。それを使い、本来は魔法を使って戦術を展開するらしいのだが、すでに化け物は戦闘不能なので、なのはは復活しようとしている青い宝石に近づいて、杖になったレイジングハートを近づかせる。

すると、レイジングハートが自動で封印作業に入り、そのまま青い宝石は杖に吸い込まれるように消えていく。残った細胞は蒸発するように消滅し、先ほどまでの思い雰囲気も消えてなくなった。変身が解除されて、なのははユーノに話を聞こうと、踵を返す。

しかし、そこで結界魔法も解けたのか、騒ぎに気付いて人の気配が復活する。なのはは下手な面倒に巻き込まれたくは無い為、ユーノを掴んでそのまま全速力でその場を後にした。

2撃目

玄関から入り、兄と姉にどこに行っていたかを訪ねられた為、ユーノを見せて動物が逃げ出したのを探していたと誤魔化す。まあなのはが夜間外出したところで、誰かに襲われたりとかは皆無だと二人は思ってはいるが、それでも一応心配するのが家族という事だ。

ユーノを見せると、兄と姉はむしろそのフェレットもどきに意識が向いて、結局なのはへの説教はあまり無く終わった。

部屋に戻ってから、家にある適当な籠にタオルなどを入れたユーノ用のスペースを作る。そこにユーノを置いてから、なのははユーノへ訊ねた。

「で、えーっと……」

「ユーノ。ユーノ・スクライア」

「そうそう、ユーノ君。でさ、ユーノ君は一体何者?」

先ずは一体ユーノが何者なのか知るのが先である。先ほどの出来事から、魔法などの非現実な世界の使者だと分かるが、それだけでは分かりかねるものがある。一体彼は何者で、何が目的なのかを知りたかった。

ユーノは頭の中の情報を整理するように、一度頭を下げてから、再び上げてなのはへと視線を合わせる。

「じゃあ先ず、僕が何者かを話すよ。僕はこの世界とは別の世界からやって来た魔導師だ。僕たちスクライア一族は遺跡の発掘を生業として、日々の日常は採掘の仕事をしていた。肉親がいないから、裕福な暮らしなんて出来ないから、小さい時から発掘の仕事をしている。でも自分で金を稼いで、学校には通った。田舎の世界の学校だから、そこまで知識の量は多くは無いけど、独学で魔法関連の知識は得たんだ。元々本が好きだったからだね。話が逸れたけど、僕はいつもの様に発掘の仕事をしている時だった。見たこともない鉱石を発見したんだ。それを回収し、鉱石が何なのかを調べようとした。でも愚か

だった。その鉱石は鉱石なんかじゃなく、ロストロギア【ジュエルシード】だったんだ。ロストロギアというのは古代遺産の名称で、これにはとてつもないエネルギーが宿っている。最悪なのは、このジュエルシードが輸送中に事故にあって、その多くがこの世界【地球】に落ちてしまったんだ。僕はこれを回収するために地球に来た。でも地球は魔法技術が全くない世界。だから行動範囲も狭まっているし、僕自身もジュエルシードの暴走を止められるほどの実力の持ち主ではない。でもこんなことになった原因は僕にある。だから、これは完全に君にとっては理不尽な話になるかもしれない。でも僕は――――」

「うん！　とりあえずもっと分かりやすく説明して欲しいな！」

ユーノの口から出た言葉の情報量は、とても一発で理解出来るものではなかった。専門用語も当然のように混ざっていて、魔法知識の無い者にとっては理解不能だろう。ユーノは慌ててごめんと謝った後、何から説明すればと言葉を漏らして口ごもる。

その様子はなのはから見ても焦っているのが分かる。とりあえず、となのはは口を開き、

「ユーノ君は異世界から来た人で、目的はあの宝石みたいなもの……ジュエルシードっていうんだっけ？　それを集めたいって事だよね？」

「う、うん！　そう！　まとめるとそんな感じ！」

彼の言いたいことをなのはが言ってくれたことで、ユーノはこくこくと頷く。だが、次にまた言いにくそうな表情をしたのち、顔を若干俯かせて口を開く。

「その……君にとってはとても迷惑になるかもだけど……いや、実際にもう迷惑をかけてしまっている。けど、出来れば……協力して欲しいんだ！」

ユーノの頭の中で、葛藤があったのだろう。彼はその性格や雰囲気、言葉使いからわかるように、とても真面目で優しい性格なのだろう。先ほどの長い説明でも、どうやら事故の責任を感じて異世界まで飛んで来るくらいだ。

そんな彼が、異世界の人間――――なのはを巻き込んでしまったこ

と。あまつさえ、今後の協力も願いたいというのだ。人の都合に巻き込むという、彼にとっては申し訳なさが半端ないであろう。
だからなのはは、そんなユーノに対し、
「うん、いいよー。どうせ暇だし」
即答でユーノの願いに了承した。ユーノは信じられずに目を見開くが、なのはとしても異世界という非現実的な言葉に興味があり、あのような化け物みたいなものと戦えると分かれば、むしろ協力したいところである。果たして自分の強さがどの程度なのか、なのはは知りたかった。
そうと決まれば早速明日から行動を開始したいところである。今日はもう日付も変わっているので、就寝することにした。

◇

朝にいつもの様に起きて、準備を済ませてからバスに乗り、学校へと向かう。違いがあるとすれば、念話でユーノが定期的に脳内に直接話しかけてくることだ。この念話というものはテレパシーの一種で、魔法があるから出来る通信手段である。しかし考えてみれば、これは相手の思考を覗けるのでは無いかと思うが、使いこなせばオンオフの切り替えが出来るようになるらしい。しかも長距離では届かないというデメリットがある。
ユーノには家で待っててもらい、そこで周囲の町でジュエルシードの反応が無いか捜索してもらう。話によれば、ここ海鳴市でほとんどのジュエルシードが落ちているらしく、何とも都合がいいと思った。既にここ数日で三つのジュエルシードを回収している。
ユーノとの接触から翌日に犬と融合したジュエルシードの化け物と相対し、デバイス起動時の長い復唱が面倒だということで変身の一声を叫ぶと、それだけでバリアジャケットを装備できてしまった。ユーノによれば。よほどの魔法適正がないと出来ないことらしい。まあ、結果としては魔法を使わずにワンパンで倒して終わったのだが。

だがいつまでも魔法を使わずという訳にもいかない。ユーノの話では魔法で空を飛ぶことが出来るとのこと。これは是非とも試しておきたい。

現在は授業中。しかも自分が予習したところなので、この授業はサボっても平気だろうと考えてから、思考でレイジングハートに指示を送り、意識をフェードアウトさせる。一種のバーチャルリアリティであり、なのはの視界は授業風景から、空の上へと変化する。

「へえ……これが空を飛ぶ感覚かぁ……」

レイジングハートが肯定してくる。早速飛ぶ練習をしようとするが、思ったように動くことが出来ない。それを理解し、レイジングハートがこちらに指示してくれる。先ずは足を動かす感覚。これを意識だけを切り変えて、空を歩くイメージから始めてという事だ。試しに意識だけを歩くイメージをしてみる。すると片足だけが引っ張られて、身体が回転する。

「――あ、折角空を飛ぶんだから、ゆっくり飛ぶイメージしても意味ないよね」

それに気がついたなのはは、意識を歩くことから、ゲームなどで言う直進するイメージに変える。すると自分の身体はロケットや戦闘機の如く、凄い勢いで直進した。これは良いと内心思いつつ、レイジングハートにどうか訊ねると、この飛び方をして平気なのは貴女だけだと言ってくる。

折角授業をサボって練習しているのだから、なれるまでやっておくことにした。

◇

授業が終わってからはアリサとすずかと別れてから帰宅して、庭にある花に水をやる。季節ももう春から梅雨になって、虫たちも活発に活動し始めてきている。その中には当然――蚊もいる。

バンっと勢いよく手を叩き、蚊を叩こうとするが、まんまと逃げられる。もう一度叩くが、これも回避される。小さい故に、蚊のすば

しっこさは尋常ではない。徐々にイライラがたまり始める。
「(――――逃がした！　蚊めぇぇぇッッ!!)」
そんな中、部屋の中で捜索活動をしていたユーノは、この近くの森の中でジュエルシードの反応があると分かり、それをなのはに伝えようと念話を試みるが、なのはの心が偉く乱れており、まともに会話が出来ない状況になっていた。
仕方が無いので、自分から下に向かおうとするが、小柄な体躯故に、二階にあるなのはの部屋から降りるのが一苦労だ。途中でなのはの姉などに捕まり、なのはの元にたどり着けない。
そんな中、テレビではとあるニュースが報じられていた。
『海鳴市で突如、蚊が大量発生！　市内にいる方は、外出を控えるようお願いします！』

◇

海鳴市の境にあるとある森。そこに居る野鳥などの動物。または牧場などの家畜が干からびて死んでいた。それらの死体の後には、決まって空に黒い何かが飛んでいる。
――――蚊だ。
海鳴市で蚊が大量発生。それは集団で行動し、一つの標的から一気に血を吸い上げる。とても今までの蚊とは常軌を逸している。そして今、森の中を迷った人が蚊の集団の餌食にされ、それらの血を吸った蚊がとある方向へ集まる。
そこには、一際大きな生物がいた。蚊をそのまま大きくしたような、そんな生物。だが人と同じくらいの大きさの蚊などいるはずも無く、間違いなくこれはジュエルシードによって起きた異常だ。この化け物は他の蚊を操り、そして集めた血を吸って更に成長する。その姿は見る見る凶悪なものへと変貌していった。
だが、その化け物に対して、一線の光が浴びせられる。
まるで稲妻のような魔力光。その砲撃によって、化け物の周りにいた無数の蚊が消滅した。

下を見る。そこには此方に向かって手をかざしている少女の姿があった。鮮やかな金髪を頭頂部で二つに結っており、その目は宝石のような双眸。どこか寂しげな表情をしているが、間違いなく美少女と呼べる少女である。だがその姿が一般人の枠組みから外れており、なのはと同じくバリアジャケットに身を包む。

外見は似ておらず、なのはが白を基調とした衣装なら、此方は全身が黒い。レオタードのようなインナーの上に四肢に付く装甲。つなぎ目には赤が混じり、黒いマントを着用している。反対の手に持つのは斧であり、彼女の武器であることが窺える。魔法少女と言うよりは、魔女に近いイメージになる。

彼女は蚊の化け物を仕留めていなかったのを確認すると――。

「――排除する」

言って、少女は斧を構える。すると斧の先端部が曲がり、見る見るそれが変形していく。姿は斧から鎌に変化して、黒のバリアジャケットも相まって死神を髣髴としていた。空に浮き、鎌を横にして構え、そのまま捻る様にして振る。すると鎌の刃の部位に黄色の魔力光が光っており、それが斬撃となって化け物に襲い掛かる。

しかし蚊であるが故に、その速さも尋常ではない。軽々とその斬撃を回避していく。しかし、少女は既に次の行動に出ていた。蚊が回避した直後に、その目の前まで移動する。あっという間にである。それは少女がこの蚊以上の速さを持つことを意味している。そして残撃。先ほどとは違う直接な攻撃。蚊の両足が両断され、蚊は慌ててその場を跡にしようとする。

「逃がさない！」

少女は直ぐにその後を追いかける。だが、そこにあったのは先ほど以上の蚊の群れだった。おそらくあの群れの中で身体の傷を癒そうと考えているのだと思った少女は、愚かだと考える。少女にとっては、むしろ集まってくれたほうが排除しやすいからだ。

少女はデバイスを構え、一斉攻撃を行おうとした時――。

「ユーノくん。本当にここなのー？」

「――ッ!?」

下から人の声が聞こえたのだ。これは不味い。このままでは関係ない人を巻き込んでしまう。だが目の前の化け物はそれを好都合と考え、蚊の大群を一斉に此方に仕掛けてくる。少女は直ぐ様デバイスを構え、魔力を高める。びりびりと電気が弾け、デバイスを上に掲げた。

「サンダーレイジ!!」

少女のいる位置を中心として、突如上から黄色の魔力光が降り注ぐ。まるで宇宙から発射されたレーザーの如く、広域攻撃魔法を放つ。上から降り注ぐ稲妻は周囲の何もかもを焼き尽くし、蚊の大群を一斉に消滅させる。先ほどまで森だった場所が、少女を中心とした場所だけ焼け野原と化した。

「ジュエルシードと融合したからには、少し知能が上がっているかと思ったけど、所詮は虫というわけか。わざわざ攻撃しやすいように蚊をまとめて私に向けるなんて。ここは森の中で、周囲に人がいないのは確認済み。遠慮なく攻撃が可能で――――」

そこで気付く――――先ほど一人ここに一般人がいたことを。慌てて下に駆けつけ、周囲を探す。

「しまった！　一人巻き添えにッ――――」

「いやー助かったよ。すごいね君！　今の何？　あれがホントの蚊取り閃光……なんつって」

何故かそこには裸の少女の姿があった。まさか、今の攻撃で服だけが焼滅したとでもと考えるが、ありえないと否定する。

だが、思考しているのもつかの間。先ほど化け物がいた場所から凄い音が響き渡る。羽の音だが、先ほどとは比べ物にならない。その姿を見るや、先ほどとは全く姿が変わっており、凶悪な姿へと変貌している。だがいくら姿が変わろうが、こちらが負ける要素など無い。

先ほどと同様に斬撃を繰り出そうとした時、少女は気がついた。自分の身体が宙に浮いていることに。

蚊の化け物は先ほどとは比べ物にならない速度で此方に攻撃を仕掛けてきた。見る見るうちにダメージが蓄積される。原因は間違いなく先ほどの蚊の大群だ。あれは蚊の血液を吸ったことで、傷を癒す

のではなく、さらに進化することだったのだ。
己の油断を悔いる。もうなれば、魔力を暴走させていちかばちかを賭けてみるしか――。
少女がそのように思考し、化け物が突っ込んで来た瞬間――。
――横から前触れ無く、化け物に平手打ちを入れる少女の姿があり、化け物はそれだけで破裂するように消滅した。

「蚊……うぜぇの」
「――ッ!?」

3撃目

消滅した化け物の中から青く輝くジュエルシードを発見する。そこでなのはは先ほどの蚊の化け物がジュエルシードの融合体だと気付いた。

「なのはー！　……って何で裸なのッ!?」

「あ、ユーノくん今更来たの？」

背後のほうから森の奥から野原のほうに駆けてくるフェレットもどき。後から遅れてやってきたユーノがなのはが裸なのに赤面してそのことに突っ込みを入れる。自分が素っ裸なのに今更気付いたなのはは何も動揺せずにレイジングハートを取ってバリアジャケットを装備した。

とりあえずなのはは浮遊して復活をしようとしているジュエルシードに近づき、そのまま鷲づかみして封印する。ユーノの話では通常暴走したジュエルシードをこのように封印するのは不可能と言われるが、なのはの場合は平気でやってみせる。

「ほら、ユーノくんが遅れたから、あの子がすっごい頑張ってくれたんだよ？」

「あの子？」

言って、なのはは黒尽くめの少女のほうへ指を指す。少女は呆然としていたのをなのはに指を指されたことによってハッと意識を取り戻す。慌ててデバイスを構え、こちらに敵対するような素振りを見せる。

明らかになのはと同じく魔導師だ。すると少女の身体が一瞬光に包まれ、先ほどの傷が嘘のように回復した。ユーノから聞いた治癒魔法と呼ばれるものである。

その様子を見たユーノの表情が険しくなり、なのはユーノに訊ねる。

「あの子って敵なの？」

「分からない……でもジュエルシードが目的なのは確かなようだ！」
「ふーん」
ユーノは身構え、対してなのはは興味無さ気に半目で少女の方へ視線を向ける。先ほどの戦闘で少女のバリアジャケットはボロボロである。息を切らせており、先ほどのなのはのありえない力を目撃した為か、瞳が動揺している。
なのはは手に握っているジュエルシードを見る。もう封印処理がされているため、安全なのは確かだと分かると、それを少女に向けて投げ渡した。その行動にユーノは驚愕し、なのはを見る。
「……え？」
少女は投げ渡されたジュエルシードを受け取ると、信じられないような表情でなのはを見る。
「それはあげるよ。元々君が頑張って戦ったんだし、君が貰うべき報酬なの」
なのはは裏のない笑顔を見せ、少女に言った。ユーノは未だに信じられない様子でこちらを見ていたが、相手の少女を見る限り、何か事情があってジュエルシードを求めているように見える。だからユーノは、なのはの行動に対して口を出す事まで出来なかった。
一方、相手の少女は未だ信じられずに呆然としていたが、直ぐに自分のデバイスにジュエルシードを収納し、マントを翻らせる。
「――私の名はフェイト・テスタロッサ。今回は礼を言う。でも、次会ったら私達は敵同士だ」
少女――フェイトは言うと、踵を返してその場を風の如く去って行った。衝撃で風が舞い、なのはの髪が風に靡く。フェイトの言葉になのはは別段シリアスに考えはしないが、互いに目的が一緒ならば、早い者勝ちになるかなと思うのだった。

◇

しかし、事態は翌日に起こった。
「なのは！　大変だ！」

「……んー？」
朝にユーノの声で目を覚まし、なのはは気だるい眼を擦りながら布団から出る。右腕を上げて身体を伸ばしてから意識を切り変え、時計を見る。時刻はまだ一時間も起きるのが早く、ユーノに何事かを訊ねる。
「どうしたのユーノ君、まだ早朝だよ？」
「外見て、外！」
のんきななのはに対してユーノは窓に張り付いて声をあげる。なのはは何事かとベッドから足を出し、そのまま両足を床につけて立ち上がる。そのままユーノの元に行くように窓際まで行って、一緒に外の光景を見る。するとそこには昨日とは全く変わってしまった町の様子があった。
住宅街だった町が、一夜にして植物が生い茂るジャングルのようになっていた。しかも所々に見える木の幹は通常の何十倍と太く、明らかに非現実的な光景である。
「あらー、これはまた凄い状態になってるねー」
「そんなのん気に」
ユーノがなのはの通常運転の様子に呆れる中、なのははこの異常事態だというのに嫌に町が静かだと気付いた。町の至るところを見渡すが、人の気配が全くしない。それはいつもの戦闘の時と一緒で、まるで結界の中にいるような状況だった。
それについて訊ねる。
「ねー、ユーノ君。これって結界が張られているの？」
「――うん。おそらく誰かが張っているんだと思うけど」
その誰かは恐らく、昨日あったフェイトの事である可能性が高い。この状況の原因は間違いなくジュエルシードだ。恐らく樹木と融合した結果、町をこのような事にしてしまったんだろう。だがなのはとある疑問を浮かべる。
樹木は虫や動物とは違い、動いて行動するわけではない。ジュエルシードと融合したという事は、ジュエルシードが樹木の傍に落ちたという事だろう。だが、それならば何故このようなタイミングで暴走を

起こすのか。樹木であれば早々に暴走を起こしてもいいはずである。
「……まあ、考えるまえに、この状況をどうにかしなきゃだね」
なのはは机の上に乗せておいたレイジングハートを取り、それを掲げてデバイスを起動。一瞬で姿が変わり、バリアジャケットがその身に装備される。窓を開けて、二階から飛び降りる。別段飛び降りた程度でなのはには傷を負うことは無いが、折角なので飛行の練習がてら空を飛んでみる。
授業をサボって練習した結果があり、安定した飛行が出来た。これにはなのはも感嘆し、自由に空を飛ぶ。
「なのは！　あれを見て！」
「ん？」
ちゃっかし肩に乗っていたユーノが、町の中心に向けて視線を向ける、なのはもその視線へ顔を向けると、そこには一際大きな樹木が聳えていた。その樹木を中心として幹が生えており、なのはは今まで町の所々にあった幹はこの樹木の根だったことに気付いた。
ならば原因はあの樹木である可能が高い。ユーノにジュエルシードの反応を聞こうとした時、樹木に向けて稲妻のような魔力光が放たれる。一瞬の眩しさに視界が途切れるが、魔力光は樹木に当たる寸前に見えない何かに防がれて直撃はしなかった。
魔力光が放たれた方を見ると、そこには案の定フェイトが浮遊していた。フェイトはこちらに鋭い視線を送ってくる。おそらく邪魔するなということだろうが、なのはは気にせず手を上げて挨拶する。
その時――――。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーッッ!!」
勢いよく此方に突進を仕掛けてくる影があった。なのははそれを横に移動して回避する。その影は突進が外れたのを確認してスピードを緩める。その姿は犬耳をつけた二十台くらいの女性の姿だった。シャツにホットパンツという動きやすい服装に、手足にはバリアジャケットのような装甲が付けられている。俗に言う獣人という類かとなのはは理解する。
獣人はなのはに向けて、フェイトとは比べ物にならない敵意に満ち

た視線を送り、咆哮をあげる。
「フェイトの邪魔は……させないよぉぉぉーーーーーッッ!!」
その咆哮に、ユーノはたまらず耳を塞ぐ。なのははとりあえず獣人のところに移動し――――。
「近所迷惑!」
額にデコピンを当てて吹き飛ばした。
「アルフ!?」
フェイトが獣人の名前らしき言葉を叫ぶ。なのはは勿論手加減した為、死んではいない。朝に兄に繰り出す拳よりも威力は少ないため、怪我もあまりしてないだろう。なのははフェイトのほうへ視線を向ける。視線が合ったためか、フェイトが先ほどより鋭い視線を向ける。仲間が吹き飛ばされたのだから怒っても当然である。
別段なのははフェイトの敵になったつもりはないが、これだけの騒ぎを見過ごすことも出来ず、更にはこのままでは学校に遅刻してしまう。フェイトは既に息が切れている状態。恐らくなのはが起きる以前から攻撃を仕掛けて失敗しているのだろう。ならばこれ以上は時間をかけてはいられない。
なのはは早々に解決することにした。
一瞬で樹木に肉薄し、拳を構える。
「――――連続普通のパンチ」
巨大な木はなのはの連続で繰り出されたパンチによって、粉々に粉砕された。その影響で町に張り巡らされた根も消えて、ジャングル化した町は元どおりになった。だが、その爪あとも言える損傷は消えることは無く、一帯の住宅街は廃墟のような光景になってしまった。
なのはは樹木があった場所に浮遊するジュエルシードを掴んで封印する。それを先日のようにフェイトに向けて投げた。フェイトはそれを受け取る。
「あげるから、一先ず帰って」
「……」
フェイトはどこか悔しさを含めた表情を向けるが、ジュエルシードを手に入れたのか、こちらに敵意は向けなかった。踵を返して、その

まま立ち去ろうとする。
だが――。
「――そこまでだ！」
その声が響いたと思うと、なのはとフェイトの身体にそれぞれ光の輪のようなものが出現し、拘束される。魔力で出来た拘束魔法【バインド】だ。フェイトはもともと体力を消耗していたせいか、そのバインドに捕まり、身動きが取れない。
二人を拘束した本人が目の前に現れる。黒を基調としたバリアジャケットという点ではフェイトとは似ているが、フェイトよりは紺色に近い印象で、デザインも軍服をイメージしたものである。デバイスである杖を構え、それを此方に向けながら、その【少年】は言った。
「時空管理局、執務官のクロノ・ハラオウンだ。管理外世界での魔法の無断使用。並びにロストロギア関連の話について、詳しく話して貰おうか」
デバイスで出来た、ホログラムのようなモニターで何かの紋章とデータを見せてくるクロノ。恐らく紋章は警察手帳のようなものであり、データはジュエルシードのことについてだろう。魔法の無断使用ということは初耳だったので、肩に乗るユーノに訊ねようとしたが、いつの間にかその姿が無い。恐らく先ほど樹木に肉薄した際に落ちてしまったのだろうと理解した。
フェイトは拘束から脱出できない様子だったが、直ぐに先ほど吹き飛ばされたアルフが助けに来て、フェイトに掛けられたバインドを砕く。その隙にフェイトとアルフはこの場から逃げ出す。クロノは直ぐ様追いかけようとしたが、通信が入ったらしく、追撃しようとはしなかった。恐らくはなのはがいるから、フェイトは後回しという事だろう。
別段話をするのはいいのだが、このような犯罪者扱いされるのは気分が悪いため、なのははバインドを破る。
「あのー、こっちもいろいろ話がしたいんですがー」
「……ッ!?」
なのはが簡単にバインドを破ったことで、クロノが驚愕の表情を向

けてくる。同時に警戒態勢に入った。デバイスの杖を構え、攻撃を仕掛けてくる。恐らく抵抗したからと判断されたからだろう。魔力で出来た魔力弾【バレットシェル】が放たれ、その何発かをなのはは喰らうが、不自然にダメージが無い。攻撃されてもダメージは受けないなのはだが、この攻撃はそれとはまた違った感覚というものがある。

そんな不思議な感覚に思考していると、クロノは更に衝撃な表情で此方を見る。

「(僕のバインドを簡単に破った挙句、非殺傷とはいえ直撃のダメージをモノともしないだとッ!?)」

そこでクロノは感じた。この少女は危険だと。直ちに昏睡させて捕獲することを優先したクロノの行動は素早かった。高速化の魔法を使用し、なのはの周囲を素早く移動する。なのはの視界にクロノの姿を認識できないようにだ。

此方の姿を認識されなければ、クロノは優位に立てることが出来る。そしていざ、クロノは近接攻撃をなのはに仕掛けようとした時――。

「あのー、だから話を……?」

「――ッ!?」

直前のところでクロノは空中に防御魔法【プロテクト】を足場として代用し、飛び退く。なのはは確かにクロノの方を見て言葉を発した、つまりなのははクロノの姿を見切っているという事だ。ありえないとクロノは思った。

クロノ・ハラオウンという少年は魔導師の中ではかなりベテランであり、その強さもトップクラスである。しかし、そんな自分の動きをこの少女は見切った。つまりは自分と実力が同じ、又は上を行くという事。そう考えると、クロノの頬に汗が伝った。

「(――危険だ!)」

現状、この少女は管理外世界での無断の魔法使用。それもロストロギアに関与していると疑惑がある。しかもこちらが管理局と言っても抵抗してくる。さらに自分よりも実力が上の可能性。クロノは直ちにこの少女を拘束しなければと考えた。

いちかばちかでクロノは先ほどと同様に高速で動き回り、なのはへ攻撃を仕掛けようと突撃を仕掛ける。だが、なのははそれを回避し、そしてクロノの着地点に合わせるように拳を構える。

――だが運悪く、その拳は勢い余ってクロノの股間に命中した。

ドスッという鈍い音が響きわたる。

「あ！　ごめん。……いや、わざとじゃないの。寸止めしようとしたら勢いでぶつかっただけで……」

なのはは弁解するが、クロノは何事も無く着地し、平然を装うとするが――。

――男の痛みには、耐えられなかった様子だった。

4撃目

「改めて説明する。僕は時空管理局・執務官のクロノ・ハラオウンだ。先に説明したとおり、君たちには管理外世界での無断魔法使用、並びにロストロギアに関与している疑いがある」
「僕はユーノ・スクライア。こちらが高町なのは。僕達は……いや、僕は自分が原因でこの世界に落ちてしまったジュエルシードを回収しようとしていただけなんだ。彼女はただ、力のない僕に力を貸してくれただけで……」
　ユーノが戻ってきてクロノに対し、抵抗する気はないと伝え、最初になのはに詳しく話した内容をクロノに説明する。クロノはこちらに対して攻撃するのを中断して改めて説明を始める。その際に内股になってはいたが、気にしないでおくとする。ユーノは遠くから先ほどの様子を見ていたようで、彼も男である以上クロノの気持ちを察し、同情するように苦笑いを浮かべる。
「では、船のほうで詳しい話を聞かせてもらう」
　此方の事情を一先ず理解してくれたクロノはそう言うと、立体のディスプレイを開いて通信を行う。すると辺りの景色が一度暗転し、一瞬で別の空間へと移動を完了していた。例えるのなら、そこは科学の塊といった方がいいのか。
　無機物なものが重ねられて、科学の結晶だと言わんばかりに主張するその空間は、まるでＳＦ映画などに出てくる研究所、または軍基地。それとも戦艦の内装とでもいうのだろうか。なのはの知る情報から例えを上げたらそれらが一番、この空間を現すのに適している。
　クロノは一度デバイスを解除してから、此方の元から一歩二歩歩いて出入り口へと向かう。
「さあ、行くぞ」
「あ、うん」
　クロノが先に部屋の出口から出て行くため、なのはとユーノはそれ

に続いて後を追うように部屋を出る。廊下に出てみれば、こちらも未来的なデザインをされた空間が広がっていた。無機物であるが綺麗であり、通路の至るところには光が流れている。そして広い。
　ユーノにここはどこかを訊ねると、ここは時空管理局という組織の次元航行艦の内部だそうだ。時空管理局が役人のような職であることは何となく理解出来ていたが、次元航行艦というのは恐らく別次元の世界を行き来する船で間違いは無さそうだ。
　クロノの後を付いて行くが、ふと何かに気付いたクロノが歩みを止めて此方に振り返る。
「と、言い忘れたがバリアジャケットは解除してくれ。ここから先はセキュリティが高いから」
「あ、そっか」
　なのはは言われて自分がまだバリアジャケット装備なのに気付き、デバイスを解除しようとするが、自分の姿が寝巻きだったことに気付いてクロノに対し着替えは無いかと訊ねる。クロノは苦笑いを浮かべてから溜息を吐き、こちらだと指示して更衣室へと連れて行かれる。
　男女別れた入り口から、なのはは説明された女性更衣室へと入る。そこで名前のプレートが書かれていないロッカーを見つけ、そこにあった予備らしき女性用の軍服を見つける。サイズもまあまあ合っている為問題なく着用できたが、なぜ子供用の服があるのかが疑問だった。
「ん、サイズは問題なかったみたいだね」
「うん。でも何で都合よく子供用の軍服があったのかな？　子供の船員でも乗せているの？」
「まあね。でも最近成長期を迎えてから、すっかり体躯も変わってね。それは以前に彼女が着ていたものだ。あ、勿論洗濯されているから安心して」
　更衣室から出て思ったことをクロノに訊ねると応えてくれる。クロノといい、この船には子供が結構乗っているようだ。さてとと言い、クロノは下を向いてユーノへと顔を向ける。

「君もだ」
「え？」
　突然の振りにユーノは目を丸くして疑問の声を口にするが。
「それが本当の姿では無いんだろう？」
「あ、そうですね」
　言うと、ユーノは理解したように頷くと、彼の身体は光に包まれる。その姿は小動物のものからどんどん大きくなり、直ぐに人の形へと変化する。そしてなのはと同じくらいの体躯になってようやく光が収まると、そこにはなのはと同年代頃の少年の姿があった。
　パーカーのような服と短パンを着用し、髪は肩に届かない程度に伸ばしてある少年である。ユーノと思しき少年が瞼を開けると、なのはの方へ向いた。
「なのはにこの姿を見せるのは二回目になるのかな？」
「いや見てないよ、聞いてないよそんな話？」
「え？」
　ユーノはなのはの言葉を聞いて数瞬、驚いたように目を丸くして声も上げる。どうやら本当に姿を見せていたと勘違いをしていたようだ。とりあえずなのはは今までの暮らしを振り返る。そこにあるのは純粋にフェレットもどきとして過ごしていた自分の記憶であり、その中には家族で温泉に行って、ユーノも女湯側に連れて行った記憶が鮮明に残っている。
「クロノくーん。ここのフェレットもどきだった方に覗きの疑いがあるんですがー」
「ギルティだな」
「いや、ちょっと!?　違うんだよなのは！　あれは――――」
　クロノに確認を取り、処刑の判決が出た為、ユーノの弁明になど耳を貸さずにアッパーを決めた。ユーノの身体は宙を舞うどころか、まるでロケットが直上するようにして高い天井へと衝突し、天井から首から下がぶら下がる形となった。
「……生きてるよな？」
「加減したから大丈夫なの」

さずがに心配そうに訊ねてくるクロノに対し、なのははそう返す。事実アッパーの威力はいつも今朝に兄に対して繰り出しているパンチの何十分の一である。せいぜい気絶する程度である。だがこれから事情を説明しに行かねばならない状況なので、直ぐにユーノを天井から引き抜いて、クロノが治癒魔法をかけてユーノの目を覚まさせる。

天井の修復はどうと言う事はないという為、気にせずにしておく。引き続きクロノの後を歩いていると、前方の十字路から一人の女性が姿を現し、此方のほうを確認すると、笑顔を向けて駆け寄ってきた。

「その子たちが今回の関係者だね」

「ああ。これから艦長のところへ向かい、詳しい話をする」

「そっか！　……お？」

クロノと話していた女性はなのはへ視線を向けると、なのはの姿を見て目を丸くした。正確には、なのはの首からしたを重点的に見ていてだが。その視線を訝しげに思ったなのはは無気力な表情を若干浮かべると、女性は眉を八の字に歪めて、手を合わせて申し訳無さそうに笑う。

「おっと、ごめんごめん！　私はエイミィ・リミエッタ。この船のオペレーターをやっているんだ。一応クロノくんの部下に当たるのかな」

「だったら少し態度を変えたらどうなんだ？」

「でも年齢は私の方が上だよ？　地球では年長者を敬えって言うじゃない？」

「管理局の体制は実力主義だ」

軽口を叩くエイミィに対し、クロノは本気で言葉を返すのでは無くて半ば呆れたような態度で言葉を返す。どうやらこの二人ではいつも通りのやり取りなのだろう。満足したように笑うと、エイミィは忘れそうになっていた用件を思い出し、あっと声をあげてからクロノに伝える。どうやら艦長室ではなく、休憩室に来て欲しいという艦長からの伝言だそうだ。要件を伝えるとエイミィは片手を上げてその場から去って行く。

「用件がそれなら、通信で伝えればいいものの……」

そう呟いていたクロノだが、エイミィからしたらなのは達の姿を一目見ようとした理由があるように見える。溜息を吐いてから、此方だと指示する方向は先ほど向かおうとした正面の道から変えて左への道になった。

そして歩くこと数分。目的の部屋の前までやって来た三人。クロノは扉の前に設置されたインターフォンと思しき装置のボタンを押して、連れて来ましたと言うと、中からどうぞと返事が聞こえる。クロノは扉を開け、失礼しますと一声言ってから室内へと入る。後に続きユーノがクロノと同様に丁寧にお辞儀をして室内へ入る。最後になのはが室内へ入るが――。

「し、失礼します……」

緊張のあまりか、丁寧か元気良くか頭の中で混乱し、結果ぎこちない様子で室内へと入ってしまう。なのははまだ幼い少女なので、そこまで礼儀を気にする必要もないのし、そもそもまともに礼儀を示すという事を経験してないだろうから仕方ないのだが。すると室内にいた女性はそんななのはの態度に気にする素振りを見せず、優しい笑みを浮かべる。

しかしなのはが気にしたのはその部屋の仕様であった。まるで海外の映画が日本のイメージを間違って取り入れたようなアンバランスな和が装飾された部屋であった。彼女が上手の位置に座布団に正座していた為、クロノはその隣に、なのはとユーノはその向かいに座った。

皆が正座で座布団に座る。それから数分後には皆にお茶が用意され、さてと声をあげて上手の女性が話を始める。

「初めまして。私は時空管理局提督、リンディ・ハラオウンよ。この巡航艦【アースラ】の艦長を勤めているわ。宜しくね」

「こ、こちらこそ！　僕はユーノ・スクライアです！」

「高町なのはです」

リンディの紹介に対し、緊張気味に返すユーノ、そしてなのは。この場にいた三人が苦笑いを浮かべたのは言うまでもない。

それからは先ほどのクロノの話を事細かくした内容を話し、ユーノ

も事情を細かく丁寧に話す。
「あの黒い魔導師は何か分かるか？」
　クロノがこちらに訊ねてくるのはフェイトの事だ。しかしなのは達は彼女の事について名前と、同じくジュエルシードを目的としていることしか知らない為、その事を伝えるとクロノはそうかと呟いて腕を組んだ。リンディは緑茶に砂糖とミルクを入れたものをすすり、一息つくとなのは達に向けて説明をする。
「およその事情は分かりました。では、後の事は私たち時空管理局が引き継ぎます。あなた達はこの一件から手を引いて構いません」
　事情を聞いて、リンディは言う。それは一般人から事情聴取を終えた役人のように、しかし裏表ない笑顔で言う。しかしそれに対して声をあげたのはユーノだ。ユーノは思わず立ち上がり、リンディに頼むように言葉を話す。
「今回の事は、僕の責任でもあって――――！」
「――――君の手には余る一件だ。この件は管理局が請け負う。君たちは元の生活に戻れ」
　ユーノの言葉をクロノがばっさりと切る。確かにジュエルシードが今までのような町を破壊する。下手したら世界をも破壊する力を持っているとすれば、それは個人の力で解決できる事ではない。管理局のような取締り組織に任せるのが一番だろう。クロノは何なら記憶を処理しても構わないというが、ユーノは俯いて言葉を失うだけだ。
「ねえ、リンディさん。管理局がこの事件を請け負うことに関しては問題ないけど、その場合、わたし達を雇うことって出来ます？」
「何を……」
　なのはは手を上げてリンディに質問する。クロノは何を言っているのか理解出来ない様子だったが、リンディはその言葉を待っていたかのように笑みを浮かべた。
「そうねぇ。雇うというより、協力なら是非と思うわね。今まで関わっていた人から情報を聞けるのは此方としても助かることだし」
「な!?　かあさ――――艦長!!」

リンディの言葉に、クロノは驚いたような表情で声をあげる。一瞬母さんと言いそうになったのを見て、やはり血縁関係なのだなと理解するなのは。しかしリンディは気にする事なく言葉を続ける。

「――でも、協力関係を結んだら当然、あなた達の身に危険が及ぶ可能性があるわ。もしかしたら、私たちがあなた達の命を保障してくれる訳でもない。更にあなた達を捨て駒にする可能性もある。……それでもあなた達は私たちに雇われたいと？」

リンディの言葉に対し、なのはの返す言葉は決まっている。

「はい、大丈夫です。問題ありません！」

そう淡々と応えた。リンディの言葉に驚いたクロノであったが、なのはの即答にも驚くクロノである。隣で座るユーノは何をしているか分からない様子であったが、自分がこの事件に関わるには、これしかないと察したのか、ユーノも頭を下げてリンディにお願いする。

「――うん、ならこちらこそお願いできるかしら？」

すると先ほどまでの張り詰めた空気がガラリと変わり、リンディは笑みを浮かべて言ってくる。ユーノはほっとしたように笑顔を浮かべていた。

「でも、悪いことしちゃったわね、脅すようなことをして……」

「あ、でも――大丈夫です。なんとなくですけど、本気で脅している訳ではないって分かりましたから」

リンディの言葉に返したなのはに、リンディはあら、と驚いて口元に指を当てる。

なのははリンディがこちらを試しているのに直ぐに気がついた。始めに感じたとおり、リンディは裏表が無く、優しい人物だ。もし協力して事件に関わっていったら、少なからず命の危険になる可能性はある。管理局という職務故この人は恐らく子供を危険にさせる事は極力させない人だと、なのはは理解できたのだ。だから先ほどの問いに即答で返事をできたのである。

そのなのはの物言いに、精神年齢を見抜いたリンディは笑みを浮か

べ、改めて宜しくと挨拶をしてきた。

5撃目

海鳴市の住宅街で突如発生した廃墟化は、結界の影響により一般には竜巻の影響という事になった。そんな騒ぎになった数日後。住宅街の修復もある程度終わり、騒ぎはほんの数日で収まりつつあった。街の中心部では休日だという事もあり、賑やかな光景が広がっている。

そんな街の中心で、フェイトは食材の調達の為に買い物に赴いていた。私服である黒いワンピースを着用し、なるべく目立たぬように街を歩く。あえて街の中心にあるデパートやスーパーに買い物に行くのには、管理局の目から逃れたいという理由がある。

先日の管理局の執務官の乱入により、自分たちが管理局に目を付けられたと思ったからだ。恐らく間違いないだろう。故にジュエルシードの回収も地球から離れ、別次元にある世界で捜索を行っている。地球にあるジュエルシードは既に管理局側で回収されてしまったであろうが、まだ別世界にもジュエルシードは散らばっている。管理局が地球の捜索を行っている隙に、今のうちに別世界で隠密に行動しておく事にした。

だが拠点は地球にしている。オフィス街の高層マンションの一室を隠れ屋にしていたフェイトは、この地球の生活環境の良さを思って、なるべく身体を休める際にはこの世界にしようと決めている。魔力を放出しなければ反応に気付いて管理局が突入してくることも無いだろう。

だが念の為である。街の人混みに紛れて買い物するのが一番良いだろう。都会のスーパーとあって品揃えや価格も良いことから、利用する客も多い。都合が良い事だ。

横断歩道を渡るため、歩道信号が青に点灯するまで待つ。まだ赤の点灯時間が半分以上残っている為、フェイトは暇つぶしに向こう側で待つ人々を観察した。するとその手前にいた小さな子供の両脇にその両親が立ち、楽しそうに会話する様子が見える。

左手は母親が手を繋ぎ、右手は父親が手を繋ぐ。そして時折足を地面から離して宙に擬似的に浮いたりしてはしゃいでいる様子がある。休日になればどこにでもいる円満な家族の様子だ。

信号が青になり、親子とすれ違う。その際にデパートに行くことなどを楽しそうに会話するのを聞き、フェイトは若干寂しそうに顔を俯かせた。

かつて自分も、母親にあのように優しくして貰ったことがある。物心ついた時から父親はいなかったが、それを気にすることも無く、母が休みの際には絵本を読んでくれたりした。美味しいものを食べさせてくれた。一緒に添い寝もしてくれた。先ほどの子供の時のように、幼少の頃は同じように優しくして貰えていた。

しかし自分がある程度大きくなった為か、母はフェイトに冷たく接するようになった。いつまでも子供ではないという母からの思いなのだと自分に言い聞かせていたが、それでも寂しさは募るばかりだ。母がフェイトに構わなくなってからは、自分の世話は母の使い魔がしてくれた。魔法の教育、戦闘の訓練なども使い魔が全部してくれた。ある意味使い魔はフェイトにとっての育ての親だった。

だが使い魔はフェイトが魔導師として成長した時に、役目を果たして消滅した。次には母からジュエルシードの捜索、回収の命が言い渡された。少しでも母の仕事に役に立つのならと、フェイトは全力でジュエルシードを回収しなければならない。

立ち止まってはいけない。たとえ管理局から追われる身となっても。そう思い、フェイトは買い物を済ませ、自宅へと帰ると直ぐにアルフと共に捜索に向かった。

◇

転移魔法を利用して次元世界を行き来することが出来る。フェイトは魔力を探知されないように魔力放出を抑えながらデバイスを起動し、バリアジャケットを装備する。次に魔法術式を展開し、ヘリポートの白枠を沿う様に描き、屋上から転移して別世界へと転移す

る。個人で作った術式での転移の為、負荷が多少かかるが致し方ない。

着いた場所は一面ジャングルの原生世界。管理外世界にはこういった世界が幾つも存在する。ある世界は氷に包まれた世界であったり、海の世界であったり等。今回のこの原生林もその一つだ。地球の南米密林のように、凶暴な原生生物が沢山生息する為、気を引き締めなければならない。なるべく刺激しないように魔力は抑えて行動する。

岩山の上に着地し、辺りの様子を伺いつつ下に降りて森の中へ入る。アルフもいつ原生生物に襲われても大丈夫な様に人の姿から本来の狼の姿へと戻っている。フェイトはその横を歩き、ジュエルシードの反応があった地点へと向かう。

だがその際に異変に気付く。いくら魔力や気配を抑えて行動しているからといっても、通常ならば原生生物と遭遇してもおかしくは無い。緑が生い茂るジャングルには、それこそ地球の白亜時代のように肉食の生物が多数いるはずだが、今はその生物達の気配がしない。静か過ぎるのだ。肉食の生物の反応は愚か、鳥すらも鳴き声をあげていない。まるで嵐が来たかのように、原生世界は静かだった。

一体なにがあったのかと思考し、様子を見ながら歩みを進めると、道中に生物の亡骸が転がっていた。破裂したように散らばる肉片があり、同じような死体が無数転がっていた。訝しげに思いながらもフェイトとアルフは奥へ進む。

そして目的の場所に来て見れば、そこにはジュエルシードと融合したかと思える原生生物が、その巨体の胴部に大きな穴を空けて絶命していた。まるで何かに圧殺されたような跡と、既に無くなっているジュエルシード。更にその背後にあった光景――――中央が刳り貫かれた岩山だったもの。

「(……まさか)」

フェイトはそれらの光景を見て、地球で会った少女、なのはの事を思い出していた。確かにあの少女はフェイトが苦戦した化け物を二度も簡単に倒していた。彼女の仕業だとすればこの光景にも納得で

きる。だが彼女もあの時に管理局に目を付けられた筈だ。だとすれば、彼女も自分と同じように管理局の目を逃れて捜索活動しているか、彼女自身が管理局側の魔導師だった事になる。
いずれにせよ、早急にジュエルシードを回収しなければならない。管理局や、なのはよりも先に回収しなければならない。
――――母の為にも。

◇

同時刻。
管理外世界の一つである場所にて、なのはとユーノはジュエルシードの捜索を行っていた。今までは人が生息しない世界であったが、今回の世界には人類が存在し、発展を遂げている。地球ほど世界を覆うように発展はしていないが、それでも人里には街があり、ビル群などの建物が存在していた。
しかし地球と同じように魔法技術は発展していない為、なるべく騒ぎにならないように魔法は使わずに行動する。なのはからしたら空を飛べないという事以外は問題ないため、走って目的の地点へと向かう。格好としては短距離走を走る運動選手のようだが、そのスピードは桁違いだ。時速何キロ出ているか分からないが、少なくとも車の全速力より速い事は分かる。魔法を使わないようにと言われたユーノだが、この時はフェレットもどきの姿でなのはの肩に乗り、自分の周りに一切の負荷が掛からないようにプロテクトをかける。
やがてたどり着いた場所は、街から離れ、周囲が密林に囲まれた建物である。見た目を表すのなら、そこは映画などでよく見る研究所といった所であろうか。その建物を指差し、なのはは通信でエイミィに訊ねる。
「ここであってるの？」
『うん。反応はそこからするよ』
エイミィからの確認も取れた為、なのはは早速建物の中へ入ろうとする。

だがその直前、地震のような震えがあたりに響くと、直後に建物が崩壊を始める。何事かと慌てるユーノに対し、なのはは呆然とその様子を窺う。瓦礫がなのはへと襲い掛かり、その下敷きになってしまう。粉塵があたりを舞い、遠くから見た光景は、まるで何か爆発したかの様に見える。

「――――っ、ついに最強の生物を生み出したぞ！　素晴らしいッ!!」

興奮した男性の声が辺りに響いた瞬間、建物があった場所から巨体が現れる。例えるならばＳＦなどに登場するジャンアントと呼ばれる生物だろうか。二足歩行と、人と同じ姿であるが、その関節部位や頭部は骨が突き出していたり、筋肉がむき出しになっていたりする。

その足元に、先ほどの声を発したであろう男の姿がある。白衣を着ている、いかにもな科学者である。男は興奮気味に言葉を放った。

「まさか、あの石のお陰でここまで出来るとは……私は偉大なる研究を成功させた……させたのだッ!!　さあ、私の素晴らしき我が子よ！共に世界を支配しようではないか――――!!」

男が両手を掲げ、狂ったように声をあげた、その瞬間である。ジャイアントは足でその男性を踏み潰した。断末魔をあげる暇も無く、哀れな男性はこの世から絶命する。

ジャイアントは雄叫びを上げる。するとその辺りにあった密林と岩山が衝撃で吹き飛ばされた。それだけで、ジャイアントを中心として巨大なクレーターが出来上がった。

「……こ、これは……ッ!?」

先ほどの瓦礫から何とか脱出したユーノは、その身の小ささから何とか衝撃をプロテクトを張って耐えることが出来た。しかしユーノはこの恐ろしい生物に、言葉を失う。恐らく先ほどの男の研究によって生み出されたものに、ジュエルシードを融合させたのだろう。

人である領域には決して届かない。そんな恐ろしい生物が完成してしまったのだ。ユーノは人の姿に戻り、ジャイアントに向かって魔力弾【バレットシェル】を放つ。巨体すぎる故、頭部に命中はするが、全く効果が無いように見える。ジャンアントはまるで蚊にさされかの様に右手で頭をかいている。

『ユーノくん、危険だ！　早くそこから逃げてッ！』
「でも、このままこれを放っておいたら、街に被害がッ!!」
　エイミィがユーノに逃げるように言うが、ユーノとしてはここで逃げ出すわけには行かない。もしここでこのジャイアントを放ってしまえば、この密林から出たところにある街に被害が出てしまう。そうなるのだけは避けなくてはならない。
　だが自分ではこのジャイアントを倒すことは出来ない。それは知っている。だからあくまで時間稼ぎだ。今どこかに吹き飛ばされているだろう少女が来るまで。
　――と、その時である。
　ジャイアントの直ぐ足元の地面から何かが出てくる。
「……土の中ってひんやりしつつ、暖かさもあって気持ちいいんだね。なんだか眠くなってたの」
　それは先ほど瓦礫に埋もれたなのはだった。首から上だけを出して、眠たそうに欠伸をしながら言って来る。
　どうやら咆哮で辺りがクレーターになった際に、地面の中へ生き埋めになっていたようである。その姿をみてユーノは安堵し、同時に警戒する必要も無くなったと確信した。張り詰めていた空気が一転し、ユーノは魔法術式を解除して、攻撃からプロテクトに切り替える。
　ジャイアントは足元にいるなのはに気付き、何だと言わんばかりに睨むが、なのはは気にする様子もなく、首から下が生き埋めになっていたのにも関わらずに、よいしょっと簡単に脱出する。そしてジャイアントを見上げ――。
「……パンツ穿いたら？」
　場違いにも程がある能天気な言葉を放つ。それに対し、ジャイアントはなのはを踏み潰し、さらにその地面に拳を連打する。衝撃で地震が発生する。やがて息切れをおこしたジャイアントは身体を起き上がらせ、呼吸する。普通の人間であればこれで死ぬ。
　――だが。
「……気は済んだ？」

声が聞こえたと同時、ジャイアントの拳で崩壊した地面から何かが飛び出してくる。それはなのはの姿だ。ジャイアントはそれに反応し、下方へと視線を向けるが、気付いた瞬間には既に頬に衝撃が入り、頭部が破裂する。

「――――普通のパンチ」

なのはが放ったパンチで、ジャイアントは呆気なく絶命し、胴から下がそのまま重力に引かれて後ろへと倒れる。砕け散った頭部の肉片から、ユーノがジュエルシードを見つけ、それを回収し、封印した。

またしても拳一発で大災害レベルの相手を倒してしまったなのはに、様子を見ていた管理局のクルーは絶句していた。なのはがジャイアントを倒す寸前までは緊急に応援を送る態勢になっていたが、それも直ちに中止となる。クロノはその光景を見て、胃が痛くなるのを感じた。

一方、なのはは呆気なく倒してしまったジャイアントの亡骸と、自分の拳を見て、虚しい気分になった。

6撃目

管理局に協力してから数日が経った。
なのはは管理局の情報操作によって、現在は留学している事になっている。リンディはその際に高町家の家族に納得して貰えるよう、嘘半分、真実半分を混ぜた話をし、説得を成功させている。その為現在なのははアースラに泊り込みで探索活動に勤しんでいた。
だがここ数日で、著しくジュエルシードの探索が難を示しだした。反応が大分薄くなって来たのである。それをクロノに相談したところ、恐らくは自然環境でも深いところに落ちてしまったのではないかと推測する。既に残りのジュエルシードが散らばる世界は判明しているが、反応が薄いジュエルシードの場所を特定するのは困難である。そして極めつけが、その世界が海に覆われた世界であるからだ。
なのははユーノと共にアースラの艦橋まで赴き、中央のモニターで海の世界の様子を窺う。天候も雷雨が多い世界であり、迂闊に飛行すれば稲妻に撃たれる危険性もある。ゆっくりと探索できる状況ではなかった。艦長席にリンディが腰掛け、その斜め後ろにクロノが背筋を伸ばして立つ。因みにオペレーターであるエイミィはまた別に通信室がある為、そこでオペレーティングしている。
「さて、どうしたものか……」
クロノが呟いて、腕を組んで思考する。同じくリンディも顎に手を当てて思考の素振りを見せていた。ただでさえ広大な海の中で、発動前のジュエルシードの捜索は困難だ。それはなのはでも分かる。せめてこの悪天候さえ晴れれば、まだ探索は出来るのだが。
「でもそれは、あの子も同じだよね」
なのははフェイトの事を考え、呟く。クロノやリンディも同じ事を思考していた。彼女もジュエルシードを集めるものとして、この最後の世界には必ず訪れる。そうなれば衝突は免れない。しかし状況故に向こうが仕掛けてくるとは考えにくい。

可能性があるとすれば、こちらがジュエルシードを見つけた瞬間に奪いに掛かるのが合理的だ。
――だが。
『魔力反応あり！　これは……』
艦橋に響くアラームと共に、エイミィの声が聞こえる。それは驚きに満ちた声色をしており、クルー全員がモニターに映された状況を確認する。するとそこに映っていたのは、巨大な魔力を放出し、海中に眠るジュエルシードを暴走を誘発しているフェイトの様子があった。
余程追い詰められた状況だったのかは知らないが、こんな事をすればただでは済まない。この海域に眠るジュエルシードは一つではないのだ。それが同時に暴走してしまえば手に負えない状況になるのは明白である。
「……馬鹿な。自滅するだけだ」
クロノは目を細め、そのフェイトの様子を哀れんだ表情で見つめる。リンディも厳しい表情で様子を窺い、なのはの隣に立つユーノは心配そうに見ていた。モニターの中の映像は変わっていき、やがて魔力放出によって暴走誘発されたジュエルシードが海域と融合し、巨大な化け物としてフェイト、アルフに襲い掛かる。しかもそれは一つではない。海域に眠る全てのジュエルシードが暴走してしまった為、フェイトとアルフは八方塞の状況になっている。
「助けなくていいの？」
なのははクロノやリンディに訊ねる。
「その必要は無い。この状況では彼女たちの自滅が目に見えている。ならばこのまま様子を見て、消耗したところでジュエルシードを回収し、彼女たちも捕縛する。ここで下手に助けるより、そのほうが此方は危険を冒さずに済むし、合理的だ。もちろん見殺しにはしない」
つまりはこのまま漁夫の利を得ようとするのが、クロノやリンディを含め、アースラの考えである。確かにそれが効率的で、尚且つ最初に手を出したのはフェイトたちの方だ。これは彼女たちの自滅である。このままジュエルシードの暴走に押し潰され、力尽きるだろう。ユーノのように割り切れないような人物にとっては見ていて苦痛で

ある。
　ジュエルシードの暴走体は海水をまるで柱のように形成し、その海水から伸びるように枝分かれした部位でアルフの動きを抑えた。それに気を取られたフェイトが背後の暴走体に攻撃されてダメージを受ける。流石に数が不利である故、思っていたよりも早く倒れそうである。
　なのははその様子を見て、いつも通りの無気力な表情であったが、静かに拳を握った。
「……！　どこへ行く」
　踵を返したなのはに対して、気付いたクロノが問いかける。なのはは立ち止まり、背は向けずに答えた。
「……確かにここで何もしないほうが、一番良い方法だってのは分かってるの。でも私はね、困っている人間がいるなら助けたいと思うんだ。たとえそれが間違いだと言われてもね」
　言ってなのはは歩みを再開。その言葉を聞いたユーノが艦橋にある転送装置を操作し、起動させる。クロノは待つように声を上げるが、なのはが待つことは無い。転送装置に入ったなのはは海域へと向かった。

◇

　ジュエルシードが暴走する海域の傍に転移するのは危険な為、地点から遥か上空に転移させてくれた。重力に引かれて急降下する身体だが、なのはは冷静に首から下げているレイジングハートに起動の声をかける。それに反応し、レイジングハートが身体にバリアジャケットを展開してくれる。いつもと同様に杖は構成せずに、靴に羽のようなデザインがされた飛行魔法だけを展開してくれる。レイジングハートのＡＩの高さに感謝しつつ、なのはは空中で立つように体勢を整えて、雲から下に降下する。
　するとバリアジャケット装着時に発生した光に気付いたフェイトとアルフが此方を向く。アルフは早速こちらが邪魔しに来たと思い、

暴走体の拘束を破ると襲い掛かってくる。だがそんなアルフをなのはの前に現れたユーノがプロテクトを展開して抑えた。
「違う！　僕達は君達の邪魔をしに来た訳ではない！」
「何ッ!?」
　ユーノの言葉を聞いたアルフが信じられないような表情でこちらを睨む。フェイトはというと、暴走体から距離を取りつつ此方に耳を貸している状態だった。なのはは人差し指をユーノに見せて、それを上に上げるジェスチャーをする。それを理解したユーノが声を上げた。
「二人とも！　今すぐ上に飛んで！　なるべく海面から離れて!!」
「――――ッ!?」
　ユーノの言葉を聞いた瞬間の二人は理解不能といった様子だったが、次の瞬間にはフェイトが気がついたようで、アルフに上に飛ぶことを伝える。三人は上空に向かって一気に飛び、雲よりも遥か上に向かった。それを確認したなのはが、さてと声を上げて暴走する海域に目を向ける。
　そして急降下――――。

「――――普通のパンチ」
　なのはは海面に向けてワンパンする。と、次の瞬間には猛威を振るっていた海域が一瞬で吹き飛び、まるで隕石でも衝突したように海面が抉れて僅かに海底が丸裸になった。それは次第に広がり、やがてはこの次元世界全体から見て、その中心から円を描いて地形が変わる様子が窺えた。
　当然水飛沫もとてつもない量で、まるで雨のように降り注ぎ、衝撃で覆っていた雲も消滅する。上空に避難していたユーノ。そして驚愕するフェイトとアルフ。二人からすれば信じられない光景であり、それはモニターで窺う管理局もそうである。なのはは一切の魔法を使わずに、この海域ごと暴走体を消滅させたのだ。その影響で暴走が収まったジュエルシードが海面の上を浮遊している。
　なのはは呆然とするフェイトの前にまで飛び、相対するように傍に

寄った。そんななのはにフェイトは戸惑いを隠せず、目を丸くする。
「ねえ、フェイトちゃんだっけ？　何であなた達がジュエルシードを集めているのか、良かったら聞かせてくれないかな？　必死なのは伝わってくるし、仕方のない理由があるのは薄々分かる。だから、出来ることなら助けてあげたい。どうかな？」

手を指し伸ばし、なのははフェイトに訊ねる。なのはの表情はいつもの無気力なものではなく、笑顔であり、善意しかない事を伝えてくる。フェイトはそんななのはに対し、どうするかと心が揺らいでいた。最初に助けて貰い、そして次にもジュエルシードを譲ったなのはに、フェイトはそれほど敵意を向けていなかった。だからこそフェイトは戸惑い、指し伸ばされた手に対し、握るか握らないかを迷っていた。

――その時。

『――次元干渉⁉　……別次元から本艦及び戦闘空域に魔力攻撃来ますッ！　あと六秒ッ！』
「な……ッ⁉」

エイミィからの通信に驚愕するユーノは慌ててジュエルシードの確保に向かった。しかし隣にいたアルフにより突き飛ばされ、ジュエルシードの元へアルフが先にたどり着く。しかし、手に入れたのはたったの二つ。少なくともまだあった筈だと、辺りを見渡すと、気付けばそこにはバリアジャケットを装備したクロノがジュエルシードを先に三つ回収していた。

激昂したアルフがクロノに襲い掛かるが、クロノは自身のデバイスであるＳ２Ｕにてアルフを簡単に屠った。しかしアルフも意地があり、無理やりな体勢からクロノに食い下がり、追撃を仕掛ける。これにはクロノも一瞬驚いたが、態勢を直し、アルフの追撃を受け流し、回避する。

一方、なのはと対峙していたフェイトは天空を見上げ、呟く。

「母さん……」
そしてエイミィからの予測があった六秒後――――海域に紫の魔力光が襲い掛かる。
フェイトと同じく、雷属性であるこの巨大な範囲魔法に、流石のクロノも身動きが取れない。アルフはこの隙にフェイトと共に海域を離脱した。

◇

気がつけばアルフたちは薄暗い空間の中心に転移させられていた。ここには見覚えがある。フェイトの母――――プレシアの拠点である【時の庭園】だ。今居る場所は巨大な魔方陣の中心であり。四方には魔法石で構築された柱が立つ。この薄暗い部屋の唯一の明かりは壁にかけられた松明である。その松明も純粋な火ではなく、魔力によって構成された消えない炎であるが。
アルフは辺りを見渡し、眉根を寄せる。何故自分達がここに居るかなんてことは安易に理解出来る。そう思っていた矢先に、奥の暗闇から一人の女性が姿を現した。黒い衣服に身を包み、古代の魔女を髣髴とさせる女性――――プレシア・テスタロッサ。フェイトの母にして、この時の庭園の主。
そしてアルフにとっての、この事件の元凶である。
「――――貴女は退きなさい」
プレシアが酷く冷たい声色で言い放つ。本当ならば睨み、その喉元を噛み千切りたいと思うが、感情を抑えてアルフは先ほど自分が回収したジュエルシードをプレシアに渡し、その魔方陣の中心から身を引く。フェイトは先ほどのプレシアの範囲魔法に巻き込まれた事で、ぐったりと魔方陣に倒れ込んでいる。そんなフェイトに向け、プレシアは目線を見下し、その手にデバイスで構築させた鞭を握る。
腕を上げ、鞭で思い切り叩く。
「があ――――ッ!!」
悲痛にフェイトが声を上げるが、プレシアは更に叩きつけていく。

何発か叩いた頃にプレシアは一度腕を下げると、空いている手をすっと上げた。すると四方の柱から拘束魔法が展開され、フェイトの身体は無理やり宙に浮かされる。

そして再び鞭で叩く。先ほどよりも悲痛な叫びが、この広い空間に響き渡る。それも煩いと言わんばかりにプレシアは更に強く鞭で叩いた。とても見ていられるものではない。アルフはフェイトの使い魔で、それ以上に家族と同様だ。今すぐにでも助けたい。だが、これはフェイトから止められているが故に、顔を俯かせているくらいしか出来ない。

それから数十分経った頃。プレシアはフェイトからジュエルシードを預かり、それらを浮遊させた。

「――――たった、これだけ」

「……ッ!!」

流石にアルフは怒気に包んだ視線をプレシアに向けた。この女は、フェイトがどれだけ苦労してジュエルシードを集めていたのか、知りもしないくせにと、その思いを喉から出るのを必死に我慢する。そしてプレシアはジュエルシードを収め、部屋の奥へと消えて行った。

「フェイト!!」

慌ててフェイトの元へ行く。今までもこうした暴行はあったのだが、先ほどのダメージもあって、今回のフェイトは虫の息も良いところ。アルフは治癒魔法は得意ではないが、出来る限りの治癒を試みる。だが、その傷ついた身体と、みみず腫れの跡を見て、流石に我慢の限界が訪れた。

気を失ったフェイトを寝室まで連れて行き、アルフはプレシアの居る部屋へと向かう。

扉があるが、アルフはそれを普通には開かず、その拳で破壊して部屋へと侵入する。プレシアはそんなアルフの行動に対し、驚きもせずに椅子にもたれ掛りながら、哀れんだ視線を向けるのみ。そんなプレシアに更に怒りが湧き上がったアルフは地面を蹴り、プレシアの元まで一気に跳躍した。

「あんたは……あの子の母親だろう!!　何でこんな事が出来るんだ

よッッ!!」
今まで我慢してきた感情を爆発させ、プレシアの胸倉を掴んで怒号を浴びせる。しかしプレシアは特に反応は見せずに、魔力の放出でアルフを吹き飛ばした。
「――――使い魔の躾も出来ないのね、あの子は。もう良いわ、貴女は消えなさい」
プレシアは言うと、アルフの居る位置に範囲魔法を食らわせた。威力は凄まじく、それはアルフの身体ごと時の庭園から吹き飛ばすくらいに。
「……ここはもう、駄目ね」
自ら破壊してしまった部屋を見て、プレシアは部屋を移動する。広い廊下を歩き、薄暗い空間を進んでいく。美しく装飾されている筈の館の内部だが、手入れする者がいない為か、酷く荒んでいる。だがそれを気にすることもなく、プレシアはとある部屋の前までたどり着く。
扉を開けると、そこは今までの西洋な装飾とはかけ離れた、近未来のデザインが施された空間が広がっていた。例えるならば、研究所の内部といった所であり、その室内にはポッドのようなものが乱立していた。その多くの中には人間らしき形をしたものがある。上半身だけ出来上がっている者がいれば、皮膚のない者、骨と内臓のみの者と、延々と続いている。
プレシアはその中のポッドの一つを見て、更に近づいて、そのポッドを愛しく思うように張り付く。
「もうすぐ……もうすぐ貴女に会えるわ――――アリシア」

7撃目

空を見上げる。雲がまばらに散らばった晴天だ。約一ヶ月くらい経ったからであろうか、暖かい風が身体を包んでくれる。先日まではまだ冬の寒さが残っていたため、防寒着を着込まなくても平気と感じてきたのは春が本格的に訪れたということだろう。だが最近は季節の変わり目が急変している傾向がある為、暖かいと感じた数日後には暑いと感じるかもしれない。過去の穏やかな季節は一体何処に行ってしまったのだろうかと考えつつ、見上げた視線を下に戻す。

視線を正面に向ければ、そこには広大な敷地と、その中央に聳える屋敷が視界に飛び込む。なのはの数歩先には私服姿のアリサとすずかが居り、立ち止まっているなのはを呼ぶアリサの声が聞こえる。現在久しぶりに地球へと戻り、アリサの家にお邪魔している所だ。

ジュエルシード回収後。あの範囲魔法の攻撃や、フェイトの母さんという言葉から推測した結果、管理局はデータベースから今回の容疑者を推測していた。

プレシア・テスタロッサ。クロノやリンディたちといったアースラクルーと同じ【ミッドチルダ】という世界の出身者らしい。かつて研究者として有名だったが、実験失敗後に行方が分からなくなった人物である。魔導師としても条件付だがＳＳというランクに位置するらしい。確かにあの範囲魔法からその実力も納得がいく。

プレシアには娘がいたということだが、その詳細は――。

「なのはー」

「あ、うん。ごめんごめん」

アリサに呼ばれた為、後に付いていく。

容疑者が判明し、介入した際に逆探知した結果、拠点を現在追跡中ということだ。その為、なのは達は休暇という形で今日は地球に戻ってきている。アリサとすずかと世間話をしていると、アリサが珍しい犬を拾ったという事で、今バニングス邸にお邪魔している。

犬は結構な大型で、外にある檻に入れてあるそうだ。別に凶暴という訳ではないらしく、怪我を負ってることもあるのか大人しいという事だ。その話を聞いて特に興味は沸かなかったのだが、アリサが最後に言った犬の特徴――――。

額に宝石のようなものが付いているという事だ。

その特徴から、なのはとユーノの頭にはアルフの姿が想像できた。その確認にアリサの家に来た訳で、その檻に入る犬の姿を見る。

『やっぱり、あなただったの』

『……あんたたちか』

檻に入っていたのは、予想通りに獣の姿のアルフだった。怪我した箇所をアリサの家の者によって包帯を巻かれ、応急処置をされている。恐らく自身でも治癒を行っているのだろう。アリサとすずかに悟られないように念話で会話をする。

『どうしたのその怪我？　あの時の怪我ではないよね。フェイトちゃんは？』

アルフは常にフェイトと行動しているイメージがあり、なぜアルフだけがこんな所にいるのかを訊ねる。するとアルフは顔を俯いて答え辛そうになっていた。今すぐ話を聞ける状況では無さそうだったので、なのはの肩に乗っていたユーノが飛び降り、檻の中へ入っていく。アリサが危ないよと注意するが、心配ない事を伝え、そのままユーノに任せてアリサたちと共に屋敷の中へと入る。

その後、テレビゲームなどをして遊んでいたが、頭に念話でユーノから話しかけられる。アルフから聞いた事を聞いて、なのははこの事件の重さを改めて思い知らされた。

◇

明け方のため、日がまだ昇っていない為に辺りはまだ闇夜に包まれている。辺りを見れば、遺跡のような建造物が乱立しており、ほとんどの物は海面に沈んでいるが、それがまた幻想的な光景に見える。なのははその建造物の屋上で、静かに波の音に耳を傾けていた。

背後に気配がする。その正体は見なくても分かる。フェイト・テスタロッサだ。
「フェイト、もう止めよう？　あんな女の言うこともう聞いちゃだめだよ。このままじゃ……不幸になるばっかりじゃないかッ！　だから――――!!」
なのはの居る場所から離れた場所にある廃ビルの屋上に人の形態になったアルフ。そして隣にユーノがいる。アルフはフェイトに向けて説得を試みるが、フェイトはそれに首を振って拒否を示した。決してアルフを無下に扱っている訳ではない。
「――――それでも私は、あの人の娘だから」
そう、きっとそれが今の彼女の正義だろう。誰もがそうやって割り切れる訳ではない。それが子供なら尚更だ。だからなのははフェイトのほうに向き、視線を合わせる。フェイトの表情は、初めて会った時と同様に寂しい瞳をしていた。その理由が今なら分かる。それ故に、なのはは言葉を言い放つ。
「――――ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいって訳じゃ、もっとない。きっかけは、きっとジュエルシード。だから賭けよう、お互いが持ってる全部のジュエルシードを」
言って、なのはは自分達が所有するジュエルシードを出現させ、それらを周囲に浮遊させる。それに呼応する様にフェイトも自身の持つジュエルシードを出現させる。アルフとユーノはその光景を最後に、この空間から転移し、姿を消した。
既にフェイトはバリアジャケットを装着している。なのはもレイジングハートに命じ、装着する。いつも通りに杖は構成しないので、なのはは自身の唯一にして絶対の武器である拳をフェイトに向けて宣言した。
「それからだよ、全部それから。――――フェイトちゃん……君の全てはまだ、始まってすらいない。だから始めよう。この戦いで君の全てを始めるんだ。だから、今の全てを――――私にぶつけて!!」
それが始まりの合図だった。瞬間、フェイトは踏み出しと同時に呼吸を止め、飛行魔法を利用し、足場であった廃墟の残骸を粉砕して瞬

発。直上に飛び、重心を前へと落として下方へ視線を向け、デバイス【バルディッシュ】に合図する。
フォトンランサー。フェイトが使う遠距離魔法。元より雷変換資質を以って生まれたフェイトは変換工程を無視して魔力を変換できる。それ故に瞬時魔力弾【バレットシェル】に雷属性で生成したものが連鎖的に発生することが可能。
放出。なのはの居た場所に雷が降り注ぐ。
通常の魔力弾【バレットシェル】よりも弾速が速いのがこの攻撃の最もな特徴だ。だが故に誘導する性能を犠牲としている為、直進しか出来ないのがデメリットだ。しかしなのははそれを冷静に回避。一歩で数メートルの距離を越え、一瞬で数メートルの建造物の上にまで移動する。体重を右手に集中し、それを自身の足場である廃ビルの床に叩きつける。衝撃を注ぎ込み、影響でビルは砕け、その瓦礫が海面に沈む前に、瓦礫の中で最も大きいものを掴んで、それをフェイトの元に投げる。
だが回避される。
速さにフェイトは特化している。故にバリアジャケットも装甲を犠牲に速度を優先とした構成にしており、魔力資質雷も利用して、通常の魔導師でも計り知れない速さを纏っている。簡単に言ってしまえば攻撃と速さにステ振りしているのだ。故に此方が小さな破片を投げつつ移動しても、ピンポイントまで回避して、残りをバルディッシュで切り払っていく。
足場が沈んだ為、飛行魔法を展開して宙に浮く。フェイトの姿は既に無く、風の切る音が聞こえている。だがなのははそれを視界に納めようとせず、無気力な表情で正面を見るだけである。ビル群の間のところを過ぎた辺りから、フェイトはバルディッシュをサイズに変形させ、そのフォームに付いた魔力刃をこちらに振って飛ばした。ブーメランのように回転し、フォトンランサーのような速さは無いが、誘導性能がある為、変則的な動きであるが確実になのはへと襲い掛かる。
それを拳で破壊する。だがフェイトの姿は既にビル群の間には無く、なのはの背後へと姿を現す。

回避するよう身体を動かすが、それを超える速度でフェイトは追いかけ、そして軽々と一撃を此方の身体へと叩きつけてくる。ヒット&アウェイの攻撃であるが、叩き込んでくるのは一撃ではなく数撃。自身の身体よりも大きい鎌を振り、最大で四撃斬り込む加速がそこにはあった。

身体で受けて、フェイトの残撃を無防備に受ける。通常ならばこれで身体を切り刻まれて絶命するが、なのはの身体にはせいぜいバリアジャケットに穴が空く程度である。それはフェイトにも分かっている。だが確実にダメージは入っている筈。

無呼吸運動に等しい連続での数瞬の動きは此方の体力を激しく消耗する。息切れを狙われないように、フェイトは連撃の最後、なのはの背後に回ってからバルディッシュをデバイスフォームに切り替え、魔力を集中。そして放つ。

「――サンダー……スマッシャァァァーーーーッッ!!」

魔力を集中して放つ砲撃魔法だ。通常の砲撃魔法は集中して放つ故に、発動まで数秒掛かるが、フェイトは斬撃をしつつ魔力を集中していた為に、およそ数瞬で準備が完了。さらに雷変換資質に加え、その砲撃は通常の砲撃よりも破壊力が高い。

それを至近距離でなのはにぶつけた。防御する暇も、回避されてもいない。直撃だ。火力で舞った煙に紛れないように、直ぐ様飛び退いて距離を取る。バルディッシュのデバイスフォームが微かに位置がずれ、熱を排出させる。

フェイト自身も息を整えて煙が晴れるのを待った。その時に一際強い風が流れ、舞った煙が一気にかき消される。

――そこには当然のように浮遊する、なのはの姿があった。

思わず眉根を寄せた。いや、予想はしていた事だ。強大な力を素手で繰り出す存在は、己の身体もそれに耐えられなければならない。つまり攻撃と身体の耐久力は比例する。なのはに致命傷を負わせるには、それこそ膨大な魔力に破壊力をぶつけなければならない。

通常レベルの殺傷技など意味を成さない。

「(――どうする……!?)」
思考しても、この相手をどうすれば倒せるのか。少なくともなのはにダメージは入っている筈だ。バリアジャケットの損傷を見れば分かる。だがそれは致命傷ではない。身体を動かすには問題ない。大した影響は出ていない。かすり傷に等しい。
このまま連続で攻撃を繰り返せば間違いなく倒せる。倒せるが、そうなる前にフェイトの体力が持たない。しかも同様の攻撃が続くとも思えない。下手すれば次に見切られ、そして反撃を食らうのが目に見える。絶対になのはの攻撃を食らってはいけない。
呼吸を整えつつ、なのはの動きに注意する。瞳が乾き、瞬きをする。
その瞬間――。

「(――居ないッ!!?)」
フェイトの視界からなのはが消える。瞬時に周囲の魔法探知を行うが、なのはは魔力に頼っていない為、意味を成さず、フェイトは自身の目の視力に強化を行う。四方を見渡し、姿を探す。そして見つけた。とても通常の視力では見えない速度で、なのはは海面を走っている。通常の速さで海面を走れば波が荒れる筈なのだが、それのラグがかなり空いていることから影響がかなり遅れている。
「――サンダァー……レイジッッ!!」
バルディッシュをシーリングフォームに切り替え、それを天空に突き出す様に構える。すると突如稲妻が発生し、海面に突き刺さる。本来は拘束魔法【バインド】能力を持つ雷光で範囲内の目標を拘束し、動きを止めた上で雷撃により一斉攻撃を行なう技だが、この場合はあえて精度を出鱈目にして範囲を広げ、高魔力を海面にぶつける。故に海面に伝った雷光の魔力が海面を伝って範囲を広げる。
辺り一体が閃光に包まれ、巨大な水飛沫が起こる。フェイトは息を切らし、バルディッシュから熱を放出させる。流石になのはに影響を与えていると信じたいところであるが、その姿が見当たらない。攻撃には範囲内に入れ、外したとは考え辛い。
瞬間、肩を叩かれる。

背後になのはが居た。

「――――ッ!!」

振り返りつつ、その勢いを利用しバルディッシュで一閃。手ごたえは無い。だがこれでいい。攻撃される前に引き剥がすことが出来れば、一先ず意識を切り変えられる。なのはは後ろへ飛び退き、飛行魔法で浮遊して足場を固定し、フェイトへと視線を向ける。息切れをしている様子は無い。こちらも集中して攻撃を仕掛け、なのはもそれに伴い体力を消耗している筈なのだが、その差が余りにも有りすぎる。

なのはに動きは無い。此方の攻撃を待っているようだ。それで余裕の態度が窺えるのだが、フェイトにはそれを利用しない手はなかった。故に呼吸を充分整えてから、自分の持つ最大の攻撃を繰り出す事に決める。

空いている手を上に掲げる。バルディッシュは使用しない。自分の持つ魔力を使い、フォトンスフィアを生成していく。その構成をバルディッシュにサポートして貰い、更に数を増やす。生成されるフォトンスフィアは三八基。

「――――あああ

実に命中させた。それならば、倒している筈である。倒せている筈なのだ。先ほどと同様に風で煙が晴れると、そこには――。
何の姿形と無い。
おかしい。確かに普通なら塵も残さない技であるのは確かだが、なのはの身体能力から考えれば身体の形が残っても良いはずである。それが無いという事はつまり――。
「(後ろ――!?)」
――振り返り、気付いた時には、フェイトの背後に居たなのはが、此方に拳を構えていたのが見える。

――死。その文字が頭に浮かび上がる。
だがなのはのその拳がフェイトの身体に触れる事はなく、その顔の直前で停止された。寸止めされたのである。
呆然としていたフェイトに、なのはが拳を解いたその手で軽くフェイトの額をペチッと叩く。そして二カっと笑みを浮かべた。
「私の勝ちだね!」
「……う、ん」
フェイトにはもうどう返せば良いのか判断が間に合わず、肯定することしか出来なかった。
だがこれだけは分かる。自分は完全に負けて――なのはには勝てないという事が。
「……」
背後を見る。視界に映った光景は、先ほどの寸止めの衝撃で吹き飛ばされ、跡形も無く破壊された遺跡だった。

8撃目

一旦残っていた廃ビルの屋上に着地して、なのははフェイトと向かい合う形となる。フェイトは未だに呆然としており、実感が沸いてないようである。肩をトントンと叩いて意識をしっかりさせるように気遣ってから、フェイトの意識がはっきりするのを待つ。その間になのはは何かに注意するように辺りを見渡していた。

なのはがフェイトに勝ったという事実が生まれたが、だからと言ってフェイトも気持ちの整理が付かないのが本音である。だが現にアルフが管理局の元にいるのだから、抵抗はしたくない。

その時、クロノが駆けつけ、続いてユーノとアルフも現れる。ユーノはなのはの隣に立ち、アルフはフェイトの傍に寄る。なのははクロノの登場に意外そうに目を丸くした。

「あれ？　なんか予定と違うけど、何かあったの？」

この戦いの前に、事前にクロノとリンディに話を通し、作戦を立てていた。なのはがフェイトに勝つのはほぼ確実と思われていたため、そこは問題ないが、その後にジュエルシードの回収の事である。アルフの話から聞いたプレシアの事から予想するに、彼女がジュエルシードを簡単に渡すとは考え難い。恐らくこの戦いが終わるのを見計らい、ジュエルシードを強引に奪おうと、また介入してくるのを予想していたのだ。

だがいくら待ってもプレシアが介入してくる気配は無く、疑問に思ったクロノが確認に来たという訳である。

「嫌な予感がする。――ジュエルシードを見せてくれないか？」

クロノはフェイトに言うと、フェイトは大人しくデバイスに収納したジュエルシードを出現させ、クロノに見せる。クロノはその一つを掴み、凝視すると表情を強張らせた。

「……偽物だ」

「――え？」

クロノの言葉に、フェイトは信じられない表情で声を漏らす。そんな事はない。今回の事は母のプレシアに必死にお願いして許して貰ったことだ。プレシアはそんなフェイトに絶対に勝てと言い放ってジュエルシードを託して貰ったのだ。それが偽物である筈がない。恐る恐るジュエルシードを掴み、確認する。預かった時は信用して確認をしていなかったが、偽物である筈はないと心に言い聞かせ、バルディッシュに問いかける。

だが、バルディッシュは言い辛そうに――偽物だと答えた。

「そ……んな……」

フェイトはその場に膝を突き、地面に手を付いてがっくりと項垂れた。アルフは直ぐ様フェイトの肩を抱き、心配そうに声をかける。ジュエルシードの偽物は、その正体がバレると分かった途端に砕け散る。

その瞬間だった――。

『フェイト。聞こえているかしら?』

「母……さん……?」

フェイトに向けて通信が入り、それが勝手に起動して立体ディスプレイが発生する。そこに映るのは一人の女性――プレシア・テスタロッサからの通信である。アルフはその画面を睨めつける。アースラは直ぐ様それを傍受して、フェイトと同様のディスプレイを出現させ、アースラの艦橋にはモニターでそれが映される。

エイミィは直ぐ様逆探知して、プレシアの拠点【時の庭園】の座標を突き止める。リンディは座標を突き止めたと同時に、時の庭園へと突入部隊を出撃させた。アースラの出撃エリアにある巨大な転送装置で突入部隊が一斉に時の庭園へと転移する。

一方、ディスプレイの映像からはフェイトへ向けての言葉が流れる。

『やはり貴女は駄目ね、全然使えないわ。やはり――失敗作という訳ね』

「――失敗作……?」

フェイトはプレシアが一体何を言っているのか理解出来なかった。

アルフに支えられつつ、立ち上がりながらその言葉に耳を傾ける。フェイトは目を丸くしていたが、この場に居る全員は今回の事件の詳細を知っている故に、眉根を寄せていた。
『だから期待なんてしてなかったわ。こんな事になるだろうと、ジュエルシードは全部偽物』
　言うとプレシアは自身の身体を軸にジュエルシード九つを出現させる。そして踵を返して背後にあるポッドのようなものを見た。当然そのポッドの中身がモニターに映される。中にあったものは――――フェイトと瓜二つの少女だった。
　フェイトは訳が分からず、思考が停止する。プレシアはポッドに手を当てて言葉を続けた。
『……もう駄目ね、時間がないわ。たった九個のロストロギアでは【アルハザード】にたどり着けるかどうかは分からないけど――――でも、もういいわ。終わりにする』
　プレシアはポッドに触れたまま、モニター越しにこちらを睨みつける。
『この子を亡くしてからの暗鬱な時間も……この子の身代わりの人形を娘扱いするのも。――――聞いていて。あなたの事よ、フェイト。せっかく【アリシア】の記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない私のお人形。だけど駄目ね。ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりになんかならないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言うことをよく聞いてくれた。アリシアは、いつでも私に優しかった。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった』
　プレシア・テスタロッサは実験失敗の際に、奇跡的に生還するも、実子アリシア・テスタロッサを事故で亡くし、それが原因となって精神の均衡を崩している。その後違法実験で問題になった【F計画】に参加して人造生物の開発と記憶移植の技術を学び、その後行方不明となったのが、彼女の履歴の全てであった。しかしクロノが【フェイト】

という言葉から、心当たりがあったのだ。
彼女が最後に行っていたのは、使い魔とは違う、それらを超える人造生命の生成、そして死者蘇生の秘術と呼ばれていたもの。
彼女が行った違法研究――【プロジェクトＦＡＴＥ】。当時の開発コードの名前だったのだ。
恐らくフェイトという名前はそこから取って付けられたものであろう。
それらの話をなのはとユーノは聞かされ、まだ推測だったのだが、アルフから聞いたフェイトへの虐待から、確定的なものへ変わった。アルフにもその話を聞かせ、当然彼女も信じられないような態度を取ったが、フェイトにしていた虐待から納得もいった。
だが、この現実は余りにも辛すぎる。フェイトの気持ちを考えれば当然だ。
『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形……。だからあなたはもういらないわ。どこへなにとも消えなさい！』
フェイトの中で信じていたものが崩れていく。昔の優しい母さん、その笑みを向けられていたの自分ではなかった。その笑顔を見たくて今まで戦ってきたが、その笑顔が自分に向けられることは決してなかった。それはアリシアの時の記憶であって、自分の記憶ではない。
自分にある記憶は、プレシアに虐待されているだけの――。
『良いことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね、私はあなたの事が――大嫌いだったのよ』
「――ッ!!」
プレシアの言葉が止めとなり、フェイトの中で信じてきたものが、今、完全に壊れた。
身体から力が抜けて、気を失う。アルフはフェイトに声をかけるが、意識を取り戻す気配は無い。その影響でバリアジャケットが解除され、デバイスも解除。バルディッシュも携帯状態に戻るが、その三角形の形をしたデバイスが、フェイトの手からすべり落ちて虚しく地面に落下する。なのはは直ぐにバルディッシュを拾った。
プレシアの通信が切れて立体モニターが消える。だが、その代わり

にクロノの元にエイミィから通信が入った。
『クロノ君！　たった今突入した部隊が全滅して』
「なに――――ッ!?」
　エイミィからの通信で、クロノが声を上げる。通信の向こう側からはアースラ内部に響くアラームが聞こえ、事態の深刻さが伝わってくる。クロノは直ちにアースラに戻ることを伝え、通信を切って此方を振り返る。とりあえずフェイトをアースラに連れて行くことを伝える。アルフもそれに了承し、フェイトを抱きかかえる。ユーノは皆が一斉にアースラに戻れるように魔法術式を展開し、アースラとの転送魔法と繋ぐ。その魔方陣の中へと入るアルフ。そしてクロノ。
　なのははバルディッシュを見て、次に空を見上げる。クロノがなのはに何をしているのか訊ねる。
「――――ねえ、クロノくん。私も行くよ」
　時の庭園に突入することを、クロノに伝えた。

◇

　アラームが艦橋に響き渡り、室内が赤く点滅する。それと連鎖するようにクルーが慌てた声を上げた。
「次元震発生！　震度、徐々に増加しています！」
「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測地まで、あと三〇分ッ！」
　アルフは気を失ってしまったフェイトを医務室に連れて行き、なのはとユーノ、そしてクロノが艦橋に着く。三人はデバイスを解除せずに、バリアジャケットを装備しつつ状況を確認。九つのジュエルシードの発動によりアースラ内が騒然となる。次元震やら次元断層やらはなのはにはよく分からなかったが、ただ事ではないことは理解した。リンディは冷静に指示を出し、クルーは落ち着きを取り戻してオペレーティングに戻る。
　クロノは状況を理解すると、リンディに出撃願いを申し込む。
「現地に向かい、元凶を叩きます。彼等と共に、出撃許可を！」

リンディはその言葉に、数秒思考する。クロノの出撃は許可できる。むしろそうして貰わなければならない状況だ。問題はなのはと、現地の協力者を危険に巻き込んではならないという事だ。リンディは管理局の局員として、協力者、しかも子供を危険にさせる訳にはいかない。

ジュエルシードの回収や、フェイトとの決戦など、今までも危険はあったが、今回のこれは一線を越える状況である。だが、突入部隊が全滅したのから察するに、クロノだけでは明らかに戦力が足らない。クロノ一人を突入させる訳にいかないのも事実だ。

けたたましく鳴るアラームの中、リンディは険しい表情であるが、此方に視線を送ってくるなのはとユーノを見て、その二人が出撃を願っている様子が伺えた。その為、苦渋であるが出撃を許可した。クロノは敬礼してリンディに感謝の意を表しつつ、なのはとユーノを連れて転送装置の中に入り、三人は時の庭園へと向かう。

◇

時の庭園は、次元の挟間に浮遊する巨大な島のような存在であり、その敷地の中央には城が聳えている。

三人が転移してきたのは城の正面。荒れた噴水などがある庭の中央であり、入り口の扉が視界に見える。次元震の影響だろうか、大地が地割れを起こして森や建造物が次々と崩壊していく。その際に地面の所々に異色の空間の穴が広がっているのが確認出来る。

「その穴、黒い空間がある場所は気を付けて！」

「え？」

「虚数空間。ありとあらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ！」

クロノに訊ねると、虚数空間と呼ばれるものであり、ユーノの詳しい説明によると魔法が一切発動しない空間で、落ちれば最後二度と上がって来れないという。

穴に落ちないように扉に向かうが、扉の前の空間が歪む。そこから

三メートルはあろうかという巨体の鎧が数十体出現した。クロノはＳ２Ｕを構え、生体反応が無いことを伝える。どうやらプレシアの手によって作られた傀儡兵らしい。傀儡兵は迎撃せんと手に持つ大剣や、魔力弾【バレットシェル】を放出して攻撃を繰り出してくる。

だが三人はその攻撃を回避しつつ、ユーノが拘束魔法【バインド】の上級技である鎖の形のバインドで傀儡兵の動きを拘束し、クロノがその隙にＳ２Ｕを構えて周囲に魔力弾【バレットシェル】を展開。魔力弾【バレットシェル】をそのまま放出するのではなく、それを自身の周りに浮遊させて砲台として固定して、魔力光を射撃する。魔力光は次々と傀儡兵を貫き、前衛に居た傀儡兵が一層される。流石の執務官といったところである。

しかしまだ後方にいた傀儡兵がこちらに魔力弾【バレットシェル】を展開して攻撃しようとしていた為、なのはが飛び込み、傀儡兵の一体の頭に拳を一撃入れる。衝撃で一体が粉砕され、次に他の傀儡兵たちに向けて連続で拳をぶち込んでいく。

「――――連続普通のパンチ」

衝撃で傀儡兵は全て粉砕される。なのはは落ち着いて地面に着地して扉の前にたどり着く。そのまま扉を拳で破壊して、クロノとユーノと共に城の中へと突入する。

城内も地面が割れており、虚数空間の穴が端に空いており、注意しながら奥へ進む。やがて広い部屋にたどり着き、奥には階段で上に進む道がある。だが状況確認もつかの間、直ぐに傀儡兵が出現し、此方に魔力弾【バレットシェル】を展開して攻撃を仕掛けてくる。

地面を蹴り、跳躍してその場から離れる。クロノは先ほどと同様に魔力弾【バレットシェル】を展開し、射撃して傀儡兵の胴体や頭を貫いて破壊していき、なのはが正面の傀儡兵を破壊する。その隙に後方の傀儡兵四体が一斉になのはに攻撃を仕掛けるが、ユーノが鎖型拘束魔法【チェーン・バインド】で動きを封じ、その隙にクロノが射撃して破壊する。

「君たちは最上階にある駆動炉の封印を頼む！」

クロノは射撃で再び沸いて出てくる傀儡兵をなぎ払いつつ、声を上

げて別方向の廊下を進んでいく。なのは達はクロノの背中に何処に行くかを訊ねると、クロノはプレシアの確保に向かうらしい。なのははクロノの無事を祈りつつ、ユーノと共に階段を駆け上がっていく。

しかし考えれば走って駆け上がる必要もない事に気付き、飛行魔法を発動して直接上に向かっていく。

「駆動炉ってこのまま上に行けばあるのかな？」

「うん、間違いないよ！」

飛びつつ、下から追ってくるユーノに訊ねると、ユーノは時計を見るように腕を上げて立体ディスプレイを起動して、それを見ながら答えてくる。庭園の構造は予めスキャンしており、その中でも高エネルギー反応がある駆動炉の位置と、出し惜しみをしないプレシアの魔力反応は明らかになっていた。

駆動炉は城の上部にある為、このまま上に突っ切ればいずれたどり着く。だがそれをさせない為に、当然として傀儡兵は出現する。だがなのはにとっては鬱陶しい邪魔者でしか無い為、正面の傀儡兵に拳を入れてそのまま突き進む。

だが、その時一際大きな傀儡兵が出現し、なのは達の目の前に立ちはだかる。一度停まって、その巨体と対峙する。ユーノからは先ほどまでの傀儡兵とは違い、防御が高いらしい。なのははそれを試すかのように拳を両手で合わせ、踏み込もうとした瞬間――――。

巨体の胴が真っ二つに切り裂かれる。

一体何が起こったのか様子を窺うと、崩れた傀儡兵の背後から、バリアジャケット姿のフェイトがサイズフォームのバルディッシュを構える姿を発見し、彼女はこちらに向かって飛んで寄って来る。なのははそんなフェイトの様子から、立ち直った事を察して笑顔を向けた。フェイトもそれにつられてぎこちなく笑みを浮かべるが、同時に振動が城内に響き、階段が崩れ落ちる。

後から来たアルフが慌ててフェイトに近寄る。ユーノは思った以上に崩壊の進度が速い事を知らせ、フェイトとアルフにクロノと合流してくれと頼む。二人は頷いて下に向かって飛んで行き、なのははそれを確認すると、丁度上にいた傀儡兵がそんななのはに不意打ちで大

剣を振りかざすが――――。
「え、なに？」
なのはは振り向き様に拳を繰り出し、傀儡兵は木っ端微塵になる。
ユーノは相変わらずななのはに呆れつつ、二人は上に向かって飛んでいく。

9撃目

時の庭園、最下層。
ジュエルシード九つと駆動炉を暴走させて次元震を起こした事により、既に崩壊しつつあるこの空間で、プレシアはアリシアの遺体が入ったポッドと共に次元断層が起きるのを待っていた。だが、既に庭園内に進入した魔導師たちによって止められつつある。このままでは駆動炉の暴走が収まり、次元断層が起こらない。それだけは防がなくてはならない。ポッドに向けてここで待つよう声をかけて、プレシアは最下層にある別のエリアへと移動する。
扉は既に崩壊の影響で破壊され、プレシアはその空間へと足を踏み入れる。室内にあったものは醜いものであった。かつて自分が研究の為に生み出した生物兵器。傀儡人形と同時に開発を進めたが、コストの問題で傀儡人形を量産することになったのだ。
当初はジュエルシードの回収任務を生物兵器に任せるつもりであったのだが、身体能力を人外に上げてしまう事で知性がどうしても働かなくなり、まともに命令を実行できるものはいなかった。その為、フェイトに任せると決めたのだ。
だがこのエリアには、その過去の遺産が残っている。エリアの中央には、庭園の崩壊の影響で【封印】が解けてしまったものが、他の生物の残骸を食い散らかしている光景がある。その見た目は傀儡人形であるが、中身は極限まで能力を高めた生物兵器である。
「――――元気にしていたかしら【黒騎士】。随分とお腹が減っているようだけど？」
「……ああ？　当然だ。誰のせいでずっと動けなかったとおもう？」
鎧を纏った化け物――――黒騎士はプレシアと会話するだけの知能はあり、プレシアの言葉に対して苛立ちを表しながら答える。
「この庭園……いや、世界最強と言っても過言ではない、この俺を。この部屋に閉じ込めたのはお前のせいなんだから」

「……お前は私の言う事を聞かない。だから封印することにしたのよ」
黒騎士はプレシアが生み出した、最も戦闘能力の高い生物兵器。魔力も馬鹿高く、その強さはプレシアをも凌駕する程だ。しかし、それ故に黒騎士は命令に従わず暴れだした為、過去に使い魔と共にこの最下層に封印を行ったのだ。殺しきることが、不可能だった為に。
「しかし何だぁ？　気付けばここ崩壊起こしているじゃないか。誰の仕業だ？」
「言いたかった用件はまさにその事よ。今ここに管理局の魔導師が数人乗り込んで来ているわ」
プレシアは立体ディスプレイを開き、それを巨大化させて黒騎士にも見えるようにする。そこにはなのは、ユーノ、フェイト、アルフ、クロノの姿を始めとした魔導師の姿である。プレシアはその中でもと言葉を挟みつつ、なのはの事を指差した。
「この子……かなり強いわ。あなたでも少しは楽しめる相手よ。――――魔導師たちを消しなさい」
プレシアは横目で黒騎士を視界に納めつつ言うが、黒騎士は不気味で気持ちが悪い声色で笑い声を上げてプレシアへ指を指した。
「おいおい……俺がお前の言う事を聞くと思っているのか？　そんな事聞くなら、今すぐお前をブチ殺したほうが有意義だと俺は思うんだが」
黒騎士が、その大きな手でプレシアの身体を握りつぶそうと近づけるが、プレシアはその行動を言葉で中断させる。
「もし魔導師たちを片付けたら、後は好きにしなさい。私を殺すなり、世界中で暴れるなり、ね」
プレシアはアリシアと共に、幻の都【アルハザード】に向かう。そうなればこの世界がどうなろうと知った事ではない。ならそれを条件にこいつが管理局相手に暴れてくれるなら、それで良かった。プレシアが言うと、黒騎士は今までに無い不気味な笑みを浮かべ、盛大に笑った。
「良いだろう！　俺としても久々に大暴れが出来るんだからなぁ!!」

プレシアを遥かに凌駕する戦闘能力の持ち主――――黒騎士は拳を握り締めた。

◇

「駆動炉ってこれでいいの？」
「うん！　破壊してもいいから止めて！」
最上階に位置するエリアにたどり着いたなのはとユーノは、迫り来る傀儡兵を倒しつつ、奥に聳える巨大な柱を視界の中央に納める。ユーノに確認を取ってそれが駆動炉だと分かり、なのはは傀儡兵を殴り、次々となぎ倒しながら奥に突き進む。
一体をワンパンで胴体に穴を明け、その残骸を寄っている傀儡兵の下へ投げつける。それらに向けて狙いをつけずに連続普通のパンチを浴びせて、木っ端微塵にして排除する。背後から魔力弾【バレットシェル】を投擲してくる傀儡兵に、その魔力弾【バレットシェル】を壊さずに受け止め、投げ返す。本来の威力よりも上がった魔力弾【バレットシェル】が直撃し、傀儡兵は爆散する。
そして駆動炉の目の前に来たところで、地面を蹴って跳躍し、駆動炉の中心に向けてワンパン。大きく凹んだと同時に、盛大な爆発を引き起こした。光っていた中央の球体が徐々に光を失っていき、出力が落ちていく。
ユーノは爆風からプロテクトで身を守りつつ、駆動炉の破壊を確認し、通信で全員に連絡する。
「こちらユーノ！　たった今なのはが駆動炉を破壊！」
『了解！』
エイミィからの声が聞こえ、ユーノが耳から手を離す。柱の前に浮遊するなのはの元へ向かおうとして駆け、そのまま勢いで跳躍して飛行魔法で浮遊しつつ向かう。その途中で何かに気付く。
「（――――!?　魔力反応!?）」
とても強力な反応が急接近してくるのに気付いたユーノが下方に視線を向ける。なのはにもレイジングハートが同様にその事を伝え、

ユーノと共に視線を下に向ける。
すると爆発したかのように床が破壊され、何かが突進してくる。
矛先はユーノだ。だがユーノが態勢を整える間も無く、突進してきた何かがユーノの目の前に停止し、腕を横に振る。それだけでユーノの身体は遠くの壁に衝突し、減り込んだ。衝撃で粉塵が舞い、煙が晴れるとそこには壁に埋もれているユーノの姿があった。
「ユーノくん!?」
流石のなのはでも、ユーノが壁にめり込んだことに驚きを隠せないでいると、突進してきた存在がなのはの目の前に現れる。見た目は傀儡兵と同じなのだが、その身に纏う気圧は比べ物にならないほど強く、さらに言えば人形らしさというものがこの傀儡兵には無かった。
「――俺は黒騎士って言うんだぁ。この世界全てを破壊する名前だ。死ぬ前に覚えて逝きな」
黒騎士は下品な言葉使いで言うと、腕を鳴らして挑発をしてくる。そんな黒騎士に対し、なのはは眉根を寄せて目を細める。
「ユーノくんを現代アートみたいにして……上等なの!!」

◇

一方。最下層ではプレシアは次元断層を起こすための最終段階の作業に入っていた。駆動炉が破壊され、機能が停止するのが分かる。だがもう必要なエネルギーは与えた為、問題にはならない。ジュエルシード九つを発動し、次元震の拡大を行う。
だが、その次元震の拡大がぴたりと停まり、今まで激しく揺れていた庭園も静かになる。何が起こったのか確認しとうとすると、念話で女性から声が届く。
『――終わりですよ、プレシア。次元震は私が抑えています』
それは管理局提督アースラ艦長――リンディ・ハラオウンだった。彼女もクロノと同じく直接この場に駆けつけ、プレシアに次ぐ高魔力の術式で次元震を抑えている。その背中には四枚羽が薄っすらと光っており、それが彼女の魔力発動時の本来の姿といえる。

『九つのジュエルシード。そして駆動炉を暴走させ、あなたは何を？』
リンディはプレシアに訊ねると、プレシアは鼻で笑った後に、狂気じみた笑みを浮かべてそれに答えた。
「行くのよ……求めて忘れられし都【アルハザード】にッ!!」
『アルハザード……？』
リンディはアルハザードという言葉に聞き覚えがあった。かつて幻の都として、秘術などといった現代でも到達できない技術があるとされている世界。だがそれは既に滅亡したとされ、もはや幻想の話となっている。
『仮にアルハザードが実在するとして、貴女は何を？』
「――――取り戻すのよ。失われた過去と未来。この世界全てからッ！
そして変えるのよ――――世界をッ!!」
プレシアが上を見上げ、まるで上層にいるリンディに向けて言葉を吐いているのかと思うが、そうではない。彼女はこの世界全てに対して、その理不尽に対しての思いをぶつけているのだ。
その時である。最下層の天井が抜け落ち、傷を負ったクロノがプレシアにＳ２Ｕを構えてくる。
「そんな事は不可能だ。それは貴女も知っている筈ッ！　世界はいつも【こんなはずじゃない】ことばかりだッ！　昔からいつだって、誰だってそうだッ！　そんな現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ。だけど、自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしないッ！」
クロノがプレシアの言葉に真っ向から意見をぶつける。その後に続いてフェイトとアルフも最下層に辿り付き、フェイトはプレシアの前まで駆け寄って来る。
「近寄らないでッ!!」
プレシアはポッドに視線を向けたまま、振り向かずにフェイトに怒号の声を上げた。フェイトとアルフはその場に止まり、プレシアの姿を見ていると、プレシアが視線だけをフェイトに向け、口を開く。
「……何しに来たの。あなたにはもう用は無いわ。消えなさい」
冷徹に、プレシアが声を放つが、フェイトはその言葉に耐えつつ、

ジッとプレシアの方を見据える。一歩二歩と少しだけ前に出て、フェイトは意を決したように言葉を発する。
「――あなたに、言いたいことがあって来ました」
上段に待機し、いつでもフェイトの援護が出来るようにＳ２Ｕを構えるクロノ。通信と念話越しに様子を伺うリンディ。通信で見守るエイミィ。フェイトは一度呼吸を挟み、言葉を続ける。
「私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。あなたが作ってくれた、ただの人形なのかもしれません。でも私は、フェイト・テスタロッサは。あなたに生み出して貰って、育ててもらった――あなたの、娘です」
「……だから何。今更あなたを娘と思えと言うの？」
胸に手を当てて、本心から出た言葉をプレシアに伝える。
「――あなたがそれを望むのなら、世界中の誰からもどんな出来事からもあなたを守る。私があなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから」
手を伸ばし、伝えたい気持ちをフェイトは全て伝えた。プレシアの態度は相変わらずであるが、その瞳は、先ほどとは違うように見える。プレシアは口を開き、フェイトの言葉に対して答えようとしたが――。
――凄まじい衝撃と音によって、それが中断される。

◇

「――――ッ!?」
全員がそちらに目を向ける。天井に穴が空き、瓦礫が降り注ぐ。粉塵と共に天井から落ちてきたのは二つの影だった。先に見えたのは、黒騎士。次になのはだ。黒騎士は地面に下りるのと同時に、エリアの端の方へと一瞬で退避する。その様子からは余裕が感じられず、まるで何かを恐れているように感じた。
一方、なのはは別段変わった様子はなく、いつも通りの無気力な表情だ。拳に煙が出ていることから、上段の階から最下層まで穴を空け

て来たのは彼女なのだろうとクロノは思考する。
「……避けてばっかりだけど、最初の自信はどこにいったの？」
端の方にいる黒騎士に言うと、黒騎士は依然としてピクリとも動こうとはせず、何も答えられなった。細かい瓦礫がパラパラと舞う中、上から更に降下してくる人物がいた。ユーノである。ユーノは傷を負いながらも意識を取り戻し、何とかここまで合流することに成功した。クロノの隣に立ち、皆と同じく様子を伺う。
黒騎士はなのはの動きを分析し、同時に自ら感じる状況を落ち着いて整理しようと思考する。
「（……一発でも食らっていたら、殺られていた……！　一体何なんだこいつはッ!?　隙だらけなのに、俺の直感が危険信号を発しているッ!!）」
「……ん？」
黒騎士が無反応なのに対し、なのはは意味が分からずに首を傾げる。プレシアもその様子を見て、驚愕に表情を歪ませていた。
「（あ……あの黒騎士が……怯えている……!?）」
プレシアだけでは無く、この場にいる全員が黒騎士となのはに目線を集中していた。先ほどまでプレシアを見つめていたフェイトも同様である。
「キサマぁぁーーーッ!!　それほどの力、一体どうやって手に入れたんだよォォーーッッ!!」
黒騎士が耐え切れず、なのはに向かって声を荒げて訊ねる。それに全員が反応し、耳を傾けた。確かになのはの強さは異常だ。その強さには何か秘密がある。今までなのはの強さを見てきたユーノ、クロノ、アルフ、そしてフェイトが、その強さについて気になっていた。
なのはは無気力な表情から、その言葉に反応し、一旦瞼を閉じてから開く。すると真剣な表情へと切り替わり、口を開いた。
「――――いいよ。教えてあげる」
「――――ッ!?」
その言葉に、全員が目を丸くする。しかし、ユーノやクロノはそれに不安を感じた。この場で言ってしまって良いのだろうか。ここに

はプレシアと、その生み出した黒騎士がいる。この連中に聞かせていいものかと危険を感じていたが、なのはは構わずに言葉を続ける。
「重要なのは、このハードなトレーニングメニューを続けられるかどうかなの。どんなに辛くてもね――――私は三年でここまで強くなったの」
「トレーニング……ッ!?」
　再び驚愕。信じられずにいたのは全員だ。なのはが言ったのは紛れも無くトレーニングという言葉。プレシアが思考した改造手術でも、遺伝子操作でもなく。クロノが思考した、魔力強化による身体能力の向上でも無く。
　一体、どんなトレーニングを行えば、なのはのような異常な強さを手に入れられるのか。そのトレーニングの内容に、誰もが聴覚に意識を集中する。
　なのはは一度呼吸を挟み、言った。
「――――腕立て伏せ一〇〇回！　上体起こし一〇〇回　スクワット一〇〇回！　そしてランニング一〇キロ！　これを毎日やる！　風邪を引いてもやり遂げる。勿論一日三食キチンと食べる。朝はバナナでも良い。そして極め付けに精神力を鍛える為に、夏だろうと冬だろうとエアコンは使わないこと。最初は死ぬほど辛いの。一日くらい休もうかとつい考えてしまう。だけど私は強くなるために、どんなに苦しくても毎日続けた」
　なのはは語る。足が重く、動かなくなってもスクワットを行い。腕がプチプチと変な音を立てても腕立てを断行した。変化に気付いたのは一年半後だった――――。
「私は髪が異常に硬くなっていたの。そして強くなっていた」
　カットしようとしても、ハサミを逆に壊す程の硬さ。先端の方はぎりぎりで切れる為、長髪から短い髪形に出来ず、仕方無い為サイドで結うことしか出来ない剛毛となり、髪の毛ですらこの強さである。つまりそれほどまで死に物狂いで己を鍛えること。それが強くなる唯一の方法だ。
「魔法だのと頼っているあなた達じゃ、決してここまでたどり着けな

い。自分で変われるのが、本当の強さなの！」
手を握り締めて、堂々と宣言する。皆が衝撃過ぎる内容に呆気に取られ、言葉が出ない。なのはは自ら言ったトレーニングの内容と、その地獄の日々を語ったことで、余りにも過酷で衝撃的な内容から、皆が驚いてしまうのも仕方がないと思っていた。
だが――――。
「――――ふざけるな！」
そんな中、憤慨の声を露にしたのはクロノだった。なのはは予想外の怒号に、格好つけていた拳を解いて、ビクッと反応してクロノの方へ向く。
「そんなのは、一般的な筋力鍛錬だ！　しかも大してハードでも無い通常レベルだ！　僕達はそんな冗談を聞きたい訳じゃない！　君の強さは明らかに身体を鍛えた程度のものでは無い！　僕達はそれが聞きたいんだッ!!」
クロノの怒号に、なのはは頬をかきながら答える。
「……そんな事を言われても、他に何もないの」
答えるなのはの様子に、嘘は見られず、彼女は本当にそのトレーニングしかしてないのが事実だと伺える。皆の思考が固まるなか、動きを見せたのは壁際から歩いてきた黒騎士だった。俯いて、只ならぬ様子と魔力を放出しながら、一歩一歩近づき――――。
「……そうかい。教えるつもりが無いなら構わないぜ。でもテメぇはムカついたから――――嬲り殺しにしてやるッ!!」
上体を起こした黒騎士が怒りに満ちて、なのはに目にも止まらぬ動きで肉薄し、その巨大な拳でなのはを吹き飛ばした。そのまま床に減り込ませ、跳躍して蹴りを食らわせる。その衝撃で床が崩壊し、なのはが衝撃で宙に浮くが、それを黒騎士が見逃す筈が無く、更に連撃を繰り出した。
――――その様子を見て、プレシアはこの世の終わりを悟る。あの様に暴れだしたら黒騎士は止められない。早々にアルハザードに行くため、その身をポッドと共に虚数空間へと投げ出そうとするが、せめてあの少女がどうなるかだけを見届けようと思う。

なのはは拳を受けて吹き飛ばされ、壁に激突。再び宙に浮いたところに、黒騎士はトドメの一撃を刺そうと肉薄し――――。
「煩ァーーいッッ!!」

なのはの拳一発で木っ端微塵となった。
落ちる鎧の破片に中身の肉片。その中心に着地したなのはは肩を鳴らして身体の調子を整えている。怪我を負っている様子はなく、黒騎士の攻撃をもろに食らっていたのが嘘のようだった。
――――その光景を見て、プレシアの中で何かが壊れる。こちらに寄ったクロノにバインドで拘束され、罪状を言って来るが、もはやどうでも良く思えてしまった。
――――もうやめよう。こんな研究は。私が変わるべきなんだ。と、プレシアは思った。

１０撃目

日本の夜は、世界中の中でも眩しいと言われるほど明るいとされている。どんな暗い場所や、住宅街でも街灯があり、暖かい光が常に道を照らしてくれる。一方で都会の街中は、眩しいくらいの光と、交差する車のライト。ビル郡に付けられたＬＥＤやネオンの光。それらが夜の闇を消している。

そんな光に当てられながら、車椅子に乗った少女はバスの中で読書をし、降車停までの時間を潰していた。読んでいるのは、図書館で借りた本。そして少女の膝元には、もう一つ本がある。辞書のように大きく、厚い本。表紙には十字の装飾がされている。そして鎖が巻きつけられ、開くことが出来ない本だった。

読むことが出来ないのに、少女はその本を常に持ち歩いている。何故かその本は、少女から離れることはないのだ。小さい頃から不思議と思っていたが、常に傍にあっても、その本には見た目ほどの重さは全く無い。その為気にはならなかった。

バスが何度目かの停車前の名前をアナウンスする。バスは普通のものとは違い、ノンステップバスといわれる車両で、バリアフリーの観点から低床構造とし、高齢者や障害者でも乗降がしやすいよう考慮されている。少女は足が不自由な為、遠出の際にはこういったバスを利用するしかない。

すると、少女の持つ携帯電話に着信が入った。マナーモードにしていた為、バイブレーションの振るえとディスプレイの光で少女は気付き、小型ディスプレイに表示されている発信先を確認する。そこにあった名前は、彼女が通っている病院の主治医の先生だった。本当ならば今すぐ出たいが、今はバスに乗っている為に、申し訳ない気持ちを抑えながら電話が切れるのを待つ。

やがて家の近くにあるバス停まで着き、少女が料金を払うと、運転手の方が「ニーリング機能」で車高を下げて、歩道との段差を少なく

してくれる。さらに運転手の方が降り、スロープを出してくれて、車椅子を押してくれた。ゆっくりと歩道へ降ろしてくれる。

「おおきに」

少女は運転手の方にお礼を言って、運転手は笑みを浮かべてからスロープを戻し、バスに戻る。車高を元に戻し、そのままバスは発車して少女の視界から遠ざかっていく。街灯に照らされる歩道を、少女は車椅子を押して進む。途中で横断歩道を渡らなければならないので、少女は信号を待つ。辺りには、遅い時間のためか人が全然居ない。車が通る気配も無い。自分の身体が普通の状態だったら、このまま信号を無視して渡っていたのだろうかと考えるが、首を振ってから考えるのを放棄する。信号無視はいけないことだ。

時間が経ち、信号が青になった為、少女は僅かな段差を降りて横断歩道を進む。丁度中心まで来た頃だろうか、遠くから光が接近する。大型のトラックだ。

様子がおかしい。車道の信号は赤だというのに、トラックは止まる気配が無い。更に大きくふらついて蛇行運転の話ではなかった。明らかに運転手に異常が出ている。

少女は目を見開く。緊急回避することは出来ない。接触する寸前に、ぐっと目を閉じた。

だが、いつまで経ってもぶつかる感覚はない。衝撃が無い。

まさか、痛みや衝撃を感じずに死んでしまったのかと思ったが、それは違った。

少女が目を開くと、視界に映ったのは――――上空から見える夜の街並みだった。自分の住む住宅街が視界いっぱいに広がり、街灯の明かりが暖かく照らしている。

何故、自分はこんな所にいるのか。なぜ自分は空に浮いているのか。恐る恐る視線を下に向ける。すると自分の足場になっていたものは、白い光の文様だった。俗に言う魔法陣と言うべきものが、少女の身体を支えている。

おかしい、こんなはずじゃない。少女はあまりにもの非現実な光景に思考が追いつかなくなる。

すると、少女が常に持っていた十字の本が、何故か自分の目の前で浮遊し始めた。その本からは淡い光が漏れており、この魔方陣のようなものはこの本のせいなのかと思考する。本は少女から聞いても訳が分からない単語を良い始める。頭の中に直接言われている感覚で、その言葉は英語だ。だが自然とその言葉が理解出来る。だがその翻訳された言葉すら、少女に取っては訳が分からないもの。

そして本が一段と光を放つと、その巻きつかれた鎖を、破った。

◇

もう十一月というのもあり、朝の気温はかなり寒くなっている。コートを着て、マフラーをつけて、なのはは目的地へと向かう。昔のようにランニングをしていれば、走っていて自然と身体が温かくなっていたもので、その頃は冬も関係なくジャージでランニングをして、公園にて腕立て伏せ、上体起こし、スクワットをしていた。故に帰るときは何時も汗だくな状態だった。だが今はどうだ。いくら走っても、運動しても全然息が切れることは無く、もう上限関係なくトレーニングをしても何の苦労も無くなってしまった。だから現在はトレーニングを辞め、街をランニングがてらに駆けて事件や事故なりと解決に励んでいる。

だが今日はそれとは別件だ。目的地はかつてトレーニングを行っていた公園は別の公園。そこに向かっている。走らなくとも充分時間には余裕があるので、自分の息が白くなる様子でも見ながら歩いていく。そしてようやく公園が見えてきた辺りで、敷地外から公園の様子が見える。

公園の中央には、待ち合わせした人物が立っている。近くにベンチがあるのに座らないのは、少女が立った今来たからか、それともドが付くまじめだからか。明らかに後者だろう。下げ鞄を持ち、腕時計で時間を確認する人物を見ながら、なのはは敷地内に入る。するとなのはに気付いた人物がこちらに気付き、笑顔を向けてくる。

「久しぶり、フェイトちゃん」

「久しぶり……なのは！」
フェイトは此方に手を振って挨拶してくる。こうして会うのも半年ぶりになる。格好はこの寒さだというのに随分と薄着だった。寒がっていたのは鞄を握る手をこすっていた様子が分かっていたので、なのははコートを脱いでフェイトにかけてあげる。
「え、いや、でもなのはが……」
「大丈夫。私は別に寒くは無いから」
悪いと思っているフェイトになのはは手をぶらつかせながら言った。なのはは寒いと感じても、それは余程の寒さだ。しかも感じても、辛くはない。それが凍てつくものでも。その為、コートが無くてもなのはには全く問題だいのだ。せいぜい周りの目に合わせる程度である。
「うん、分かった。……ありがとう、なのは」

そんななのはにフェイトはぎこちない笑みで礼を言った。いつまでもここで話すのも悪いため、一度高町家へ戻ることにした。

◇

「今頃は、なのはちゃんとフェイトちゃんが感動の再会をしている頃かなぁ」
「フェイトはともかく、なのはの反応が軽いことが想像できるけどな」
管理局本局。次元の狭間に存在する、管理局の本部の片方だ。
その施設の一部。廊下を歩いて会話するのはエイミィとクロノだ。エイミィは上を見てなのはとフェイトの再開の場面を想像し、クロノは苦笑いしながらそれに突っ込みを入れる。
ジュエルシードの事件後。容疑者であるプレシア・テスタロッサは拘束されたが、病に侵されているという事で、現在治療中である。しかし末期の病故に、せいぜい延命の治療しか出来ないとされていた。プレシアは事件の事について、自分が全ての原因と話した。フェイト

やアルフの事も、先日に言ったように、脅し、強要していたに過ぎないと証言した。その為フェイトとアルフの罪状は比較的軽いものになり、クロノやリンディを始めとしたアースラクルーの尽力によって、何とか裁判で良い方向に導くことが出来た。

フェイトとアルフは保護観察処分となり、観察役はリンディ・ハラオウンとなった。リンディもフェイトとアルフの世話をするのに喜んでおり、二人からすればとてもありがたいものになった。そして現在、リンディと共に、地球へと引越しの日である。これはリンディの計らいであり、フェイトもそれを聞いた時はすごく喜んでいた。

リンディはこれを期に、長期の休みに入り、その間はクロノが部隊の指揮を担う。アースラは現在本局のドッグへと入り、整備中だ。もとより長い旅と大きな任務があった為、今回の整備に至る。その為クロノとエイミィは本局で仕事を行っていた。

現在廊下を歩いているのも、その仕事が関係する。扉の前に着き、インターフォンで入室許可を頂いてから室内へと入る。そこにいたのは淡い紫の長髪を一つに結った女性である。クロノとエイミィは敬礼し、挨拶する。

「お久しぶりです、レティ提督」

「久しぶり、クロノ執務官。それにエイミィも。リンディは今日から休暇だっけ。元気にしているかしら？」

「ええ」

時空管理局本局運用部の提督――レティ・ロウラン。リンディとは友人同士であり、クロノとも面識がある。管理局の装備・人事・運用の責任者であり、フェイトの嘱託魔導師試験の際は採点官でもあった。現在もフェイトの事について色々と助けて貰っている人物である。レティは座ってと良い、ティーセットを持ってくる。失礼しますと声を挟んでから、下手のソファにエイミィと共に座る。テーブルにティーセットを置き、レティは上手のソファに座ってから、紅茶をカップに注ぎ、クロノとエイミィの前に出してくれる。それに礼を言い、レティもカップを手にとって、紅茶を一口飲む。そして一息ついたところで、レティは口を開いた。

「それで、今回の用件なんだけど」
「はい――――これです」
　レティとクロノの言葉を合図に、部屋が暗くなり、天井からスクリーンが下りてくる。画面には事件の詳細と思しき文書と、その写真が写された。どれも魔導師や管理局員が倒れている光景が並んでいる。
「手口は同じ。急に襲われて、皆いずれも奪われていました。――――リンカーコアを」
　リンカーコアとは、大気中の魔力素を吸収して、体内に魔力を取り込む魔法機関。魔法を扱う者は皆、体内にこれを持つ。いまだに謎が多い機関で、研究が続けられている。今回奪われたのはこのリンカーコアだ。だが、皆致命傷には至らず、リンカーコアも徐々に再生している。
　犯人は何故、このような事をしているのか。なぜ魔力を集めているのか。疑問点はそこである。レティが指を口に触れさせて思考する中、クロノが言葉を続ける。
「いずれにせよ、早急に対処する必要があります」
「そうね。――――では、今回のこの一件を、クロノ執務官に任せます」
「了解」
　クロノはレティに敬礼をし、エイミィも同様に敬礼した。

◇

　マンションの上階で、引越しの作業が行われていた。引越し業者が大きな荷物を担いで部屋の中へ運んでくれている。その中、部屋に置く荷物の位置を指示したりをアルフが行っていた。机やベッドなどはフェイトの部屋になる場所へ運んでもらい、箪笥や置物といったリンディの私物は和室へと運んで貰う。その様子をリンディは作業をしながら見やると、視線に気付いたアルフが恥ずかしそうに顔を赤らめた。作業は順調に進み、夕方頃には掃除も終わらせて一息できた。
　リビングにあるソファに腰を下ろし、対角線上に並べられてあるソ

ファに向かい合うよう座る。正面にはテレビが設置され、奥には大きな窓があり、そこから見える景色はとても良いものである。リンディは急須に緑茶の葉を入れて、ポットでお湯を入れてから、茶葉が開いたタイミングで湯呑みに注ぐ。二つの湯呑みに注ぎ終わった後、アルフの前にそれを置く。アルフは礼を言ってから、手に持ち、一口飲む。リンディも続いて飲み、一度湯呑みをテーブルに置いてから、今度は砂糖とミルクを入れて飲む。リンディはやはりこれといった笑顔を見せた。

「ねえ、リンディ提督」

「うん、どうしたのかしら？」

　アルフはリンディにぎこちなさそうに声をかけ、リンディは視線をアルフへと向ける。するとアルフは頬を赤らませ、口を開いた。

「ありがとうね、いろいろと。フェイトの事、あたりの事。本当に良くしてくれて――――ありがとう」

「あらあら、どうしたのよもう、改まって」

　リンディは手を振りながら笑みを浮かべ、アルフは続いて頭を下げる。そんなアルフにリンディは微笑みながら、その手を彼女の頭に当てて撫でる。

「保護責任者として、当然のことをしたまでよ。それに、貴女とフェイトちゃん本当に良い子だから、こちらとしても色々と助かるわ」

　リンディが保護責任者として当然というが、ここまでしてくれるのはリンディだから、リンディという人物がとても優しく、面倒見の良い人物だからである事を、アルフは分かっていた、だからフェイト同様に、感謝の言葉を全て表せない程である。

　しばらくそうしていると、リンディは、さてと言って立ち上がる。

「フェイトちゃんが帰ってくるまでに、晩御飯の支度をしましょうか」

「うん！」

◇

　翌日。いつもの様にバスに乗ってから登校し、ＨＲが始まるまでア

リサとすずかと駄弁りながら過ごす。それはいつも通りの日常の一ページなのだが、今日だけは少し違う。ＨＲの開始を知らせる鐘が鳴り、クラスの皆が席に着く。

先生が教卓の前に立ち、いつものＨＲが始まるわけだが、先生が転入生が来ると皆に言ったのだ。盛り上がるクラスの中、なのはとアリサ、すずかは既に誰が転入してくるのかを知っていた為、アリサはにやりと笑みを浮かべる。そして先生に呼ばれる、フェイトという名前。フェイトは恥ずかしそうに小声で失礼しますと言って、教室の扉を開き、先生の隣に立ってクラスの皆に向いて自己紹介を始める。

「ふぇ……フェイト・テスタロッサです。宜しく、お願いします」

すっかり顔を赤らめて紹介するフェイトに、クラスの皆が拍手をして迎い入れた。フェイトもそれに安心したのか、落ち着いて笑みを浮かべた。

ＨＲが終わってからは、当然のようにフェイトはクラスの皆から質問攻めに遭う。その様子をなのはとアリサ、すずかが見守る。フェイトが本局にいた時も、なのはとメールや通話をしていた為、なのはの友達であるアリサとすずかとも友達になったのである。そして今日から転入してくる事も、三人とは既に話をしていたのだ。

フェイトは皆に囲まれつつも、とても楽しそうに話をしていた。それも当然である。フェイトは今まで学校に通ったことは無かったので、今のこの瞬間はフェイトが望んだものの一つなのだ。それを知っているからこそ、なのはは心の中で、良かったねと思った。

放課後。アリサとすずかは校門を出たところで迎えの車がある。なのはとフェイトとはここでお別れだ。挨拶をして、車に乗ったアリサとすずかに向けて手を振る。車が視界から居なくなってから、二人は帰路を歩いた。

海岸沿いの道を歩く。冬という事もあって、日が傾くのも早い。鮮やかな夕日に照らされながら、二人は手を繋いで歩く。

「学校はどう？　大丈夫そう？」

「うん！　皆とっても優しいし、楽しいよ。……でも、アリサたちに隠し事をしていると思うと、心苦しいけど」

「まあ、話したら面倒なことになるかもだし、仕方ないよね」
苦笑いを浮かべる。アリサとすずかに魔法のことについて話をしていないのには、きちんと理由がある。それは彼女たちがまだ一般人の枠組みに居るからだ。なのはとフェイトは、この地球という世界では一般人という分類ではない。魔法という非現実的な力を有する存在なのだ。まあ、なのはは魔法を使わずとも、一般とはかけ離れているのだが。
少なくとも、話すとしたらもう少し互いに大きくなってからにしようと考えている。
しばらく歩いたところだろうか、フェイトが思い出したように声を上げる。
「そういえば、ユーノからトレーニングメニューとかを預かっているんだ。こっちにいながらも、きちんと訓練をしようと思っている」
「そっか。嘱託魔導師だもんね、フェイトちゃん」
フェイトは罪を償うために、嘱託魔導師として奉仕活動することになった。その為、現在は仕事は休みだが、しばらく経てば学校に通いながらも、これからは管理局の仕事も行っていくことになる。その為に、フェイトは訓練は欠かせないと意気込んでいる。
「なのはみたいに……強くならないとね！」
「うん！　そうだね！」
「今朝もちゃんとトレーニングしたんだ。腕立て伏せ一〇〇回、上体起こし一〇〇回、スクワット一〇〇回、そしてランニング一〇キロ。これからも毎日やるつもり」
フェイトはなのはが言ったトレーニングメニューをしっかりこなしていた。これだけではなのはのように強くなれるとは思ってはいないが、フェイトはこれを続けていくつもりでいる。
「それで、なんだけど。今度の休みの日、ちょっと訓練に付き合って貰えるかなって」
「うん！　いいよ！」
フェイトの言葉に、なのはは笑顔で了承した。

◇

夜。

すっかり暗くなった街の様子が見える。ビルの屋上にある、角のところに座り、その景色を半目で眺める。様々な光が交錯して、とても明るく、幻想的にも見える。少女は一つ呼吸する。

「――――近くに反応がある。いくぞ、アイゼン」

11撃目

「フェイトー！　準備できたよー！」
「あ、うん！　アルフ！」
　晩御飯も食べ、フェイトとリンディはリビングにてソファに座ってテレビを観ていた。その時、アルフの呼ぶ声に反応したフェイトがそちらに向かい、駆け寄る。先ほど食事の際に、夜に散歩に出かけるという話は聞いていた。普通の子供ならば夜に出歩かせるのは危ないが、フェイトとアルフなら大抵の事は問題ない。それ故、アルフがフェイトを呼んだのはその件だと思い、リンディはアルフの方へ視線を向けると、そこには小さな犬のような姿になったアルフの姿があった。思わず手で口を隠して訊ねる。
「あらあら、どうしたのアルフ？」
「アルフが、私への魔力負担を少なくするためって」
「工夫してみた！」
　実のところ、使い魔の存在は少なからずその主の魔力を消費する。フェイトの魔力の高さからいえば特に問題は無いのだが、少しでも負担を軽くしてあげたいと思ったアルフの意思である。小さな身体になった故、アルフの声はいつもより高い。恐らく小さな身体になった為に、声帯も小さくなってしまったからだろう。その愛くるしい姿にリンディとフェイトは微笑む。アルフの首輪にリールを付け、フェイトはリンディへと向き直った。
「じゃあ、お散歩、行って来ます！」
「ええ、行ってらっしゃい」

◇

　食事を取った後に、自室にてアリサとすずかと電話して、明日フェイトに学校の事をもっと知ってもらおうと考え、話をしていた。大体の流れが決まったので、あまり長電話にならない様自重したい為、お

やすみと言ってから通話を切る。折りたたみの携帯をしまい、今日はもう使用しない為、ベッドから腰を上げ、机の上に置いてある充電器へと差し込んだ。型にはめてカチッと押し込むと、小型ディスプレイが表示されて充電中と出る。

少しベッドでくつろいでから風呂に入ろうかなと考え、踵を返し、ベッドの方へと向き直った。

その瞬間――――。

空間が切り替わった感覚が全身を包み込む。

「――――これって」

気付き、窓のほうへ目を向ける。窓から見える外の光景は、いつもの夜の景色とは異なり、全体的に変色されているのが分かる。魔力の光で、空間そのものが染まっているように思える。続いてレイジングハートがエマージェンシーと知らせる。この状況には覚えがある。間違いなく結界だ。半年前に管理局やユーノが使った魔法の一種である。これが発生したという事は、間違いなく魔導師が近くに居る。

直ぐに管理局やフェイトに連絡を取ろうと、レイジングハートから通信を試みるが、一切の通信が遮断されている為叶わない。

偶然誰かが張った結界に巻き込まれた、という訳ではないだろう。恐らく相手の魔導師は、少なくとも此方に目的があると思われる。ならば行動は迅速に行う。階段を駆け下り、玄関で靴を履いた後に扉を開けて大急ぎで家を出る。なるべく自分の家から離れた所に向かいたいのが本音だ。相手の結界の種類など、なのはには分からないが、地形のバックアップが取れていないタイプの結界だとしたら、自分の家が壊されてしまう可能性がある。

走りながらレイジングハートを起動し、バリアジャケットを装備する。杖は構成しない、いつものスタイルだ。飛行魔法で飛び、一気に都会の方へ向かう。街のビルの屋上の一つに着地し、相手が来るのを待つ。

夜の闇夜が変色し、街の明るさも、都会の眩しさも魔力によって歪められている。風が吹き、音が鳴った頃である。

――遠くで赤い光が輝き、その方向から魔力弾【バレットシェル】らしきものが放たれて、それら二つが襲い掛かってくる。
フェイトの直線速度重視のプラズマランサーとは違い、今回の魔力弾【バレットシェル】は、かなり湾曲して襲い掛かってくる。その見たこともない不思議な動きに興味が注がれるが、いずれにせよ回避することには問題ない。先ずは上体を捻り、一つ目を回避した後に、足を動かし、半歩ほど横にずれるようにして、二つの魔力弾【バレットシェル】を避ける。射撃されたであろう、赤い光が輝いた方へ視線を戻す。だがそこには既に気配が無い。
レイジングハートが警告した。避けたはずの魔力弾【バレットシェル】が、方向を変えて再び襲い掛かって来たのだ。振り返り、弾が過ぎたビルの斜め下の方へ視線を向けると、そこには独りでに曲がって、こちらに向き直して襲いかかる。良く見れば、その攻撃は魔力弾【バレットシェル】ではなく、鉄球のような弾丸であった。レイジングハートによれば誘導弾だという。通常の魔力弾【バレットシェル】よりも防御が聞かず、さらに誘導性能がある為、非常に回避し辛い攻撃といえる。
なのははまた襲われても面倒なので、今度は拳で粉砕して木っ端微塵にする。
次の瞬間。背後から気配がする。屋上の内側の方だ。上空に気を取られている間に、気配を殺して接近していたのだろう。振り返れば、そこにはなのは達と同い年くらいに見える少女の姿があった。赤い髪に赤いバリアジャケット。頭に帽子を被っており、両手に持つデバイスらしきハンマーを装備している。
「うぉおおおおらぁあああああーーーーーーッッ!!」
魔導師の少女が、手に持つハンマーを此方に振りかぶって来る。常人では、とても動きを目で追えない速さである。
しかし、凄まじい速度ではあるが、フェイトの速さに比べれば充分劣っている為、なのはは落ち着いてから回避行動に入る。重心を前に傾けてから地面を蹴り、背後へと跳躍して回避する。赤い魔導師はハンマーヘッドを地面に叩きつけ、ヘリポートを粉砕させる。

「……んのヤロウぉぉーーーッッ!!」
衝撃で舞った煙が風によって消され、魔導師の姿が見える。別のビルの屋上に退避したなのはの姿を捉え、直情的な性格なのか、怒気を込めた視線を向けてくる。此方が回避したことに憤慨したのか、魔導師は表情を激しく怒りに歪ませ、ハンマーを天に掲げてから叫ぶ。
「――――グラーフアイゼン！　ロードカートリッジ!!」
デバイス――――グラーフアイゼンが反応すると、ハンマーヘッドが一度両外側に外れ、また内側へと差し込まれる動作を行う。まるで何かを装填するように。一瞬後、熱を放射したような煙が漏れ、何らかの力が発動したのかが分かる。
魔導師は再びハンマーを構える。するとハンマーヘッドが変形し、片方が鋭利に尖り、後方が噴射口に変形し、そこから魔力が放出される。
まるでジェット噴射のように勢いは増し、魔導師はそれ目一杯まで踏ん張って溜めて、解放する。
抑える力を解いた瞬間に見せる、凄まじい動きだ。ロケットの如く、凄まじい勢いだが、魔導師の小柄な体躯故にグラーフアイゼンに振り回される形になっている。魔導師は空中に浮いて、宙をぐるぐる回るが、相手はその勢いをコントロールして、二、三回の回転を挟んでから此方に振りかざして来る。回転していた時に比べ、こちらに迫る時は凄まじい速度だ。
「――――ラケェーーテン……ハンマァァァァァーーーーッッ!!!」
全力で技名を叫び、振り抜き、その一撃はなのはの身体を芯で捉え、命中させた。さらに直撃した瞬間に爆破が起こる。標的に命中させ、衝撃で爆破効果を追加する事によって、文字通りに爆発的な力で塵殺する。これが魔導師の戦闘スタイルだった。
爆煙が辺りに充満し、視界が悪い。無風の為に中々霧散しない。だが直撃した為、確実に仕留めたと思った為、気持ちを落ち着かせる。怒りに満ち、瞳孔が開いた瞳を元に戻す。魔導師は酸素を求めて激しく深呼吸をする。同時にグラーフアイゼンも頭部の柄の接続部が開き、熱を放出した。同時に薬莢のようなものが三つ地面に転がる。先

ほどグラーフアイゼンが何か充填したものはこれである。
「……さて、さっさと蒐集すっか」
呼吸も大分落ち着き、煙も霧散しつつある。魔導師は蒐集という言葉を零し、なにかを出すように手を広げようとした。だが、次の瞬間に魔導師の動きが止まる。煙が霧散し、目の前の視界がようやく見えるようになったタイミング。魔導師の立つ正面の位置。至近距離。
その場所には、平然と立ってこちらを無気力な表情で見る、なのはの姿があった。

「(――――あれ？　あたし今殴ったよな、こいつ……)」
その信じられない光景に、魔導師は何かの間違いかと思って、目を見開いて、瞬きを二回行う。しかしいくら確認しても視界に映されるものが変わることは無く、なのははそんな魔導師の様子に対して右手の人差し指で頬をぽりぽりとかいた。
「……がっかりだなぁ。なんだか見たことも無い面白そうなデバイスだったのに、結局は一発パワーが高いだけの突進なの」
なのはは無気力な表情で呟く。それも仕方の無いことである。なのはからしてみれば速度はフェイトの方が高いと感じ、力量で言っても黒騎士の方が大きいと感じる。故に特殊な技能を駆使したといっても、なのはの経験からしてどれも劣っている。さらに酷な事を言えば、なのはからしてみれば、黒騎士と同等の力量だったとしてもダメージを負う事はない。
魔導師はその言葉を一瞬理解出来なかったが、直ぐに理解したのだろう、わなわなと身体を震わせる。
「……あたしとアイゼンの一撃を……馬鹿にするなぁぁあああああーーーーーッッ!!」
憤慨し、ハンマーを振りかぶるが、なのははもう食らってあげる気は無いので、魔導師がハンマーを下ろす前に、その速度を上回って身体を捻り、その身体にワンパンを叩き込んだ。勿論、死なないように手加減はしたが、その影響で魔導師のバリアジャケットが破壊され、少女の身体が一瞬にして露になる。

「――なッ?!!」
バリアジャケットが大破したことで、手に持つハンマーも、グラーファイゼンが強制終了したことによって消滅する。魔導師は一瞬気付かず、既に無いハンマーの柄を握るように両腕を上に掲げて止まる。傍から見れば、裸の少女が架空の剣を振っているようにしか見えない。
魔導師は自分の姿に気付き、一瞬で顔を真っ赤にし、腕や足で身体を隠しつつ、なのはへ向けて怒号を浴びせる。
「お前、ふざけんな！　あたしに何の恨みがあるんだよぉ!!」
「いや、襲い掛かってきたのはそっちじゃ……」

なのはは冷静に言い返すが、魔導師は聞く耳を持たない。
「次ぎ会ったら覚えてろ！　このやろぉぉーーッ!!」
恥ずかしい気持ちで泣きそうな魔導師だったが、それを怒りに隠して怒号を浴びせ、此方に指を指してからその場から去って行く。その姿は一瞬で消え、同時に結界が解除される。街の景色も元に戻り、先ほど破壊されたビルなどは、何も無かったように直っている。地形のバックアップを取っていることに感謝しつつ、結界を張った魔導師は優秀だろうなと思考しておく。
本当ならば今ここで捕まえて、管理局に身柄を渡すのが良いのだが、流石に彼女も裸で捕まりたくはないだろうと思い、今回は見逃した。
結界も解除された所で、いつまでもバリアジャケットを装備している訳にはいかない。そう思った瞬間にバリアジャケットが解ける。レイジングハートが気を使ったのだろうと思ったのだが、今回の解除の仕方がいつもと違うと感じる。なのははレイジングハートに声をかけるが、返事は無かった。いつものように、携帯状態になったレイジングハートが掌に落ちてくるのだが――。
レイジングハートは、ヒビが割れてボロボロの状態になっていた。

12撃目

ポッドの中では、デバイスを起動した状態のレイジングハートとバルディッシュが浮かんでいる。レイジングハートは杖。バルディッシュは斧の姿。双方とも状態に損傷が目立ち、全体に割れている。その様子を機械を弄りながら確認する白衣の女性が居る。

マリエル・アテンザ。レティの部下であり、エイミィの後輩にあたる人物。時空管理局本局のメンテナンススタッフで、主に魔導師の装備のメンテナンスを担当している。彼女は険しい面持ちで、二つのデバイスの破損をチェックしていた。

「まさかこの二基をここまでボロボロにさせるなんて……強力な相手だったんだね」

「なのははともかく、フェイトの場合から考えるとそうなるな」

室内に居るクロノが腕を組んでそう答える。現在の場所は本局のメンテナンスルームであり、先ほど起こった奇襲で壊れてしまったレイジングハートとバルディッシュの状態をチェックしていた。幸い核となる部分は壊れていない為、長くて数日で修理が出来るだろうとマリエルが言う。

なのはが赤い魔導師に襲われていると同時に、フェイトの方にも魔導師が襲ってきたのだ。一緒に行動していたアルフと共に迎撃したが、アルフは敵の使い魔らしき者によって倒され、フェイトも魔導師と全力で戦ったのだが、相手の実力が一枚上手だった為、倒れた。

その後二人の姿は、なのはと共に捜索していたリンディによって発見され、現在本局の医務室にて安静にしている。発見時、フェイトとアルフの身体は特に外傷は無く、リンカーコアのみが衰弱した状態であった。魔力を奪われたと思われる。

敵の狙いは魔力のみだったようで、外傷が無いのは敵の者によって治癒を受けたからだろう。わざわざ怪我を治したのは、フェイトがまだ幼い少女という事と考えられる。

身体を動かす分には問題無さそうだが、リンカーコアが衰弱してい

る為、しばらくは魔法を使えない。こればかりはリンカーコアが回復するまで待つしかない。

さてと声を零してから、クロノは自分の端末からメンテナンスルームにあるディスプレイにデータを送信すると、そこに相手の魔導師の映像が映し出された。レイジングハートとバルディッシュが残した貴重な手がかりだ。レイジングハートには赤い魔導師。バルディッシュのほうには桃色の魔導師が映ってる。

クロノは記録の映像の中にある、魔導師がデバイスに合図を言った直後の映像で一時停止する。それは赤い魔導師がハンマーヘッドを掲げ、何かを装填した瞬間のもの。その後の映像で薬莢も映される。

マリエルはそれを見て、このデバイスの仕組みから、これが一体何なのかを口に出す。

「ベルカ式、カートリッジシステム」

「その通り。流石だな、マリー」

マリエルが言ったカートリッジシステム。それはベルカ式魔法の一つである。

ベルカ式とは、なのはやフェイト。そして管理局が主に使うのが、ミッドチルダ式と言われ、それとかつて双璧を為した魔法の体系である。広域や距離、汎用性が高いミッドチルダ式とは異なり、ベルカ式は対人戦闘を前提とした瞬発力に重点を置いており、射程や範囲などはある程度度外視されている。ベルカ式カートリッジシステムは更なる瞬間出力向上の為に開発された。その多くは肉体やデバイスの強化に用いられ、非常に高い個人戦闘力を誇る。だが使用者にかかる負担が大きいため、危険なシステムである。

近接戦闘向きの特性からか、これを操る者は魔導師では無く【騎士】と言われる。その為バリアジャケットでは無く、騎士甲冑。又は戦闘衣服と認識したほうがいい。今回の奇襲した者たちはベルカ式魔法を使う騎士で間違いないようだ。結界や魔方陣の形から見て間違い無いだろう。

しかし、だとしたらこの者たちは一体何者なのか。それが分からない。クロノはディスプレイの映像を止める。

「引き続き映像から情報を探るとする。――話は戻って、デバイスの事なんだが」
レイジングハートの方へ向いて、クロノは苦い表情をしながら言葉を続ける。
「修理ついでに、強度の方を高めておいてくれないか？　出来る限り最大に」
「うん、了解。えーと……なのはちゃんだっけ。凄い強いんだよね？」
クロノは端末を弄り、なのはについて書かれたデータをマリエルの端末に送信しながら頷く。データといえど、ジュエルシード事件での報告書みたいなものだ。なのはの身体能力は図れない為、報告書をデータとして送る。マリエルは自分の端末でなのはについて書かれたものを閲覧する。
「えーとどれどれー……。……あれ、全部ワンパンって書いてあるけど、これは何かの冗談か何か？」
「冗談だったら良いんだが、事実だ。なのはは今までどんな敵でもワンパンで倒してきた規格外な存在だ。レイジングハートが損傷した直接的な理由は、敵の攻撃をわざと受けたという事だ。しかし、なのはの能力に付いて行けなくなったのが主な原因と見られる」
「うへぇ……」

マリエルは驚きを通り越し、呆れるように表情を引きつらせている。確かにデバイスの役目はサポートであるが、レイジングハートのような有能デバイスが使用者の動きについていけないというのは、余りにも凄まじい。レイジングハートが残した映像には、赤い魔導師をどうやって撃退したのかが映っていない為、マリエルはにわかに信じがたいが、クロノが言うなら信じるしかない。
因みになのはの事については正直、実の所アースラ部隊だけしか知られていない。それはクロノが上に報告書を送る際に、一撃で倒すという内容をそのまま送ると、ふざけているのかと文句を言われてしまうのだ。いや、気持ちは分かるのだが、何ぶん事実である為にクロノは苦悩している。その結果、なのはの事について書く報告書には、細

かい戦闘の様子を捏造する形で送っているのだ。

◇

本局にあるオペレーティングルーム。その一つを現在アースラメンバーで使わせて貰っている。アースラが点検中である為、そう言った場合はこのオペレーティングルームを使う。その室内はまるで時空船の艦橋のように広く、上段と下段にフロアが分けられている。下段には沢山の局員達がディスプレイを弄り、効率よく仕事をこなしているのが分かる。クロノの席は上段にある為、上の入り口から席のほうへ向かう。

「あ、クロノくんお帰りー。マリーのところに行ったんでしょ？　レイジングハートとバルディッシュはどうだって？」

「ああ。二基とも数日には修理が終わるらしい。ついでにレイジングハートの方には改修も頼んでおいた」

自分の席に付き、隣の席のエイミィと話をしつつ、システムを起動してディスプレイを開く。データを選び、二基のデバイスに記録されていた奇襲者との戦闘映像を見る。レイジングハートの映像は途中で切れている為、バルディッシュが残した映像を重点的に見る。

戦闘の様子から見れば、この映る桃色の騎士が相当な手練ということが分かり、剣のデバイスを巧みに振っているのを見れば、フェイトが負けたのも頷ける。倒れたフェイトの前に立つ騎士の姿が映し出され、騎士は何かを出現させる。

それは十字で表紙が飾られた本のようなものだった。

「――――！」

その瞬間を一時停止して、その本を拡大して修正。はっきり映ったその本を見て、クロノは気付いた。まず今回の襲撃者の正体も、何が目的でリンカーコアから魔力を奪っているのかを。驚きの余り、しばらく硬直する。

只ならぬ様子にエイミィは心配そうに声をかけると、クロノは我を

気付かせ、もう一度その映像を見た。
「――ロストロギア・闇の書」
クロノは鋭く表情を険しくし、その名前を言葉に出した。するとクロノの様子と、その闇の書という単語で、エイミィは昔の記憶の中から思い出す。
「え……それって」
「――第一級捜索指定がされている、最上級に危険なロストロギア。六六六のページを持つ、黒い外装の書物型ストレージデバイスで、ユニゾンデバイスを管制人格に持つ。初期状態は全てが白紙だが、リンカーコアを吸収する事でページが記載され、全てのページが埋まるとユニゾンデバイスとして本来の機能を発揮、所有者と融合して絶大な能力を与える。完成すれば、取り返しのつかない事になる」
クロノは険しい顔で語る。なぜクロノが闇の書の特徴を知っているのかを、エイミィはそれを知っている。昔クロノに訊かせてもらった話だ。彼はずっとこの事件を調べていた。彼の管理局を志望した動機とも言える。
そこまで固執する理由、それは――。
クロノの父、クライド・ハラオウンは――闇の書が原因で亡くなった為だ。

◇

ビル群が並ぶオフィス街の街並みからは、人の気配がほとんど消えている。深夜の為、それも当たり前の事だ。そのビルの一角の屋上に、三つの影が並ぶ。夜風に吹かれ、三つの影のうちの二つ。女性二人。その双方の髪が靡いた。
一人は桃色の髪が特徴の女性であり、頭頂部にて髪を纏めている。もう一人は金髪の女性で、肩にかからない程度の髪形をしている。桃色の女性は目が鋭く、その凛々しく思える姿は、正しく騎士という印象を受ける。比べ、金髪の女性は、例えるならば癒し。おっとりとした瞳をしており、優しい人柄を印象付けられる。影のうちの最後は使

い魔らしき獣。青い狼と例えればいいのか、その姿はアルフと似ている。
暗くなった街並みを見ながらしばらく待つ。すると背後から開閉音が鳴った為、三人は同時に背後へ振り返る。
「……来たか、ヴィータ」
桃色の女性がビルの屋上の扉のほうへ目を向ける。するとそこにはなのはと対峙した赤い魔導師――ヴィータが此方に歩き、寄って来る。
「――シグナム。シャマル。ザフィーラ。皆揃ってんな」
「ええ。ヴィータちゃんが最後」
「うっせぇなシャマル。こちとらはやてと寝ているんだからしょーがねーだろ！」
金髪の女性――シャマルには特に悪気があって言ったのではないが、その言い回しから、からかわれていると思ったヴィータが声を上げる。それに桃色の女性――シグナムが笑みを浮かべながら言ってくる。
「ならば別々に寝ればいい。子供でもないし、構わないだろう」
「いや、それはその……いいだろ別に！」
シグナムの言葉に対し、言い返しの言葉が見当たらなかった為、怒鳴るしかなかったヴィータ。シャマルとシグナムは微笑んだ後、さてと声を零してから、四人囲うように見合う。それは先ほどの緩んだ雰囲気は抹消され、張り詰めた空気が漂う。
「今、何ページだっけ？」
「待ってね。……二六七ページね」
ヴィータが訊ねると、シャマルが手に持つ闇の書をパラパラと開き、表示の数字を確認する。数字を見て、全体に知らせるように言葉を口にした。対し、ヴィータは目線を下にずらして思考に耽り、顎に手を当てる。
「もうすぐ半分か……」
「昨日の子が魔力高かったからね」
「……すまん。あたしも蒐集出来てれば……」

シャマルが言うと、ヴィータは申し訳無さそうに頭を下げて謝ってくる。だが先ほどとは状況が違う為、シャマルは慌てて頭を上げるように言う。
「いや、気にするな。問題は、お前を圧倒するほどの実力を相手が持つという点だ」
シグナムはヴィータの実力は知っている。ヴィータは接近と遠距離どちらも臨機応変に対応出来る、オールラウンダーの戦士だ。しかも防御も硬く、接近戦でのパワーもこの中で言えば誰よりも高い。故にヴィータが負けたと知ったのは予想外の事であった。しかも此方が奇襲であるが故、それを返り討ちにした魔導師はかなりの腕だと確信できる。しかしそう言っても、ヴィータ自身が何やらありえないと呟いているのだが。
「管理局にも目を付けられている。今回からなるべく離れた世界での蒐集をせねば」
青の獣――ザフィーラが言うと、皆が頷く。
「ああ。とっととページを埋めて、はやてと静かに暮らすんだ」
ヴィータは言うと、その手にデバイスを持ち、前に突き出す。シグナム、シャマルも同様だ。決意を確認してから、四人は転移魔法を使用して、別世界へと転移した。

13撃目

翌日の朝。いつもならスクールバスに乗って学校に行くのだが、フェイトと共に登校する事に決めた為、公園の入り口を待ち合わせ場所にしていた。

本来ならば、学校の事や、アリサやすずか達と一緒に遊んだりなどをする予定であったが、昨日の一件でそれが随分と予定が狂ってしまった。フェイトの身体は問題無い為、本人の希望もあって翌日からは地球に戻ってきている。

しばらく待つと、金色のツインテールを靡かせてこちらに寄って来るフェイトの姿があった。片手を上げておはようと挨拶しつつ、並んで歩き始める。フェイトの表情は何でもないようにしているつもりなのだろうが、その顔には複雑な心境が窺える。それは無理もない。フェイトの実力はなのはも知っているし、並の魔導師より群を抜いて強いことを知っている。そんな彼女が敗北し、デバイスをも半壊にさせてしまったのだ。その気持ちは容易に察せる。

「フェイトちゃん、身体はもう平気？」

「うん、大丈夫。身体には特に異常はないし、折角学校に通えたんだから、休みたくも無い」

「そっか」

体調の事を訊ねると、フェイトは視線を此方に向けて平気だと答えてくれる。笑みを浮かべるが、それは空笑いである。気持ちを切り変えたいと思っているのだろうが、フェイトの年齢は九歳。外見年齢だとしても世の九歳と差は無いはずである。故にいきなり気持ちを切り替えられるほど、彼女には経験が足りない。相手に心境が伝わってしまうし、精神も脆い。

「昨日の人たち、結構強かったみたいだね」

「え……あ、うん。そう、だね」

目を丸くし、慌てたように周囲を見回してから、フェイトは視線をなのはに向き直し、肯定してくる。周りには同じく通学中の子供が歩

いている為、恐らくは公の場で話して大丈夫なのかと不安に思ったのだろう。だが、一般の人からしてみれば、魔法だのと話をしていても現実の話だとは思わない。それが小学生の言う事であれば、アニメかゲームの内容かと思うだろう。故になのはは気にせず会話を続ける。

「私に襲い掛かってきた子も、スピードはフェイトちゃんに劣るけど、かなりパワーがあった。防御もそれなりに硬かった。遠距離からの攻撃も厄介みたいだったし、総合的なステータスからみれば、フェイトちゃんと互角。もしくはそれ以上かも」

「うん……私と戦った人も、強かった。速さも、技の切れも、そして力も、私より強かった」

言うと、フェイトは俯いて真剣な眼差しを足元に向けた。

「私が……もっと強ければ……バルディッシュも……！」

立ち止まり、フェイトが溢れんばかりの哀しみの感情を露にする。自分を責めている。自分を責めるのは別に悪いことではない。人間成長していくには、時に自分を責めて、改善していかなくてはならない。それが一つの経験として積み重なっていくのだ。だがフェイトの今の状況は少し違う。

なのははフェイトの傍に寄ってから、その肩をトントンっと叩く。フェイトが顔を此方に向けた瞬間――。

頬に人差し指が当たる。

「……へ？」

目を丸くするフェイトは、頬を指で突かれたまま固まっている。それに笑みを浮かべつつ指を頬から離してなのはは数歩後ろに下がる。

「フェイトちゃんは自分のせいにし過ぎ。私だってレイジングハートが壊れたんだから。多分デバイスの性能もあっちが上だったし、少なくとも壊れた原因はフェイトちゃんではないの」

一旦呼吸を整えつつ、言葉を続ける。

「フェイトちゃんはもっと強ければと言った。だったら強くなればいいの。昨日の自分より強くなって、相手より強くなって、ぶっ飛ばせばいいの。そしたら全部解決」

ドヤ顔でサムズアップをフェイトに向ける。ぽかーんと口を開けていたフェイトは、徐々に表情が緩みだして笑い始める。
「あはは、なのは、それは極端すぎるよ」
涙が出るほど笑ったフェイトは、指で涙を拭いて、なのはに顔を向ける。そこには先ほどのネガティブな雰囲気を身に纏った彼女の姿は無かった。なのははほっと胸を撫で下ろし、笑みを浮かべてから再びフェイトと歩き出す。
「放課後、デバイスの様子を見に行こうか？」
「うん、いいよ」

◇

本局にあるオペレーティングルームの一つ。そこにはクロノとその部隊が、クロノに向かって整列して話を聞いていた。それはクロノがレティと話した魔導師の襲撃事件の事である。一度整列した後に、全員がクロノに向かって起立し、クロノが挨拶を済ませて休めと指示し、全員が半歩足を開かせて手を後ろで組む態勢となる。
クロノはディスプレイをバックに話を始める。

「先日からは、皆に調べて貰っている連続襲撃事件の件だが、皆も知っている通り、高町なのはとフェイト・テスタロッサがその被害者となった。高町なのはに関しては言わずもがな、相手を返り討ちにしたが、デバイスを破壊されている。フェイト・テスタロッサは残念だが打ち負かされた。こちらも同様にデバイスを破壊されている。つまり相手の実力は結構高いと分かる」
一から説明するように、クロノはデータ化した事件の詳細を説明し、皆もクロノの話を聞きながら後ろに映されるデータを注視している。そこにレイジングハートとバルディッシュが残した映像が流れ始める。
「これはその時に二つのデバイスが残してくれた貴重なデータだが、ここに相手の正体について分かるものが映っている」

その言葉に皆が若干の戸惑いを露にし、流れる映像を凝視していく。映像が進み、シグナムがフェイトを打ち負かした後、傍に寄って手を上げて、掌を上に向けた瞬間。そこでクロノが映像を止めると、次には映像に十字の装飾がされた本が表示される。

「ロストロギア――――闇の書。今回の犯人は間違いなく、この闇の書に搭載されている守護騎士システムで間違いないだろう。主がページを蒐集するために、各世界から魔力を蒐集していると見られる。その為狙われるのは比較的魔力の高い者になるだろう」

闇の書に関する資料がディスプレイに映され、皆が息を飲んでそれを注視した。ロストロギアの回収、管理を目的として活動していたアースラのクルーならば、当然このロストロギアのことを知っていた。故に皆がついにこのロストロギアと対峙する事になったのかと思考する。

「これより、この事件を闇の書事件とする。一刻も早く事件を解決する為に皆、力を貸してくれ！」

「了解」

◇

月村すずかは習い事が終わった後、迎えが来るまで近くの図書館で時間を潰している。読書が好きな彼女にとっては最適な場所だった。家の図書室にも本が沢山あるのだが、ここの図書館には海鳴市についての本も沢山ある。要はここでしか読めない本が沢山あるのだ。

本棚を見て、何を読もうかと悩みながら通路を進んで行く。すると目の前に車椅子に乗った女の子が、本棚に入った少し高い位置に置かれた本を取ろうと腕を伸ばしている。良く見かける女の子である。この図書館はバリアフリーが施されているところなので、段差も極力少なく、それでもある場所には緩やかな傾斜の通路を作っている。本来こういった高い位置の本を取りたい時は、館内の人に頼めば取ってくれるのだが、恐らくぎりぎり頑張れば取れる位置にあるので、頼らずに頑張っているというところだろうか。

気付いてしまっては見てみぬ振りは出来ないので、すずかはその子の傍により、手を伸ばしていた場所にあった本を取って、その子に手渡す。
「これでいいですか？」
「はい、おおきに！」
そこからは流れで一緒に読書をする事になった。この図書館に来るようになってから、この子とは時折目があったりしていて、気にはなっていたのだ。こうして声をかけられたのも良い機会だと思い、互いに邪魔にならない程度に会話をする。
「そう、じゃあ同い年なんだー」
「うん、良く見かけるから気になってたんよ」
互いに思っていることも同じで気が合う。読む本のジャンルも結構同じな為、その事に関しても話が進む。本というものは不思議なもので、読み手によっては随分と違う話、解釈になる。なので二人は互いに読んでいる本について、そう言った会話をしていた。
「――それで、私はこう思うんだけど……あ、えーと……」
話を振ろうとしたが、そこで言葉が止まってしまう。あなたはどう思うかを聞きたかったのだが、すずかはそこで、女の子の名前を知らないことに気付いた。その為、それを訊ねようとするが、それを察した女の子が口を開く。
「あ、そういえばまだ自己紹介もまだやったね。私――八神はやてと言います」
「月村すずかです。宜しくね、はやてちゃん」

◇

本局にあるデバイスのメンテナンスルーム。そこにレイジングハートとバルディッシュがある。
クロノに許可を貰ってから本局に着き、メンテナンスルームへと向かう。一度クロノに場所を聞いたこともあり、部屋に行くこと自体は難しくなかった。廊下を歩き、それらしき部屋の扉を見ると、そこに

はメンテナンスと表示されている。間違いないと思い、インターフォンから室内に入る許可を貰う。すると比較的高い声をした女性が許可をくれた。
室内に入ると、そこには眼鏡をかけた白衣を纏った女性が出迎えてくれた。なのはは昨日に会ったことがある為、フェイトが初めましてとなる。
「初めまして、マリエル・アテンザと言います。エイミィさんの後輩に当たります。宜しくお願いね。気軽にマリーと呼んで」
「フェイト・テスタロッサです。宜しくお願いします」
マリエルに対して丁寧にお辞儀を返すフェイト。マリエルは慌ててそんな丁寧にしなくて良いよと言う。
改めて、レイジングハートとバルディッシュの様子を見る。そこにはポッドに入ったレイジングハートとバルディッシュが修復されている様子が伺え、その場に来たなのはとフェイトが興味深そうにそれを覗く。修復中の為、いつものように会話は出来ない為、見るだけだ。マリエルはシステムを弄って、レイジングハートとバルディッシュの状態を示したデータをディスプレイに表示させた。
「聞いているとは思うけど、この二つのデバイスなら心配はいらないよ。しばらく修理すれば元通りになるから」
「そうですか……」
マリエルの声に、フェイトは安心したように胸を撫で下ろす。視線をポッドに向けると、バルディッシュに向かって早く治ってねと声をかける。返事は無いが、その声は届いていると信じたい。
「そういえば、なのはちゃん。レイジングハートの件だけど、クロノくんから何か話は聞いた？」
「いえ、まだ何も……」
するとそっかとマリエルは声を零し、ディスプレイにレイジングハートについてのデータを表示させる。
「私がクロノくんに言われたのがデバイス単体の耐久性の極限向上。それを聞くと防御が高いというイメージになるけど、それは違うかな。あくまでデバイスが壊れないようにする改良で、なのはちゃんに

対するステータスが変わるわけじゃないんだよ」
一呼吸を入れて、
「私もなのはちゃんの戦闘能力を聞いた時は思わずびっくりしたよ。それなのにそれに耐えられるように改良してっていう無茶難題が立ち塞がった訳だけど。私は閃いたんだ。今まではバリアジャケットが攻撃を通さないように防いでいたけど、改良後は一切の攻撃を受けずに、衝撃をそのまま使用者に通せばいいんじゃねって？　するとあら不思議！　デバイスにかかるダメージが少なくなる訳！　もはや唯の透けない立体映像そのものだよ！　これによってバリアジャケットの破損も無くなる！　素晴らしい！　当然なのはちゃんにダメージがそのまま通ることになっちゃうわけだけどね」
途中からのテンションの変わり様に、フェイトが引きつった笑みを浮かべる。マリエルは気にせず溜息を吐き、
「……私もね。バリアジャケットの存在意義がそんなんで良いのかなぁ？　何もバリアしないものにしちゃっていいのかなぁ？　っていう葛藤が常にあったけど、結果面倒になったので考えるのを放棄しました！　なのはちゃんなら問題ないって聞いたし、大丈夫大丈夫！」
「うん！　むしろ服が壊れないほうが助かりますのでオッケーです！」
最初こそ研究者らしく説明したマリエルだったが、後半につれてテンション上げてグッドサイン。言葉通りに何か吹っ切れた様子だった。なのはも希望通りの改良結果を聞いてグッドサインを返す。
視線を変え、なのはは興味ありげにレイジングハートの方を見る。普段自分が使うことが無い杖の姿。初期の設定が砲撃型故、このような姿になったらしい。自分の魔力資質は砲撃型なのかと今更ながらに知った。魔力資質は別段その人間の身体能力に合うかと言われれば、そう言う訳ではない。なのはのように格闘が得意な人間だからと言って、格闘型の魔力資質という訳ではないのだ。レイジングハートはなのはの砲撃型の魔力資質に反応して砲撃型の杖の姿になったという事になる。

普通の魔導師ならば、最初に自分の魔力がどのように向いているのかを知り、そこからその得意分野を伸ばすように身体を鍛えていくらしい。だから魔力資質と身体能力がかみ合わないという例は稀である。

しかし、だからと言って今から砲撃向けにトレーニングするかと問われれば、答えはノーだ。

なのはにとって魔法とは別段どうしても必要と思いはしない。せいぜい通信手段や移動手段としか考えていない。使いこなせば戦術も増えるとクロノやユーノに言われたこともあるが、興味は沸かなかった。なのはにとっては近付いて殴る。それだけで充分すぎるのだ。

フェイトがそれならばとマリエルに訊ねる。

「マリーさん。格闘タイプに変更とかでは駄目なんですか？」

「それは私も思ったけど、クロノくんから聞いた話、格闘タイプにデバイスを変えたらそれこそデバイスが壊れるんじゃないかって。結局はパワー、スピードに能力を合わせているから。なのはちゃんの場合はパワーもスピードもそのままで大丈夫だしね。そうするならステータスに関しては一切のサポートを放棄させたほうが、デバイスを壊さずに済むんじゃないかって」

「ああ、なるほど……」

フェイトは苦笑いを浮かべつつ納得する。確かになのはの拳にアームデバイスを装備させたりなんかしたら、それこそ一発でデバイスが壊れる恐れがある。それならば、本当に通信機としての役割と、飛行魔法と転移魔法などの移動手段として携帯させる形が一番良い。

そこまでするなら、バリアジャケット不要なのではないのかと思うが、クロノの話だと戦闘の記録については残るものらしく、それが魔法を一切使わずに圧勝――――とは残せない。せめてもの見た目での誤魔化しは必要で、それが抑制になるとの事である。

１４撃目

スーパーでお得な商品を見つけると、とても気分が良い。別段食費に困っているわけではないのだが、それでも平均値段よりも安いというのは、他と違って特別という気分がするからなのだろう。リンディはそう思いつつ、安売りしていたトマトを買い物籠に入れていく。

『――――どうやら、一度魔力を奪われた者からは、二度魔力を奪うことは出来ないようです』

『そう。じゃあフェイトやアルフがもう一度襲われることは無いわけね。なのはさんなら平気だろうし』

『ええ。ですが、艦長。今度は貴女の身が狙われることが』

『大丈夫よ。自分の身くらい自分で守れるわ』

買い物をしながら、念話でクロノと通信を行う。クロノから調べて判明した情報を教えて貰い、現状の様子を把握していた。リンディはたまねぎも安売りしていたので、それも籠に入れつつ、今日はハヤシライスでも作ろうかと考えて、足を精肉コーナーへと運ぶ。

クロノが調べて分かったことは、魔力の蒐集は同じ人物には一度だけしか行えないという事。これでフェイトやアルフが狙われることが無くなったが、リンディ自身も魔力はかなり高い為、もしかすると狙われるかもしれないということだが、リンディもそれなりの実力者だ。言った様に自分の身くらいは守れる。

精肉コーナーへと着き、そこにあった肉を見てどれか良いかを判断する。

『捜査は順調のようね。もしあれだったら、私も休暇返上してもいいけど？』

『……いえ、艦長は引き続き休暇を取っていて下さい。この件はこちらで対処しますので』

『……そう。なら、お言葉に甘えさせて貰うわ』

通信を切る。ばら肉を買い物籠に入れ、調味料とルーを買って、会計を済ませる。籠から商品をマイバッグに詰めていき、スーパーを出

る。リンディは再び念話を利用し、ある人物に通信を試みる。数秒のコールの後、相手が通信に出る。レティであった。
『はーい、レティ、元気にしてる？』
『それは此方の台詞よ。貴女も休暇満喫してる？』
『お陰様でね。地球での生活も悪くないわ』
『そう、良かったわ。……で、一体どうしたのよ？』
世間話を挟んだ後、レティが本題を訊ねる。
『それなんだけど……レティ、私たち、もう随分と長い付き合いよね？』
『え、ええ……どうしたのよ、急に』
『クロノたちが捜査している事件って――闇の書関係だったりする？』
その言葉に、レティは表情を険しくした。レティには当然クロノから状況を確認している。襲撃者が闇の書の守護騎士で、彼等の目的がページを埋める為の魔力蒐集だという事。休暇中であるが故、現在の上官はレティであるが、クロノの上官はあくまでもリンディである。アースラクルーもリンディの部下であることから、彼女に事件の事を報告して当然だが、今回の事件――闇の書は、ハラオウン家にとっては因縁深いものである。
レティはそこまで察したリンディに、これ以上隠し通せないと分かった為、素直に白状する事にする。レティは全てを話し、リンディは納得した後にありがとうと礼を言ってから通信を切る。そのまま帰路につき、マンションに到着する。エレベーターで階を上がった後、自分達の家へと戻る。
手洗いを済ませてから、買ったものを冷蔵庫へと入れていく。バッグを畳んでしまった後、自分の部屋に向かう。畳みが敷き詰められた和室。その一角にある箪笥の引き出しを、リンディは引いた。そこには、カードという形で携帯されている、一つのデバイスがあった。
デバイス――デュランダル。これはクライド・ハラオウンが使用していたデバイスである。
クライド・ハラオウン。かつて回収した闇の書の暴走に巻き込ま

れ、死亡した。リンディの旦那であり、クロノの父親。
目を瞑れば、今でも鮮明に思い出せる。かつて活動停止した闇の書を封印し、回収しようとした際に、突如闇の書が封印を解き、暴走を始めた事。補完室から溢れる暴走体の侵食に、当時乗っていた時空船が沈もうとしていた。
クライドは、そんな闇の書を持って小型艇にて離れ、自らを犠牲にして時空船を守ったのだ。その時、自分にどうしようもなく涙を溢れさせていたことを覚えている。当時幼かったクロノも、当然悲しかったに違いない。
しかし、クロノは父が死んだと知ったときも、葬式の時も、一切泣かなかったのだ。後にエイミィから聞いた話では、クロノはこう言っていたという。
父さんは大勢の命を救ったんだ。素晴らしい事をしたんだ。だから、僕も父さんみたいな立派な管理局員になるんだ、と。
自分の息子の成長には、確かに父の思いが宿っていると思い、リンディは自分だけが悲しんではいけないとその時に思ったのだ。
そして今回の闇の書事件。レティによると、最初はクロノを担当から外すようにしたらしい。過去の被害者が関わってしまうと、どうしても私情が出てしまうからだ。だがクロノは聞かず、この事件の担当を申し出たのだ。その話を聞いた際には納得してしまった。クロノの性格からして、自分の手でケリを付けたいのだろう。
そう思うのは、クロノだけではない。
リンディは、デュランダルを手にとって、それを胸元に仕舞う。
「……さて、晩御飯の支度しなくちゃね」

◇

事件が闇の書と分かって捜査が始まってから、三日が過ぎた。
リンカーコアが奪われる事件は、次元世界各地で起こり、転々としている為足取りが掴み難い。それに守護騎士もどうやら狙いを魔導師から原生生物に変えたようで、事件発生から遅れる。もしくは気付

かない事が増えた。その一方では現在、ユーノが闇の書に関する情報を、本局の【無限書庫】にて資料を調べ上げている。そのお陰で、過去の闇の書事件から共通するものが判明し、徐々に情報が揃いつつある。

元々は旅をする魔道書で、次元世界各地の優れた魔導師や魔法を記録して半永久的に残す為に造られた高性能魔法記録装置である。無限再生機能や転生機能は記録の劣化や喪失を防ぐ為の単なる復元機能でしかなかった。

しかし歴代の所有者の誰かが行った改変の末に暴走を起こし、防御プログラムを始めとする各種機能が破損・変質した結果、魔法の記録と保存という本来の目的も歪み、リンカーコア蒐集を所有者に強要、最後にはその命をも奪ってしまう悪辣な存在へと成り果ててしまった。そのせいで防衛プログラムが暴走を起こし、この際に必ず融合事故を引き起こすため、所有者は暴走の後に死亡。闇の書は初期状態に戻り次の所有者の下へと転移する。

調べていた際に、一度だけユニゾンデバイスが表に姿を現した映像が残っている。闇の書が完成すれば、彼女が主人格となって力を振るう。実質の管理者だ。その姿は美しい女性であり、銀髪赤眼の姿を取っている。闇の書の全機能は彼女の管理下にあるため、守護騎士達の精神ともリンクしている。闇の書そのものであると同時に第五の騎士と言うべき存在だ。

こうなってしまう前に、なんとしてでも主を特定し、対処したいところである。

その一方。なのはとフェイトは本局に来ていた。レイジングハートとバルディッシュの修理が終わったのである。

メンテナンスルームを訪ねると、そこには目に隈が出来ており、明らかに寝不足と疲労が表れているマリエルの姿があった。この間のテンションとは大違いであるが故に、二人も苦笑いしか返せない。室内にあるポッドに視線を向けるが、そこにはデバイスは浮いていない。

「あ、二基のデバイスならそこに置いてあるよー」

その視線に気付いたのか、マリエルは手前の台の上に置いてあることを伝え、指を指した。なのはとフェイトは台に駆け寄って、置かれた二基のデバイスを見る。二つとも携帯状態の姿であるが、その形は以前とは違うものになっていた。

レイジングハートの場合、以前はネックレスの形であり、赤い宝石のようなものだったが、その宝石と隣接して金色の装飾が施されている。一方バルディッシュも、以前は三角のアクセサリーのようなものだったが、それが角の部位に鋭利に尖っているものになっている。

「レイジングハート。改修お疲れ様」

レイジングハートの改修の件は聞いていたので、形の変化については納得できる。レイジングハートも挨拶を返した。デバイス特有の音声の声色が変わるはずが無いが、なんとなく今までより安堵しているようなものに聞こえたのは気のせいだとしておく。

疑問に思うのはバルディッシュだ。こちらは特に改修の話は無かった為に、フェイトも目を丸くして戸惑ってしまう。

「ああ、バルディッシュもね、本人の希望で改修することになったんだ。――ベルカ式カートリッジシステムの搭載」

マリエルが説明すると、フェイトはバルディッシュに確認をする。バルディッシュは肯定し、貴女の力に少しでもお役に立ちたいとと言葉を伝える。

「フェイトちゃんには、カートリッジシステムの事について教えてあげないとね、大体の事はバルディッシュが教えてくれると思うから、大丈夫だとは思うけど」

「はい、宜しくお願いします」

フェイトがお辞儀をして、マリエルがディスプレイにカートリッジシステムについて書かれた資料を元に、説明を始めようとした瞬間――。

マリエルのディスプレイに緊急通信が着信する。

相手はクロノであった為、マリエルは驚きつつも通話ボタンを押して、クロノと通信を繋げる。そこにはバリアジャケットを装備したクロノの姿が映り、慌しい様子が背景から伝わる。

『マリー、そこになのはとフェイトはいるか!?』
「え、うん。いるけど……」
『悪いが、直ぐにこちらに来るように言って貰えるか――――守護騎士が現れた!』
その言葉に、なのはとフェイトは顔を見合わせ、急いでクロノの元へと向かった。

◇

海鳴市の街中。そこは都会と住宅街の間に位置する街であり、それなりに人口が多い場所でもある。その街が現在、ベルカ式の結界にて封鎖されていた、三角形の形をしており、外から管理局の魔導師が必死に攻撃を加えても壊れる様子はない。
そんな結界の内側には、一人の女性がいる。リンディ・ハラオウン。予想通りに、魔力が高いリンディを狙い、襲い掛かって来たのだ。ビルの一角に身を潜めたが、直ぐに見つかるだろうと判断し、屋上へと姿を表す。そんなリンディの目の前にやって来たのは、桃色の騎士、シグナムだった。
「――――あなたたちが、闇の書の守護騎士システム・ヴォルケンリッターね。貴女がリーダーで間違いないのかしら」
「リーダーかはともかく、私がヴォルケンリッターが一人で間違いない」
シグナムはリンディの質問に答える。相手が戦う準備が出来るまで攻撃を開始しないのは、彼女の中にある騎士としての誇りなのだろう。故に剣を引かず、構えだけを取る。リンディはそんなシグナムに感謝しつつ、言葉を続ける。
「少し、聞きたいことがあるわ」
「悪いが、ゆっくりと話している訳にはいかないのでな。それは出来かねん」
シグナムが言うと、リンディは深く瞼を閉じて、ゆっくりと開いて

言葉を放つ。
「――私が、過去の闇の書の被害者だと言っても？」
「……!?」
その言葉に、シグナムが反応する。シグナムには、過去の闇の書については良く覚えていないものが存在する。特に記憶が無いのが、闇の書が完成し、主がどうなったのか。それが分からなかった故に、リンディの言葉には少なからず興味が沸いた。
その為に、話に付き合うかとも考えた瞬間――。
上空から魔力を帯びた鉄球が迫り、それがリンディのいた場所に襲い掛かる。
爆煙が待って姿が見えなくなり、シグナムははっと気がついたように現場を見ると、上空から声が聞こえる。
「シグナム!! 何ボーっとしてんだッッ!!」
「あ、ああ。すまない」
上空にいたのは、グラーフアイゼンを握っているヴィータであり、シグナムがさっさと攻撃しなかったことに憤りを感じたのか、怒号を浴びせてくる。リンディには悪いが、最初に言ったように話をしている暇はない。できることならばこのまま蒐集を行いたいが、煙が晴れたその場には、デュランダルを構えたリンディの姿があった。その身体は無傷であり、先ほどの攻撃を回避したことが分かる。
ヴィータは舌打ちを鳴らすが、焦りはしない。現在ヴィータ、シグナム、そしてザフィーラがこの場に居て、外にはシャマルが結界を張り、ジャミングを行っている。短時間では絶対に脱出は出来ないし、外から結界が破壊されることは無い。
次の一撃で仕留めればいい。ヴィータとシグナムがそれぞれ武器を構える。
「……これはちょっと、厳しいかしら」
リンディが表情を険しくし、弱音を吐いた瞬間――。
結界の上部が、突如破壊された。
シャマルによって結界は一瞬で修復されるが、その際に二人の魔導師と、使い魔一体が結界内へと侵入してしまう。

ザフィーラの前に、アルフが現る。
シグナムの前に、フェイトが現れる。
そしてヴィータの前に、なのはが現れた。

１５撃目

結界の内部に進入し、フェイト・テスタロッサは守護騎士の一人――シグナムの視線上まで降下し、そこで浮遊して足場を固定する。
シグナムは此方に攻撃を仕掛けては来ない。こちらが仕掛けてくるのを待つ辺り、彼女の騎士の誇りの高さが窺える。別段構い無しに攻撃を仕掛けられても大丈夫なように用意はしていたが、それをする必要がないと分かった為に、その事に感謝しつつ、目線を交差させる。

凛とした表情に、鋭い双眸。桃色の髪を頭頂部で結い、騎士甲冑と呼べる戦闘衣服を纏い、力を振るう刃であるデバイス――レヴァンティンを鞘に収め、フェイトの姿を確認する。
フェイトも同様にバルディッシュを構える。手に持つデバイスは斧の形状したフォームであるが、その柄には以前とは違う装備が搭載されている。ベルカ式カートリッジシステム。カートリッジはリボルバータイプだ。弾数が六発と少ないが、その分一発のエネルギーはマガジン式より遥かに凌駕する。近接戦闘を目的とすれば、一撃の突破に優れたリボルバー式の方が良いと分かる。漆黒のバリアジャケットも以前とは違う点が見受けられる。細部の装甲が異なり、カートリッジシステムを搭載した事によって、その装備も合わせて一新されているのだ。
そしてフェイト自身を確認し、先日よりも身のこなしが変わっているのが、構えを見ただけで分かる。
「先日とはまるで別人だな。装備も違うが……それ以前にお前自身が変わったと分かる。特訓でもしたか」
「装備も整え、特訓もしました。全ては――貴女に勝つためです」
言って、バルディッシュを握る手に力を込める。その意思を明確にシグナムに伝える為である。シグナムはその覚悟を確認した後に目を閉じ、そうか、と言葉を零す。烈火の将と呼ばれる騎士シグナムにとって、フェイトの戦いにおける姿勢に、騎士としてとても心地よく

感じた。不意打ちを仕掛けたり、小賢しい手段を使うものが相手の場合には容赦はせず、己の力で相手を叩き潰す。一方で戦の礼儀をわきまえている者には、こちらも相応に相手をしたいと考える。
「お前のその覚悟、確かに伝わった。ならば、こちらもそれに応えるとしよう」
シグナムはレヴァンティンの柄を握り、抜刀術の構えを取った。心を澄ませて集中して、その神経を研ぎ澄ませている。フェイトも斧形態のバルディッシュを握り、構えを取る。数秒の沈黙が訪れ、互いに息を整える。辺りで爆発音が響くのが分かる。ヴィータかザフィーラ、どちらかが相手と戦闘になっているのだろう。
そして――――。
「――――ッ！」
シグナムが先に踏み込んだのを合図にし、互いに相手の間合いに踏み込んで行く。一瞬の速さでいえばほぼ互角。シグナムはレヴァンティンを抜刀し、肉薄する。それに触れないように上体を横に捻って回避しつつ、バルディッシュをサイズフォームと変えてから横に凪ぐ。鎌の特徴は、剣とは違って振り下ろすのでは無く引いて裂くことであり、変則的な動きを上手く合わせることによって相手の死角を奪うことが出来る。
だが、死角を狙う武器だと言う事は、幾つもの戦を潜り抜けてきたシグナムにとっては経験済みの事であり、フェイトの動きは既に体験済みの動きでしか無い。故に視界をズラす事無く、見切る。レヴァンティンを当てるようにして刃を殺し、そのまま沿うようにしてバルディッシュの柄に刃を滑り込ませる。
が、フェイトもバルディッシュの使い手である以上は、こういった動きで回避されることは当然知っている。かつての師である使い魔に教えて貰ったことだ。柄に刃を届かせる前に、鎌を思い切り下に振り下ろすことによって、滑った刃を下に落とす。
「良い動きだが、まだ若いな」
言って、投げられた勢いを利用するように一回転してから、シグナムはレヴァンティンを上から叩きつけるように振るう。フェイトは

ダッキングで回避し、反撃にフェイトが鎌の凶刃を水平に凪ぐ。身体の勢いと合わさり、レヴァンティンを握る腕は伸びきっている。
右手の鞘で鎌の斬撃を受け流しながら、その空いている胴に蹴りを叩き込む。それにフェイトは膝を合わせ、衝撃をぶつけることによって回避しようとする。
だが、それでもシグナムの方が上手である。蹴りの衝撃はシグナムが抜き、フェイトの身体の体勢が崩れるのを確認する。この隙を見逃すことは無い為、合わせるようにレヴァンティンを振る。一撃で胴を引き裂き、非殺傷といえど昏倒するレベルだ。
しかし、既にそこにはフェイトの姿は無い。プロテクトを壁にし、蹴ることに寄って瞬時に回避したのだ。後ろに飛び、フェイトは既に弧を描くような動きで宙返りし、大きく距離を開けている。斜め上に浮遊し、バルディッシュを一度斧形態に戻し、構え直す。
連続した残撃というものは、二撃目から相手に動きを見切られ、効果が薄い。特にシグナムはそれを瞬時に見切り、此方の動きを理解している。どう動けば一番有効なのか、どうすれば自分のペースに持っていけるか。それを熟知し――――あえてフェイトにチャンスを与えてくれている。
悔しい、とフェイトは感じた。
シグナムの戦術は、自分の目指す完成形に近い。ただ近づいて斬る。相手に見切られないように初撃で仕留める。単純故に鮮麗されている。それがシグナムがヴォルケンリッターとして幾年もの時の中で経験し、積み重ねたからだ。
初撃でフェイトが無事なのは、シグナムが手加減しているからに他ならない。
フェイトはバルディッシュを構え、シグナムの間合いに入らぬように警戒しつつ、攻める。連続での残撃は見切られたならば、次は速さを生かす。ヒット&アウェイの戦法でシグナムに攻め入る。速さではシグナムより上を行く。踏み込みの速さにさえ気をつけて、バルディッシュを振るう。
しかし、シグナムはレヴァンティンを上に掲げ、それにバルディッ

シュの刃が当たり、噛み合う。

動きを見切られている。

シグナムの目は、フェイトの動きを捉えている。速さに追いつける訳ではない。しかし分かるのだ。フェイトのような相手がどのように動き、そして攻撃してくるかが。シグナムにとってフェイトの動きは繰り返しの動きの再生に等しい。経験済みなのだ。

「――ふんッ!!」

レヴァンティンに力を入れ、交わる刃を滑らせて離す。そのまま振り抜き、勢いに乗せてフェイトの身体を吹き飛ばした。フェイトは後方に飛ばされつつも飛行魔法を調節し、踏ん張る。追撃は来ない。シグナムはあくまでも受身の戦術を取っている。それはフェイトの動きを見たいからという理由からなのだろう。

体勢を整えつつ、シグナムを見ると、彼女は瞼を少しだけ閉じ、目を細めた。

「――成る程。確かに別人のようだな。その若さで、しかもこの短期間でここまで成長するとは驚いたものだ。このまま経験を積み、鍛え続ければ、私をも超えるやもしれん」

「……ありがとうございます」

フェイトと視線を交わし、シグナムはそう言葉を吐く。フェイトは警戒しつつも、純粋に強さを褒められている為、礼を露にする。シグナムは呼吸を整えつつ、レヴァンティンを一度鞘に収める。

「ヴォルケンリッターが一人、シグナムだ」

「フェイト・テスタロッサ」

「フェイト・テスタロッサ。お前はいずれ強い刃となる――故に、残念だ。ここで芽吹く可能性を、断ち切らねばならない。ここから先は、私も本気で行かせてもらう。未熟な私を恨んで欲しい」

「恨みなどしません。私とバルディッシュは、こんな所で断たれる訳にはいきませんから」

言葉を交わしたと同時、シグナムは柄を握る手に力を入れ、足の構えを整える。すると彼女の足元に紫色の術式が展開され、鞘からは薬

莢が射出される。カートリッジを使用したのだ。レヴァンティンのＡＩがシグナムに装填を伝える。
　フェイトも同様に、バルディッシュのカートリッジシステムを起動し、リボルバー部が回り、カートリッジを一発装填し、完了する。魔力光が一段と輝き、フェイトの足元にも金色の術式が浮かぶ。効果は短いが、その分爆発的に魔力が向上し、バリアジャケットが連動し、比例して身体能力も向上する。
　レヴァンティンには炎が纏い、バルディッシュは雷を纏う。
「プラズマ……スマッシャーーッッ!!」
　叫び、バルディッシュを前方に突き出して、その先端から射撃される電力を伴った砲撃魔法。射程距離は長くないが、今のシグナムは射程内に入る。だがシグナムもレヴァンティンを構え、そして鞘から抜いた。
「飛竜……一閃ッッ!!」
　魔力を刀身に集め、繰り出すと同時に炎を纏った純粋な魔力攻撃が、巨大な残撃と化して【砲】となる。
　二つの砲撃が交わり、互いに押し合う状態になる。だがそれも一瞬であり、相殺されるように閃光が辺りを包む。魔力の衝突で、凄まじい衝撃であるが、今のでどちらか片方にダメージは入っていない。状況から判断し、プラズマスマッシャーと飛竜一閃は同等の射程と威力を誇ることが判明する。
　煙で互いに視界が安定しないが、直ぐ様二撃目を繰り出すように構え直し、カートリッジを装填。フェイトは足に魔力を集中させて、自分の持つ最大の速さをぶつける為に、溜める。一気に斬り抜く。
　フェイトの身体は一直線にシグナムへ突撃する。駆け引きや小細工などせず、真っ直ぐ攻める。故に全力をぶつける。対しシグナムは、レヴァンティンを鞘に収めた状態で、剣技を繰り出す。
「紫電……一閃ッッ!!」
　魔力を刀身に集めて、上に凪ぐように縦の斬撃を繰り出す。シグナムとレヴァンティン、双方の資質である炎熱変換効果が追加で付加されており、フェイトの突撃は炎の斬撃によって止められ、再び爆煙が

辺りを包む。フェイトは直ぐ様ヒット＆アウェイの戦法で離れ、呼吸を整えつつ、煙で隠れた前方へと視線を向ける。肩で呼吸するほどに息が荒く、体力の消耗が激しいのが自覚できる。バルディッシュからは再び熱が放出され、バルディッシュにも負荷が掛かっていることが窺える。

そんなフェイトに対し、シグナムの様子には余裕があった。以前として炎を纏うレヴァンティンを、シグナムは構える。

「（……クロスレンジでも、ミドルレンジでも圧倒されている。どうすれば……！）」

既にシグナムは次の斬撃を繰り出そうとしている。全てにおいて、自分は彼女に追いつけない。勝つにはまだ、必要な欠片が欠けている。シグナムに勝つには、何としてでもそれを見つけなくてはならない。思考し、バルディッシュを構える。

――と、その時だった。

『シグナム！　ヴィータちゃんが!!』

「――む、ヴィータがどうかしたのか？」

シグナムに念話でシャマルから通信が入る。フェイトにはシグナムの意識が途切れたように見える。シグナムはレヴァンティンを構えつつ、慌てた様子のシャマルにどうしたのかを訊ねた。

だが、内容を訊ねようとした瞬間に、爆発のような大きな音が聞こえる。ヴィータかザフィーラが戦闘しているものかと思ったが、それは違った。

――結界で覆った範囲内にある、一際大きなビルが粉砕されて、そこから吹き飛ばされるヴィータの姿があった。

「――なッッ!?」

レヴァンティンの構える手が解け、目を見開いて驚愕を露にするシグナム。彼女が驚くのは当然ヴィータが吹き飛ばされたのを見たからに他ならない。先日にもヴィータは奇襲に失敗して撤退してきた。しかしヴィータもヴォルケンリッターの鉄槌の騎士であり、同じ相手に二度も敗北を食らうほど、経験は浅くは無い。

なのに、この短時間でヴィータが敗北する。驚かずにはいられなかった。
フェイトもシグナと同じ方向に視線を向けると、フェイトは目を半開きにして、半ば呆れたような表情を浮かべていた。数秒呆然としていたが、シャマルから通信が来る。
『管理局の増援も来ているわ。撤退よ！』
『――了解した』
未だに動揺は隠せていないが、シグナムはフェイトに向き直り、抜いたレヴァンティンを鞘に収める。
「――勝負は預けるぞ、テスタロッサ」
言って、シグナムはその場から立ち去って行く。フェイトには既に追撃するほどの余裕は無い。故に溜めていた空気を吐きだすように、大きく呼吸する。シグナムが去った方向を見れば、先ほど上空に飛ばされたヴィータを、ザフィーラが受け止めて抱えるのが見える。
次の瞬間には閃光弾が放たれ、一瞬の光と共に、ヴォルケンリッターの姿も、結界も無くなっていた。
一度ビルの上に着地して、上空を見ると、そこにはクロノを先頭に管理局の魔導師が連携を組んで飛んでいるのが見える。ヴォルケンリッターを追跡する為だろう。と、思考していると、なのはが此方に飛んで来るのが見える。
「フェイトちゃん、そっちは大丈夫？」
「……うん、何とかね。なのはは？」
「またワンパンで終わった」
「あはは……」
もはや苦笑いしか出て来ない。フェイトは胃が痛くなるのを感じ、帰ったら胃薬の服用を考えた。

１６撃目

友達と通話で盛り上がり、静かなリビングで自分の声だけが響く。
「――あ、もうこんな時間や。ごめんなー、すずかちゃん、長電話して」
『別に大丈夫だよ。こっちこそごめんね？』
「いやいや、私も気付かなかったし、ほなお互い様という事で、そろそろ」
『うん、おやすみなさい』
こちらもお休みと返してから、受話器を耳から離して、相手が電話を切るのを待つ。しばらくしてツーツーっと音が聞こえたので、終了ボタンを押してから電話の子機を充電スタンドに差し込む。
後ろの食卓を見れば、そこには家族で食べる予定に用意していたすき焼きの準備がされている。部屋自体が冷えているので、冷蔵庫には入れずにラップだけして置いていたのだが、家族は一向に帰ってくる気配は無い。仕方無いので、食材が悪くならないように冷蔵庫に仕舞っていく。食卓には鍋とお皿だけ用意しておき、はやてはソファの横に車椅子を停め、窓の外を見る。
時刻はもう遅い時間であり、外はもう闇夜の静けさが漂う。
皆は一体何処に行ったのだと、心配もする。と、その時だった。
「あ、闇の書」
はやての頭上に、十字の装飾がされた一冊の本――闇の書が転移してきて、そっとはやての膝まで降りてくる。はやては闇の書の表紙を撫でつつ、おかえりと言った。他の皆――シグナム、ヴィータ、シャマル。ザフィーラはどうしたと訊ねるが、反応が無いことから、まだ帰って来ないと察する。
「皆の為に、今日は頑張ってご馳走作ったんやけど、全然帰って来んからな」
言って、はやてが苦笑いを浮かべると、闇の書は反応するように浮く。どうしたのかとはやては目で追うが、闇の書ははやての頭上にま

で浮いて、表紙で頭を擦る。それはまるで頭を撫でているように、いや、頭を撫でてくれているのだろう。
「あはは、平気やで。少しくらい離れててもウチら家族や。寂しいことないよ」
はやてが笑みを浮かべながら言うと、闇の書ははやての正面に戻ってきて浮遊する。はやては闇の書を手で持ち、自分の膝元に置いた。
「そやけど、闇の書と二人っきりだと、何だか昔を思い出すなー……」
目を閉じれば、今でも鮮明に思い出せる。あの日起こった、全ての始まり――――。

◇

非現実な出来事が起き、更に自分が幼少の頃から持っていた本がそれのきっかけになったら、普通の人は冷静でいられるのだろうか。魔方陣の中心で固まることしか出来なかったはやては、とても冷静に思考できる状態ではなかった。
ただ、自分に向かってきたトラックはどうなったのかと、下に視線を向けると、そこには横断歩道を突っ切って停止したトラックがある。運転手は慌てたように辺りを見渡していた。とりあえずトラックには特に何も起きなかったことに安堵した。
しかし、やっと思考に頭が回せると思った矢先に、右から声が響く。
「闇の書の起動を確認しました」
女性の声だが、低く、そして凛々しい声色で言葉を放つ。顔を右に向ければ、そこには桃色の髪が特徴の女性がはやてに跪いている。
「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る、守護騎士でございます」
今度は左から声が響き、此方は柔らかい声色の女性だった。顔を向けると、そちらも同様に跪いているブロンド髪の女性が要る。もう何が起こっているのか理解出来なくなり、両手で頬を抑える。だが続いて後ろからは低い男性の声が響く。
「夜天の主に集いし我ら――――」
最後に正面に、赤い髪の少女が現れる。

「――ヴォルケンリッター」
皆がはやてに向かって跪いている。それぞれ足元には魔方陣が展開されており、色も様々だ。
ヴォルケンリッターは自分達の存在を名乗り、後ははやてがどのように言うかだ。説明か、或いは命令か。いずれにせよ、はやてが何かをするまでヴォルケンリッターたちは姿勢を崩す訳にはいかない。
だが、無言が長すぎる。瞼を閉じ、はやての様子は確認出来ないが、気配から察するに魔方陣の中心から動いていないことは確かだ。自分達を見て、様子を伺っているのか。しかしそれにしても静か過ぎる。待ちかねたのは正面に位置する騎士、ヴィータだ。目を開き、はやての姿を見る。
その様子を確認したヴィータが、他の騎士に念話で尋ねる。
『……あのさぁ』
『ヴィータちゃん！　静かに！』
『黙っていろ。主の前で無礼は許されん』
しかし、騎士二人、シャマルとシグナムがそれぞれ念話でヴィータに注意をする。二人の言うように、主の御前にて無礼はしてはならない。本来ならば念話で会話するのも駄目だ。主が魔導師であった場合は筒抜けになる為である。
だがヴィータは念話どころか、立ち上がってはやての目の前まで行き、言う。
『無礼っつうか……こいつ気絶してね？』
ヴィータが屈んではやての様子を見る。はやては目を回して気絶していたのだ。それにはシグナム、シャマル、ザフィーラも驚いた様子で目を開け、慌ててはやての元に駆け寄った。

◇

全身を包む浮遊感。だが不安は無い。むしろこの感じが心地よく感じる。
自分は今、夢を見ているのだと、理解出来る。だが、それには違和

感があった。夢というのに、やけに意識がある感覚がある。まるで現実の空間にいるようであるが、目を開き、周りを見ても何もない空間が広がっているのみ。
と、その時だった。
「――――おはようございます」

正面に、跪いた女性がいた。銀色の長髪が美しく、その体躯も実に美しいと思える女性。その身に纏う衣は先ほどの四人と酷似している。
「お目にかかるのは、初めてになります。私はこの本の――――夜天の魔導書の、管制融合騎です」
言って、女性は手元にある本を此方に見せる。それははやてが幼少の頃から手元にあった本だ。
「貴女は先ほど正式に、我らが主と成られました。夜天の魔導書と守護騎士四基は、貴女の知恵と力になり、御身に尽くさせて頂く所存です」
「えっと、はあ……」
はやては一度その場にぺたりと座り込んで、女性と視線を交わらせてから、とりあえず肯定しておく。
「お伝えしたい事は星のように御座いますが、このまどろみから目を覚まされれば、貴女は私が伝えた殆どを忘れてしまわれるでしょう」
「そう、なん？」
いきなりの事で訳が分からなく、なるがままにしか出来ないはやては、その言葉を鵜呑みにするしか出来ない。しかし、妙な感覚があった。
「というか、変な感じやな。貴女とは、初めて会った気がせーへん……」
そう、まるでずっと一緒にいたかのような感覚である。自分にはもう家族が居ないが、もしかしたらそれに似た感覚かもしれない。そんな疑問を口にすると、女性は抱えた本を持ち、此方に言葉を伝える。
「この動かぬ本の姿でですが、貴女がご幼少の頃より、共に過ごさせて

いただきました」
「ああ、なるほど……」
それならば納得はいくが、それならばこの女性は本の本当の姿とでも言うのだろうかと思う。それも確認したいと思い、疑問を口に出そうかとした時だった。
全身が浮遊し、同時に意識が薄れていく感覚がする。
「な、なんやこれ？」
「まどろみの時が終わるようです。もう、お会いすることも叶わないかもしれません。ですから、貴女にお願いが……」
浮遊していくはやてに合わせるように、女性は手を伸ばしながら言う。
「あの優しい騎士たちは、ずっと望まぬ戦いをして来ました。どうかあの子達に、優しくしてあげて下さい」
自分の意識がもう消え行く寸前に、女性が寂し気な表情を浮かべる。
「それから何より――何より、貴女が幸せでありますように……！」

◇

「……狭っ苦しい街だな」
ヴォルケンリッターが一人、ヴィータが、朝日に照らされる街を見ながら呟いた。
現在、はやての自宅にて、ヴォルケンリッターは待機している。何とかこの家を見つけ、はやてを寝床に寝かせたのだ。それからはシグナムとシャマルがはやての傍に待機し、ヴィータとザフィーラは二階のベランダから外を見て監視。
しかし、この街は自分達の記憶の中ではかなり平和であった。魔力が欠片とも感じられない。
「少なくとも、騒乱や戦争が渦巻く街ではないようだ」
ザフィーラはヴィータの斜め後ろから同じように街の様子を眺め、印象を述べる。

「何が闇の書の守護騎士だよ……。適当に決められた主とやらの為、闇の書のページ集めだけに戦うだけの存在。――どうせ一生こうなんだろ、あたし達は」
「いつか壊れて果てるまでは、な」
感慨深い思いになりながら、二人は言葉を露にした。
『ヴィータちゃん、ザフィーラ、戻って。――新しい主さんの、お目覚めだから』
シャマルから念話を貰い、ヴィータとザフィーラははやての寝室へと戻った。

◇

「えっと、この本(こ)は古い異世界の、ベルカってとこの魔法の本で、名前は闇の書。皆はその守護騎士。で、わたしはその主っと……」
「はい。これまでの日々や覚醒の際、闇の書の声を、聞かれませんでしたか?」
はやてが確認するように言葉を述べて、それにシグナムが肯定すると同時、そのように問うと、はやては箪笥を引きながらそれに答える。
「うーん……そんな夢を見たような、見てないような……――あ、あった!」
言って、はやては箪笥の中からある物を見つけ、それを手に取ってから引き出しを閉める。そして車椅子を押して、向きをヴォルケンリッター達に向ける。
「せやけど分かった事は一つある。私は闇の書の主として、守護騎士たちの衣食住、きっちり面倒見なアカンゆう事や」
その言葉に、ヴォルケンリッターたちは皆目を丸くし、思わず姿勢を崩してしまう。ヴィータは立ち上がって驚愕の表情を浮かべていた。
「幸い住む所はあるし、料理は得意や。あとは……お洋服!」
言ってはやてが出したのは、先ほど箪笥から見つけたメジャーだった。そこからは皆の服のサイズを調べ、服を買いに行く。ザフィーラ

に関しては唯一の男性という事で、はやても男の服についてはそんなに詳しくは無いのでどうしようかと悩んだが、ザフィーラが普段は狼の姿でいると説明し、服は不要と伝える。
　服を買ってくれれば、後は好みに合わせて着てみるだけだ。それぞれ現代の服に関して戸惑いながらも、適応の早いシャマルが率先して着替えを手伝って、何とかシグナム、ヴィータも着替えを済ませる。シグナムは未だに慣れない感覚で眉根を八の字にしながら、はやてに訊ねる。
「主はやて、本当に良いのですか？　我らにこんな施しを」
「ええって。正直な所、闇の書の主として何して良いか分からへんし、皆で一緒に、静かに暮らしていければ、それでええ」
　そこからの暮らしは、実に平和なものだった。
　服を着て、そこからはこの地球の事を教えたりなど。一気に家族が増えたので、食材を買いに行ったりした。ご飯の前にヴィータと一緒に風呂に入って洗いっこしたりして、どうもはやてに接するのに戸惑っていたヴィータと打ち解ける事も出来た。
　夕食では、皆に箸の使い方を教え、なんでもそつなくこなすシャマルが中々なれないことに微笑みつつ、ヴィータがご飯を夢中で食べる姿は良い思い出だ。

◇

　数日の時が流れ、シグナムとシャマル、ヴィータと一緒に買い物に出かけた時の事である。ヴィータは早速お菓子売り場に向かって行った。シグナムが呆れ、シャマルが苦笑いしつつ、はやては買い物リストを確認しながら店の中を見て回る。
　そんな時だった。
「騎士甲冑？」
　車椅子を押してくれているシグナムと、買い物カートを押すシャマルから、騎士甲冑のイメージを決めて欲しいと頼まれた。
「はい。我らは武器はありますが、甲冑は主から賜らなければなりま

せん」
「自分達の魔力で構築しますから、イメージだけ伝えてくれれば」
二人がそう言うが、はやてには甲冑のイメージなど想像もつかないものである。
「私にそんな知識はないし、皆を戦わせるつもりもないからなー……あ、なら服でええか？　騎士っぽい服」
振り返って訊ねると、二人は笑みを浮かべて、それで構わないと答える。そうと決まれば早速イメージの参考に、近くの玩具屋に向かう。そこで売っているもので、皆に会いそうなものを探していく。その時に、ぬいぐるみ売り場にある商品の中に、ヴィータが立ち止まって見るものがあった。
察したはやては、それをヴィータに買ってあげた。帰り道にヴィータがとても嬉しそうにしていたのも、良い思い出だ。

◇

そして、数ヶ月経った頃。
夕食後に、はやてはシグナムに頼み、抱えられながらウッドデッキに出て夜空を眺めた。冬に入って寒くなったお陰か、空がとても良く見え、星の輝きが綺麗だった。感想を口から零していると、シグナムがこちらに微笑みを浮かべつつ、訊ねてくる。
「主はやて。本当によろしかったのですか？　貴女が望めば、我らは直ぐにでも闇の書の蒐集に取り掛かり、大いなる力を手に入れることが出来るのですよ？」
言うが、はやては首を横に振った。
「そんな事したら、色んな人に迷惑がかかる。私はそんな事は望まへん。最初に言ったやろ、私は皆と静かに暮らせれば、それでええ。……だからな、シグナム」
すると、はやては手を伸ばしてシグナムの頬に触る。
「――私が主の時は、闇の書の蒐集の事は忘れてな。約束できる？」
視線を真っ直ぐ、シグナムに向ける。シグナムは数瞬だけ目を丸く

したが、直ぐに笑みを浮かべ、答える。
「――――はい。騎士の誇りにかけて、誓います」
はやての気持ちに答えるべく、シグナムも視線を真っ直ぐ合わせ、そう誓った。はやても微笑みを浮かべ、ほっと安堵する。すると、リビングから足音が聞こえ、そちらにシグナムが身体を向けると、そこにはぬいぐるみ【のろいウサギ】を手に持ったヴィータがやって来た。
「ねぇねぇはやて！　冷凍庫にあったアイス食べてもいい？」
「お前……夕食あれだけ食ったのに、まだ食べるのか？」
そんなヴィータにシグナムが呆れたように言うが、ヴィータははやての時とは打って変わり声を荒げて煩いと返す。別段シグナムを貶しているわけでは無く、シグナムに対して対等でいる故である。ヴィータは、だって、と言ってから顔を呆けて笑みを浮かべる。
「はやての作る料理がギガうまだからな！」
「しゃーないなー、一個だけやで？」
そんなヴィータを見て、はやてが笑みを浮かべて言うと、ヴィータは大喜びで冷凍庫に向かって駆けて行った。その様子にはやてとシグナム二人微笑を浮かべつつ、寒くなってきたので室内に戻るとする。
力なんて欲しくは無い。ヴォルケンリッター――――家族皆が居てくれれば、はやては満足だった。

１７撃目

蒐集に失敗し、管理局からの追ってもやっとの事で振り切ったのは、翌日の早朝であった。シャマルとザフィーラは先に家に戻り、そっと玄関の扉を開け、靴を脱いでリビングへ入る。

「すみません、何の連絡も無しに……って」

良いながら、シャマルは扉を開けると同時にはやてに謝ろうとしていたのだが、はやてはリビングで車椅子に座ったまま寝ていたのだ。考えれば当然の事である。シャマルは直ぐ様ソファの隅に置いてあった毛布を手に取り。それをかける。

はやて抱えて寝室に向かい、ベッドに寝かせてからリビングに戻ってくる。その際にテーブルに置かれた鍋の用意を見て、シャマルは申し訳ない気持ちで一杯になった。

『はやてちゃん……待ち疲れて寝ちゃったようね』

『無理もない』

通信でその事をシグナムとヴィータに伝える。シグナムはそう返し、ヴィータは通信越しに俯いていた。二人も申し訳無さそうに言葉を返してきた。

『……後でちゃんと謝る。けど、こんな所で止まるわけにはいかねぇ』

「……そうね」

ヴィータの言葉に、皆が頷いた。はやてに心配させてしまうとしても、ヴォルケンリッターたちは蒐集をしなくてはならない。そうしなければ、ならない理由がある。

◇

はやては幼き頃から足が不自由である。それは現在でも深刻であり、毎週何日か市内の病院に通っている。そこで主治医の先生にいつも面倒を見て貰っているのだが、ヴォルケンリッター達が付き添いでやって来た時に驚いたのは今でも良く覚えている。主治医には親戚

ですと誤魔化しておき、何とか納得してくれた。
　それからも付き添いでシグナムやシャマルが来ると、医師も安心したのか、笑顔で出迎えてくれる。
「こんにちは、はやてちゃん」
「お世話様です。石田先生」
　診察室に入ると、医師は笑顔で出迎え、はやても挨拶を返す。シグナムとシャマルも付き添い、一緒に室内へと入る。シャマルも丁寧に、シグナムは控えめな声色で挨拶を返す。その日も、はやての足の検査をして、医師は眉根を八の字にしてから、はやてに薬の調整の話をした。
「今回の薬も、正直言ってあまり効果は見られないわ。また別のお薬に変えてみて様子を見ようと思うけど、はやてちゃんは大丈夫？」
「ええと……石田先生にお任せします」
　薬や治療法の変更は今までよくあった事なので、はやては特に気にせず主治医に任せると答える。その笑顔につられ、医師も複雑そうであるが笑みを浮かべた。
　この日はヴィータも付き添いで来ていた為、ロビーで待っているヴィータとはやては会話をしている。シグナムとシャマルは、主治医から話があると言われ、診察室に残った。
　そこで聞かされたのは、衝撃的なものだった。
　はやての病は、足だけでは無く、やがて麻痺が全身を侵し、内臓を停止させる恐れがあると言った。聞いた時、シグナムとシャマルは驚愕に表情を染め、後半から医師に治療法についてなどを聞かされたが、耳に入って来なかった。
　二人には分かっていたのだ。
　故にシグナムは診察室を出て、人気の無い廊下に来ると、そこで壁に拳をぶつける。シャマルも傍にあった腰掛に腰を下ろし、手で顔を覆う。
「――――主はやての身体は、病気などでは無い。……闇の書の侵食によるものだ……ッ！」
　シグナムが奥歯を噛み締めながら言う。

闇の書は本来、主の手に渡ればページを揃えるために魔力蒐集を行う。だがはやては一切蒐集を行わなかった。その結果、闇の書の施された防衛プログラムによって、一定期間蒐集が無いと、主の身体を蝕み、そして死に至らしめるのだ。足が不自由なのは、その初期段階である。

夜。はやてが寝た後にヴォルケンリッターは公園にて集まり、街灯の下、シグナムとシャマルはヴィータとザフィーラにその事を伝えた。ザフィーラは深刻に事態を理解し、同時にその記憶が抜け落ちていた我に悔いる。

「……け……きゃ……」

その時、ヴィータが俯きながら拳を握り締め、言葉を零した。三人が意識をヴィータに向けると、ヴィータは顔を上げる。その表情は悲しみに染まり、涙を流していた。

「――はやてを助けなきゃ!!」

だが、同時に強い決意が現れていた。ヴィータの気持ちはヴォルケンリッター皆同じ。今までに居なかった優しい主、はやてを死なせたくない。強く思っていた。

だから、決めたのだ。

ビルの屋上に、ヴォルケンリッター四騎が揃う。囲うように並び、円を描く。

ヴィータ、シャマル、シグナムは魔方陣を展開し、それぞれデバイスを前方に掲げる。ザフィーラは既に人型に変身し、デバイスの代わりに拳を前方に突き出す。

「はやてちゃんを蝕んでいるのは、闇の書の防衛プログラム。なら、ページを蒐集して……」

シャマルが良い、姿を騎士甲冑へと変える。その手にはクラールヴィントを装備している。

「完成させて、主が正式に闇の書の主となれば、少なくとも侵食は止まる!」

ザフィーラが拳を合わせる。

「はやての為にも、人殺しはしない。でも、それ以外なら何だってやっ

てやるッ!!」
ヴィータが騎士甲冑を纏い、鉄槌――――グラーフアイゼンを構える。
「主はやて。御身の命を救うため、貴女との誓いを――――破ります！」
シグナムが騎士甲冑を身に纏い、レヴァンティンを構えた。

◇

夕方。
シグナムとヴィータが帰宅し、リビングにてはやてが起きるのを待っていた。ご飯の時間を過ぎても帰って来ず、いつまで経っても帰って来なかった為に、はやてに心配をかけてしまった。その事については反省している。故にただジッと待っていた。
「……あ、寝てもうたか……」
目を覚ますと、視界には寝室の部屋の天井が映る。そこで疑問に思ったのが、自分はベッドで寝た記憶が無いこと。確かと記憶を振り返り、思い出す。昨日は結局闇の書と昔話をしているうちに眠くなってしまい、そこで意識が途切れたのだ。自分がここで横になっているのは、ヴォルケンリッターの誰かが寝かせてくれたからだろう。
後でお礼を言わないとと思いつつ、時刻を確認すると、既に夕方に針は回っていた。朝方に寝た為にこの時間に起きてしまったのだ。慌ててベッドから起き上がろうとして、ベッドの傍においてある車椅子に手を掛けようとした時である。
「――――ッ!?」

――――強烈な胸の痛みが発生したのだ。
痛みは酷く、とても正常に呼吸すら出来ない程だった。腕に入れた力を落とし、身体がベッドに倒れる。その際に車椅子が転倒し、鈍い音が家の床に響く。
「――――ッ！　はやてッ!!」
その音に気付いたヴォルケンリッターたちは直ぐ様寝室に駆け付

くと、そこには胸を押さえて震えているはやての姿があった。ヴィータは必死な声で傍に寄って名前を叫ぶ。シャマルは直ぐに魔法でどうにかしようとするが、この症状は闇の書のプログラムの影響なのでどうしようも出来ない。

直ぐ様病院に連れて行き、主治医の医師からはしばらく入院と告げられる。痛みが引いたはやては平気だと言って帰ろうとしたのだが、それは主治医とヴォルケンリッターたちの説得によって止め、はやてを入院させる。

「御見舞い、毎日来るから！」

「ありがとうヴィータ。でも平気や。直ぐに戻ってくるよー」

はやての膝元でヴィータが言うが、はやては心配そうにするヴィータの頭をそっと撫でながら返す。それからははやての入院についての説明を一通り受けて、シグナムとヴィータは先に帰ることにする。ヴィータは去り際にもとても寂しそうな様子を見せていたが、いつまでもそうしている訳にも行かず、切り替えてから病室をあとにする。

シグナムとヴィータは先に病院を出る。はやてには先に帰ると伝えたが、勿論そうでは無い。蒐集に向かうのだ。

『こっちにはシャマルとザフィーラが残る。私達は、蒐集のほうに向かう』

『あたし達は面会以外の時間は全部収集に使う！』

病室からシャマルは念話で返事を返す。はやてには悪いが、入院して貰ったほうが蒐集活動しやすいというのも本音であった。はやての身体も限界を迎えつつある。急がなくてはならない。そのためにも、早く蒐集を終えねばならない。

そして、クリスマスには全て終わらせたいと、考えていた。

◇

リンディが襲撃に遭ったあの日を境に、リンディは急遽休暇を返上し、仕事に復帰した。現在は本局にてアースラの最終点検に取り掛かっている。そしてなのはとフェイトも、今回の闇の書の件に本格的

に協力することになり、現在はクロノからの指示待ちである。
　しかし、あの日からヴォルケンリッターたちは非常に慎重に行動するようになり、管理局でも情報が少ない湿原が広がる原生世界などで蒐集を行うようになった。その為、見つけた時には既に尻尾をまかれている方が多くなり、なのはとフェイトも出撃は無かった。
　故に学校にも普通に登校でき、フェイトと共に学校へ登校する。海岸沿いを通り、学校の門まで来た。するとそこにはバスから降りてくるアリサとすずかの姿があった。
「おはようなのは、フェイト！」
「おはよう、アリサちゃん」
「おはよう、アリサ」
　相変わらず元気に挨拶してくるアリサに対し、なのはとフェイトも挨拶を返す。いつもなら次にすずかが落ち着いた声色で挨拶をしてくるのだが、今日はその様子が無かった。こちらに手を振りながら寄ってくるアリサに対し、すずかはどこか元気が無く、俯いて意識が上の空であった。アリサが顔を覗くと、気付いたとたんに慌てて挨拶を返す。
「どうしたの、すずかちゃん？」
「それがね、さっきからこうなのよ」
　なのはが何かあったのかと訊ねると、アリサは手を振りながらそう口にする。するとすずかが一呼吸挟んだ後に、その重い口を開いた。
「あのね、話すと長くなっちゃうけど……」
　すずかの話を聞き、教室へと移動して鞄などをロッカーに仕舞い、すずかの机に集まる。話の続きを話して、全てを話終えると、すずかは眉根を八の字に歪めて机に突っ伏した。話の内容としては、友達が病院に入院したと言ったのだ。それなら余りに気分が沈んでいるのにも納得できる。
「そうだよね、心配になるよね」
　フェイトは心配そうな表情で、そうかと言葉を返す。しかも近日にはクリスマスというイベントが控えているのだ。子供である自分たちにとってはとても嬉しいイベントであるが、それが病院で過ごさな

くてはならないと思うと、とても残念に思える。
　するとアリサが何かを思いついたように表情を明るくして、掌を重ねた。
「それなら、お見舞いに行きましょうよ！　ついでにクリスマスパーティもやってさ！　プレゼントも持って行ったら喜ぶよきっと！」
「ああ、うん！　良いと思う！」
　病院に見舞いに行くついでに、クリスマスパーティもやろうという事だ。それを聞いたすずかも先ほどまでの落ち込んだ態度も一変し、ぱあっと表情を明るくした。それにはなのはとフェイトも賛成である。そうと決まれば、早速今日の放課後からプレゼント選びに行こうと話になった。

◇

　夜。
　はやての病室は個室であり、プライベートな空間である。真夜中という事もあって、部屋は暗く、静かであるが、そんな病室にうめき声が響く。もちろんはやてしか居ない。はやては布団の中で苦しそうに声を上げて、辛そうに胸を抑えて身体を丸めている。
　皆の前では平然を装っていたが、実際はかなりの痛みである。内臓が麻痺を起こす事によって、血液の循環が悪くなり、それによって障害が起こり、痛みとなっているのだ。

１８撃目

リンディが現場に復帰して、アースラも整備が終わった。闇の書が万が一暴走した際の為に、特装砲【アルカンシェル】を搭載した。管理局の保有する魔導兵器の中でもとびきり強力な高出力魔導砲である。現在アースラはなのはとフェイトのサポートをする為、地球の衛星軌道上にて待機している。

リンディはアルカンシェルの起動キーを手に握り、出来る事ならばこれが使用される事なく、事件を解決したいと思った。

◇

ヴォルケンリッターたちの足取りもつかめぬまま、クリスマスイブの日がやって来る。

なのはとフェイトはアリサとすずかと共にはやての病院へと向かった。アリサの車にて病院にまで送って貰い、降りて病院内へと入る。すずかははやてから事前に病室を教えて貰っていた為、受付にはやての事を伝えると、看護師もその事が分かっていた為、すんなりと病室へと案内してくれた。

そして病室の扉の前にやって来る。すずかが一度扉をノックしてから室内へと入った。

「はやてちゃん、こんばんわー」

「すずかちゃん、こんばんわー。わざわざありがとうな」

すずかが入室してはやてに挨拶すると、はやてはベッドにから状態だけを起こして出迎えてくれる。続いてアリサとなのは、フェイトも病室へと入り、はやてに挨拶した。

「はやて、メリークリスマス！」

「アリサちゃん、メリークリスマスや」

アリサはいつものように元気良く挨拶する。アリサはすずかを通し、連絡は取っていた仲なので面識は既にある。初対面なのは、フェ

イトとなのはである。はやては二人に視線を向ける。
「それで、二人がなのはちゃんとフェイトちゃん？」
「うん、そうだよ」
訊ねると、すずかが頷く。なのはとフェイトは笑顔で自己紹介を始めた。
「はじめまして、はやてちゃん。私、高町なのは」
「はじめまして。フェイト・テスタロッサです」
「はじめまして。八神はやてと言います。あ。別にそんな堅くならんでええよ。普通にはやてと言ってな」
「うん、じゃあ私もなのはで、宜しく、はやてちゃん」
「宜しく、はやて」
互いに紹介を済まし、それからは色々と談笑を始める。入院になった事や、プレゼントの事など。両親は何をしているのかと訊ねると、現在は両親は居ない為、親戚の方と暮らしていると話した。どうやら今日も御見舞いに来るそうなので、折角なので挨拶をしたいと思った。
プレゼントを渡し終え、そこから普段通りの談笑に入る。小一時間経った頃だろうか、扉をノックする音が聞こえる。
「あ、来たみたいや。入ってええよー」
はやてが扉に向かって声をかける。親戚の人たちはどういう人なのだろうかと思いつつ、四人も視線を扉のほうへ向けた。そしてゆっくりと扉が開かれる。
その瞬間――――。
「――――ッ!!」
それは扉を開いた者、そしてなのはとフェイトが同時に驚愕の表情を浮かべた。はやての親戚として現れたのは、紛れもなくヴォルケンリッターのシグナム、ヴィータ、シャマルの三人だったのだ。
「あ、こんばんはー。はやてちゃんの友達のアリサ・バニングスです」
「同じく月村すずかです。今日ははやてちゃんの御見舞いに来ました」
「はい、初めまして。いつもはやてちゃんがお世話になっているわ」

一瞬の表情の変化だったが、シグナムとシャマルは他の皆に心配されないように直ぐに平静を装い、アリサやすずかと挨拶を交わす。しかし唯一ヴィータだけが直ぐ様はやてのベッドの前に駆けつけ、はやてを守るように両腕を広げる。表情も敵意剥き出しにして、眉根を寄せた。

「こらヴィータ、何やその態度は。なのはちゃんたちに失礼やろー」

しかしはやてはヴィータのその態度を人見知りと考え、軽く頭を小突いた。ヴィータははやてに向き直ってから、はやてにだってと言葉を零すが、はやてはいう事を聞かない子に叱るように鼻をつむいだ。

「ごめんなー、皆。うちの末っ子が迷惑かけてもーて」

「あ、うん、大丈夫なの！　気にしてないから……」

謝るはやてに対し、なのはは苦笑いしながら言葉を返す。シャマルはまるで何事も無かったように、皆のコートを預かり、それをクローゼットに仕舞う。フェイトはヴォルケンリッターと遭遇してから直ぐ様アースラに事態を伝えようとしたが、念話が使えないことに気付いた。

「……念話が使えない。これは」

「……シャマルはその手のエキスパートだからな。これくらい造作もない」

皆に聞こえないように、フェイトはシグナムと小声で会話する。フェイトはシャマルがクローゼットの扉を閉める際に、その指に填められたクラールヴィントを確認すると、微かに翠色の光が輝いていた。

「……本当に、今日は御見舞いに来ただけなんです。ここに来たのは偶然で。……御見舞い、続けても？」

「……構わん」

フェイトがそう言うと、シグナムは目を瞑りながら答える。ここで騒ぎを起こすほど、ヴォルケンリッターもフェイトたちも愚かでは無い。

その後は気にしないようにして談笑を続けたのだが、終始ヴィータがキツイ視線をこちらに向けていたのは言うまでも無い。やがて面

会時間は終了し、病室から出て病院の正面口から外に出る。迎えに来ていたバニングス邸の車に、アリサとすずかが乗る。なのはとフェイトは寄り道して帰ると言って、二人には先に帰ってもらう。車が発車し、双方手を振りながら分かれる。

車が見えなくなってから、なのはとフェイトは手を振るのを止め、シグナム達へ向き直る。

◇

場所は移り、結界を張った空間内のビルの屋上へと着く。ヴィータの姿は途中から見えなくなり、今相対しているのはシグナムとシャマルだ。シャマルは結界とジャミングに専念している。今なのはとフェイトに向き合っているのはシグナムだけとなった。

「はやてちゃんが、闇の書の主……？」

なのはが聞かされた事実に目を丸くする。

「ああ。主はやては今、闇の書の防衛プログラムによって身体が蝕まれている。止めるには、闇の書を完成させ、主はやてを正式なる闇の書の主へとしなければならない」

シグナムは俯きながら言葉を述べる。しかし、その言葉には引っかかるものがあった。確かに闇の書の蒐集が防衛プログラムによって強制的なものになっているのは分かっている事実。しかし、その後の言葉に問題があった。

闇の書を完成すれば、はやては救われる。そうシグナムは思っている。それは恐らくヴォルケンリッター全員が思っていることなのだろう。しかし違うのだ。ユーノが調べた資料には、重大な事実が書かれている。

闇の書が完成すれば、直ぐ様暴走を起こし、その主を自滅に追いやると。

「――――待って！　闇の書が完成したら、はやてが!!」

フェイトはシグナムたちが誤認している事を伝えようと声をあげるが、その言葉を遮るようにヴィータが死角からグラーフアイゼンを

構えて強襲してくる。フェイトは完全に反応が遅れたが、直ぐ様なのはがフェイトの前に入り、代わりに吹き飛ばされる。
「なのは!!」
フェイトは飛ばされた方向に向け声をあげる。地面をバウンドした際に粉砕されたコンクリートが粉塵を巻き起こす。
しかしフェイトに向けてもシグナムがレヴァンティンを構えて斬りかかって来る。魔力反応に気付き、バルディッシュを構えて刃を食いつかせ、身体ごと吹き飛ばすように振り払う。シグナムは衝撃を足のバランスを取りつつ、態勢を保ったまま後方へと下がる。
一度レヴァンティンを鞘に収め、抜刀術の構えを取る。
「――お前たちが何を言おうが、もう聞く耳は持たん。我らは主はやての為なら、騎士の誇りをも捨てた」
言って、シグナムの身体に騎士甲冑が展開される。結界で歪められた月光に当てられ、頬から涙を流すのが見える。
「――止まる訳にはいかん。もう……止まれんのだッ!!」
強く示されるシグナムの思い。それを分からなくもないと思うフェイトではある。だが、それが間違っていると分かった以上、フェイトとしても、ここで通す訳にも行かない。瞳を閉じる。バルディッシュを構えると、バルディッシュがバリアジャケットを展開してくれる。しかし、その姿は通常のものとは装備が違うものだ。最低限のインナー部に、手足の装甲のみという、かなり薄い装甲である。
涙を拭ったシグナムが、その姿を視認して目を細める。
「普段より薄い装甲を、更に薄くしたか」
「その分、速く動けます」
「……掠っただけでも死ぬぞ」
「貴女に――勝つためです!!」
言って、フェイトはバルディッシュを構える。狙うは初撃。しかしそれはシグナムも同様である。互いに抜刀する形を取り、タイミングを見計らう。そして数瞬後、両者は互いに間合いへと肉薄した。

◇

ヴィータに吹き飛ばされ、地面に突っ伏すなのはの下に、ヴィータが騎士甲冑をその身に纏わせながら近づく。その頬には涙が伝っている。

「……邪魔……すんなよ……」

ゆっくりとグラーフアイゼンを上に掲げる。

「今ここで止まっちまったら……はやてが死んじゃうんだ！　……だから……邪魔……すんなぁぁぁーーーーッッ!!」

スイングするようにグラーフアイゼンを振るう。なのはは特に回避する動きを見せず、そのままハンマーヘッドが直撃し、後方にあった燃料タンクへと衝突する。その衝撃で中身の燃料が爆発し、ヘリポートが炎に包まれる。

ヴィータの目の前には炎が広がっている。グラーフアイゼンでの直撃、さらにこの炎の中だ。致命傷とはいかなくとも、かなりのダメージは通っている筈である。しかし――。

その炎の中から、人影が現れる。平然と炎の中を歩いて出てきたのは、バリアジャケットを装備したなのはの姿だった。

「――悪魔め……ッッ!!」

「――……悪魔で……いいよ」

なのはは拳を構え、言い放つ。

「――話を聞いて貰う為なら、悪魔でもいいッ!!」

いつもの無気力な表情では無く、その瞳に意思を灯させた。ヴィータはそんななのはに対し、叫びをあげてグラーフアイゼンを振った。

「シュワルベフリーゲンッッ!!」

鉄球のような魔力弾を精製し、それを宙に放ってからグラーフアイゼンで思い切り振り、ハンマーヘッドが鉄球にぶち当たる。同時に魔力に包まれ、されに衝撃は増して、それが誘導弾となってなのはへと

襲い掛かる。
なのはは一旦飛んでそれを回避して、戦場を屋上から空中へと変える。当然シュワルベフリーゲンは追撃してくる為、方向転換してから鉄球に向けて拳を構える。
「連続普通のパンチ」
一瞬の速さで繰り出された拳によって、シュワルベフリーゲンの鉄球が全て粉砕される。だがヴィータもシュワルベフリーゲンを直撃させようとは思っていない。なのはが空中に場所を移した事によって、位置はビル群の間だ。
背後のビルの角からグラーフアイゼンを振り回すヴィータが現れる。
「――――テートリヒ……シュラァァァーークッッ!!」
ハンマーヘッドが横に振られてなのはに迫るが、その直撃箇所を左腕でガードする事によって防ぐ。が、衝撃までは殺せない為にビルに吹き飛ばされ、壁を粉砕していく。ヴィータは直ぐ様グラーフアイゼンを構え直し、カートリッジを装填する。薬莢が射出され、ハンマーヘッドがリロードされる。するとハンマーヘッドの形が片方が尖り、もう片方が噴射口へと変わる。
振り子の様にグラーフアイゼンを振り回し、その勢いはどんどん増される。
「――――ラケェーーテン……ハンマァァァァァーーーーッッ!!!」
技名を叫び、なのはが丁度ビルから出てくるタイミングを見計らって、その鉄槌をぶつける。なのはは咄嗟に両腕でガードするが、それでも身体の芯を捉えている。横に振られた衝撃は再びなのはを吹き飛ばす。下方に飛ばされた為、地面のアスファルトに突き刺さるように衝突する。その衝撃はクレーターを作り出す程だ。アスファルト下の地面が抉れた影響で粉塵が舞う。
ヴィータはそれを確認しつつ、息を荒げてグラーフアイゼンから熱を放出させる。勿論これで仕留めたとは思っていない。二度の戦闘で分かった事は、此方が少しでも隙を見せたならやられるという事。だが、なのはに隙を与えずに、全力の攻撃を当て続ければ、勝機はあ

るという事だ。
　呼吸を整え終わり、下方の煙に視線を集中する。いつでも迎撃できるようにグラーフアイゼンを構える。なのはが出てきたら、もしくは姿が一瞬でも見えたなら直ぐに攻撃する。そして倒れるまで殴り続ける。それしか方法は無い。
　一瞬後。なのはの姿が煙から出てくる。ヴィータは直ぐ様迎撃するために、攻撃という手段を用いて対応する。
　だが、ヴィータに誤算が生まれた。
　なのはの動きは、此方が予想していたものを遥かに超え、その速さは――ヴィータが追いつける領域を超えていた。
　どう足掻いてもなのはの動きは止められない。いかなる手段を取る事も出来ない。時間がゆっくりと流れ、ヴィータの意識にはなのはの動きがゆっくりと見える。何も出来ない。このまま拳を食らうだけしか出来ない。
　しかし――。

「――ッ!!?」
　なのはの拳は、ヴィータに届かなかった。衝撃で煙が舞うが、ヴィータは無事である。瞳を開けて、何が起こったのかを確かめると、自分の身体の周囲に、黒い結界みたいなものが展開されていた。なのはもこれには驚き、その結界を見る。
　一体何故展開されたのか、それを思考しようとしたが、その前に正体が判明する。
「――闇の書……？」
　ヴィータの頭上に現れたのは、紛れもない闇の書だった。しかし、その雰囲気がいつもと違うことに気付く。本からは黒い光が漏れており、次第にそれは大きくなっていく。数瞬後には、闇の書から触手のようなものが展開され、纏わりつき、それが蛇の形であると気付く。
　その蛇はレイジングハートのＡＩのように英語で言葉を放っていく。その内容は闇の書の防衛プログラムの起動と、魔力蒐集の事について。言葉の最後には――守護騎士システムを破棄し、取り込む事

によって最後のページを完成させると。
この蛇の形をしたものこそ、闇の書という名称をつけた元凶――――ナハトヴァールである。

「……思い、出した。……こいつが……こいつが居たから……ッ!!」
その姿を見て、ヴィータは全てを思い出した。闇の書を完成させて、歴代の主がどうなってしまうかも。それに気付いた瞬間、ヴィータの行動は早かった。
グラーフアイゼンで思い切りナハトヴァールに向けて攻撃を行う。しかし見えない壁のようなもので攻撃は届かず、逆にヴィータの身体が動きを封じられる。なのはは直ぐ様ヴィータを助けようとナハトヴァールに肉薄するが、ナハトヴァールによって強制転移を食らってしまい、なのはの姿が消える。
ナハトヴァールはビルの屋上を越える高さまで浮遊した後、ヴィータを気絶させ、他のヴォルケンリッターを近くに強制転移させる。フェイトと戦闘を行っていたシグナムも、結界とジャミングを行っていたシャマルも、異常に気付き、向かっていたザフィーラも、一瞬で近くに転移させ、拘束する。フェイトもなのはと同様に強制転移を受けて、姿を消される。
守護騎士システムはあくまでも闇の書のプログラムの一つに過ぎず、ヴォルケンリッターの強制転移など造作も無いことだった。次にナハトヴァールは、とある人物を転移にてこの場に召還する。
「……あれ……ここは……」
目の前のビルの屋上に転移させられたのは、闇の書の主であるはやてであった。はやては今までベッドで横になっていた筈と、事態の状況に気付けず、辺りを見渡して混乱を表す。が、ナハトヴァールがはやてに話しかけた事によって、ヴォルケンリッターたちの姿を確認し、驚愕に表情を染める。
「やめて！　皆に何したん!!　早く皆を元に戻して!!」
はやての叫びに、ナハトヴァールは反応する。はやての言葉を、守護騎士システムの取り込みと判断して。その瞬間、ヴォルケンリッ

ターたちにそれぞれナハトヴァールの触手が胸に突き刺さり、その姿が一瞬で消える。

「……あ……ああ……！」

後に残ったのは、はやてが皆に買ってあげた服のみだった。

「ああ……ああ……あああーーーーーーーーーーーッッ!!!」

嘘だ。夢だ。こんな筈じゃない。そう思考し、はやては絶望に声を上げた。

次の瞬間に、闇の書が覚醒する。

巨大な黒い波動と共に、凄まじい魔力が放出される。

その中心で、闇の書の管制融合騎は言葉を零す。

ああ、また、同じ運命を辿ってしまった、と――。

１９撃目

気付いた時には、周りは何も無い空間が広がっている。しかし不安は無く、むしろこの感じが心地よく感じる。

自分は今、夢を見ているのかと考える。しかし、自分は今車椅子に乗り、背もたれに寄りかかるようにして寝ている。夢のような現実。現実のような夢。どちらが本当か分からない。夢では無いのなら、何故自分はここにいるのか。それが分からない。

「――ここは……？」

声を出してみる。意識が朧気であるが、しっかりと声が響いているのが分かる。視線をさ迷わせ、空間を確認する。と、目の前に一人の女性が現れる。銀色の長髪が美しく、その体躯も実に美しいと思える女性。以前に見たことがあるような感覚がする。

思い出そうにも、どうにも意識が朦朧とする。瞼が重く、眠気に狩られる。

「どうかゆっくり……お眠りを」

銀髪の女性がはやての目線に合わせるように、膝を抱えて視線を合わせる。

「――そうすれば、痛みも苦悩も無い、素晴らしい世界へと旅立つことが出来るでしょう」

「……ああ。そんな所あったら……ええ……なぁ……」

言って、はやては意識を手放した。

◇

強大な結界に包まれた海鳴市全域。陸も海も包まれたその強大な結界の中心に位置する所に、とてつも無い魔力が放出する。銀髪が特徴の美しい女性であり、その風貌はヴォルケンリッター達の騎士甲冑に似た物を身に纏い、背には黒翼が生えている。顔と腕、足に赤い紋様が刻まれており、左腕には蛇のような触手が蠢いている。女性が何か言葉を零すと、腕に巻きついた触手が吸い込まれるように消失し、

そこにガントレットのようなものが装備される。
彼女こそが、闇の書の管制融合騎。闇の書が完成すると同時に、主と融合して現界する強大な存在である。彼女が現界し、暴れれば最後、その次元世界は滅ぶとまでされている。
彼女が腕を上げると同時に、大地から異形の柱がいくつも出現し、同時に炎が辺りに広がって柱から柱へ炎が行き来する。まるで火山の噴火口にでもいるかのような空間に変わってしまった。そんな結界の外側から、地獄絵図と化した内部に突入してくる存在がいる。
フェイトを抱えたなのはである。
「ありがとう、なのは」
フェイトはなのはに礼を言うと、なのはは笑みを浮かべて大丈夫と答える。先ほどナハトヴァールによって強制転移を受けて、海鳴市よりも遥かに遠い場所に移動させられたのだが、幸いなのはとフェイトが同じ場所に転移した為に、なのはの一直線の速さによって短時間でここまで戻ってこれた。
なのはとフェイトは上空で浮遊する管制融合騎に視線を向ける。短時間の間に事態はかなり深刻化していた。ナハトヴァールが起動してヴォルケンリッター達が捕まったところまでは分かるが、恐らくその後にヴォルケンリッターを取り込むことで闇の書が完成してしまったのだろう。
以前ユーノに聞いた話では、闇の書が完成した場合には、その主と融合してユニゾンデバイスが力を開放するとの事。しかし直ぐ様防衛プログラムナハトヴァールが起動し、主の意思関係無しに、その命が尽きるまで暴れ続けると。
つまり、現在管制融合騎ははやてと同じであるが故に、下手に手出し出来ない状況なのである。最悪の場合ははやてを犠牲にと考えもあるらしいのだが、そんなのは誰も望んでいないのは確かだ。だとすれば――――。
「――――話してみるしか、無いよね」
「――――うん」
管制融合騎に切り替わったとしても、はやての意識が完全に呑まれ

ているとは限らない。少しでも可能性があるのなら、それを試してみたいと思い、なのはとフェイトは互いに顔を見合わせた後に、管制融合騎のもとへ行く。
結界内だから良いものの、これが現実で起こった事ならば大災害となっていただろう。あたりのビル群は全て岩の壁と成り果てており、もうここが都会の街並みだったのが嘘みたいに思える。アスファルトの地面の殆どがひび割れ、その隙間から溶岩があふれ出している。空にも炎の柱と、歪められた黒い雲が展開されている。とてもこの世のものとは思えない。そんな中を二人は突き進み、管制融合騎のもとへたどり着く。
管制融合騎は目線を下に、なのはとフェイトと視線を交じ合わせる。

◇

まどろみの中で、自分の記憶に無いものが映し出される。自分が住む世界とは明らかに違う世界で、例えるなら昔の西洋の町と言うべきだろうか。そのような光景をバックに、一人の女性が映し出されている。銀髪の女性――――闇の書の管制融合騎だ。彼女は寂しげな表情を浮かべ、闇の書を抱えている。
相対するは、プレートアーマーのような騎士甲冑に身を包むヴォルケンリッター達である。皆暗い表情をしており、シグナムは管制融合騎と視線を重ね、シャマルとヴィータは顔を俯き、ザフィーラは目を閉じて腕を組んでいる。彼等がそんな状態になっているのも、この背景にある。
街は燃え、幾人もの死体が転がっている惨状。戦争でもあった光景であるが、ここに居るのはもはや管制融合騎とヴォルケンリッターだけである。人間は全て死んだ。
闇の書が完成した主がナハトヴァールに取り込まれ、全てを滅ぼしたのだ。
『……お前達には、すまないと思っている』

主の命が尽きる間際に、管制融合騎はヴォルケンリッターたちに謝る。左腕を上げ、そこに付けられたガントレットを見せる。
『誰が、このようにしたか分からないが、ナハトヴァールが暴れれば、運命は変えられない』
管制融合騎がそう言葉を残し、再び謝る。だがヴォルケンリッター達は何も言わずに、顔を俯かせている。管制融合騎の思いは、ヴォルケンリッター達に充分伝わっている。管制融合騎が悪いわけでもない。そしてどうすることも出来ない事を知っているのだ。
望むものがあるとすれば、このような悲劇を生まぬように、壊れてしまいたいと願う。
その瞬間に、まるで歪んだように場面が変わる。昔の時代から次々と遡るようにして闇の書の記憶が次々と頭に流れ込んでくる。すると自然とその知識までもが頭に記憶され、最初は理解出来なかったものまでをも理解出来るようになっていく。
その記憶の中身はどれも悲劇ばかりであったが、現代の記憶になっていくと、その内容が一変する。映るのは自分の姿だ。まだ幼少の頃であり、段々とそれが現在の自分の姿に近づいていく。そして映る自分は此方に向かって闇の書と呼ぶ。
――管制融合騎が微笑みを浮かべた。
やがて記憶はヴォルケンリッターがはやての病気の正体が分かった時が流れ、その後に皆が必死で蒐集するのが分かる。
見えるのはヴィータの姿だった。赤い騎士甲冑を身に纏い、帽子にはのろいウサギが付けられている。はやてが玩具屋で買ってあげたものだ。その姿から、先ほどとは違って現代になっているのが理解出来る。しかし場所は地球ではない。
天は暗く、酷い豪雨だ。その影響で足元の土が泥となり、安定しない。ヴィータは怪我をしてふらついていたのもあって、歪んだ土に足を滑らせて前から転倒する。すると背中にも大きな傷があり、流血している。だがヴィータは手に力を入れ、立ち上がる。
『……痛く、ねぇ……』
激しい雨の影響で泥は直ぐに取れるが、頭からの出血も頬を伝って

流れる。歩き、目の前に大きな沼が広がっていた。
『……早く完成させて、ずっと静かに暮らすんだ。はやてと……皆で。その為だったら、こんな痛み、全然大した事無い。……はやてが死んじゃったら、嫌だ。……はやてが死んじゃったら――――嫌なんだッ!!』
涙を流し、叫んでからグラーフアイゼンを構える。ヴィータの思いに答えるようにグラーフアイゼンはカートリッジを消費し、薬莢を射出すると同時に、近くで雷が落ちる。その轟音に呼応するようにして、沼から巨大な原生生物が何匹と現れて、激しい咆哮をあげる。ヴィータはその原生生物に向かって、突撃した。
次にシグナムが、そしてシャマル、ザフィーラ。同じように傷付きながら、必死に蒐集を行っていったのが分かった。
――――はやては、全て理解した。
一体何が起こったのか、何故こうなってしまったのか。断片的にだが、記憶と経験を得た今なら理解が出来る。
故に、こんな時に眠ってなどいられない。

「――――思い、出した。全部思い出した」
意識を覚まさせ、背もたれに預けていた身体を起こさせる。すると、はやての膝に手を当てる管制融合騎の姿があった。
「……どうか、お眠りを」
管制融合騎は此方を案ずるように言って来るが、それに頷いて眠る訳にはいかない。今こうして自分が眠っている間にも、世界は危険な状態にあるのだ。故に首を横に振って、完全に意識を覚まさせる。すると、膝に手を置く管制融合騎が震えだす。
その表情を見ると、管制融合騎は涙を流していた。懇願するように眉根を歪ませ、再度言葉をかけてくる。
「どうか……眠って、下さい……！　我が主……ッ！」
管制融合騎の懇願に対し、はやては優しく微笑みを浮かべてから管制融合騎の頬に手を伸ばした。
「私は闇の書の主……いや、夜天の魔導書の主や。ここで寝てなんて

いられへん。何とかせなあかんからな」
「しかし……しかし！　ナハトが……ナハトヴァールが止まりません……ッ!!」

涙を流して、管制融合騎は思いを吐きだすようにしてその言葉を吐く。はやては管制融合騎の頬を撫でて落ち着かせてから、大丈夫と答える。今までの闇の書の記憶には前例の無い、主の意識が残っているのだ。確実とは言えないが、まだチャンスはあると考える。
その可能性があるなら、はやてはそれに賭ける。
「貴女も、もう闇の書なんて呼ばせへん。私が、貴女に名前を与える」
はやては管制融合騎に真っ直ぐ視線を向けて、その名を伝える。
「――――祝福の風・リインフォース。私と共に、運命を変えよう」
はやては頬から手を離して、代わりに管制融合騎――――リインフォースに手を伸ばす。リインフォースは涙で歪んだ表情から、はやての言葉に答えるように、真っ直ぐと視線を合わせてから、態勢を直して、その手を取った。
「――――はい、我が主！」

◇

管制融合騎に向かって、必死に声をかけようとも反応は無く、代わりにとてつもない量の魔力を此方に繰り出してくる。それを回避しつつ何度も繰り返しに、管制融合騎、又ははやてに声をかける。すると変化が現れた。
頭に伝わるように、声が聞こえる。念話であるが、これは確かにはやての声だった。
『外にいる方、聞いてください！　今ここで暴れている子を、助けてあげて！』
「ッ！　はやて！　聞こえるッ!?」
フェイトがそれに返事をかけるが、どうやら此方の声は聞こえていないようで返事は無い。はやての言葉はそこで途切れるが、これでは

やてが完全に闇の書に取り込まれていないのが分かる。一先ず安心したが、未だに有効手段が分かっていない。
　するとデバイスに通信が入り、立体ディスプレイが表示される。相手はユーノからであり、どうやらアースラから連絡を取っているようだ。
『なのは、フェイト！　聞こえる!?』
「聞こえるよ、ユーノくん！」
『こちらでも状況は確認出来た！　幸運な事に、主が意識を保っている。この状況なら、現在起動している防衛プログラムを切り離せるかもしれない！』
　その言葉を聞いて、一度フェイトと顔を見合わせる。防衛プログラムが切り離せるのなら、この闇の書事件を一気に解決できる。その方法を訊ねるとユーノはなのはの方へ向かって、拳を突き出す構えを行う。そして口元をニッと笑い、答える。
『なのは、君がやるのは一つ。その管制融合騎を――――思い切りぶっ飛ばす！』
　ユーノの言葉に一度呆気に取られた二人だったが、直ぐに笑みを浮かべてからなのはは腕を慣らすように回した。
「さすがユーノ君……分かりやすい！」
　悩みの種が解決したのと、その方法が自分のもっとも得意なものであった為、なのはは軽く身体を伸ばしてからよしっと声を上げ、フェイトのほうへ向く。
「フェイトちゃんはここから離れて」
「でも、なのは」
　フェイトは自分にも何か出来ないかと訊ねようとしたが、なのはにそう言われてから顔を見るが、なのはの表情は先ほどまでの明るい顔から一変し、真剣に向き直って視線を向けている。それだけでフェイトは理解する。自分ではなのはの足を引っ張ることになるという事を。
　こくりと頷いてから、フェイトは直ちにこの場から去っていき、なのははさてとと良いながら管制融合騎のほうへ身体を向ける。ご丁

寧に此方を見下したままでいる管制融合騎は、こちらの話が終わったと分かった瞬間に、言葉を放って来る。
「――話は済んだか？」
「うん、オッケー。もう面倒くさいのは無さそうだから、気軽に動けるよ」
まるで状況に見合わないなのはの態度に、管制融合騎はピクリと眉を反応させる。片腕をなのはの方へ向かって突き出し、その掌に魔力を集中させながら口を開く。
「……先ほどの会話は聞こえていたが、私を倒せると思っているのか？　……不可能だ。忠告する。仲間と同様にここから去れ」
「ご忠告どうも。でも大丈夫なんで、はい」
冗談混じりに答えると同時に、管制融合騎の片腕に集中した魔力が放出されて、その巨大な魔力砲がなのはへと襲い掛かる。今までの経験の中でも比が無い砲撃であり、その射線上に並ぶビル群が刳り貫かれるように消滅する。そのど真ん中にいたなのははゆっくりと片腕を構えて、パンチを繰り出す。
それだけで、魔力砲はなのはの直前で霧散するように消滅した。それを見た管制融合騎は思わず目を丸くする。
――それを合図に、戦闘が始まる。
両者一瞬後に姿が消え、常人の目には捉えることの出来ない速さでの動き。なのはが一旦後ろに下がってからビルの屋上へと移動すると同時、管制融合騎は凄まじい勢いで一直線になのはへと突撃し、肉薄すると同時に振り下ろすように拳を繰り出す。それを片腕を上げてガードし、衝撃で足場のコンクリートが砕け散る。崩落する建物の中で、重力に従い落ちる中、管制融合騎は距離を開けずにそのまま次の攻撃へと移行する。
一度腕を引き、再び殴るのを合図にして、次に左腕、そして右腕と拳を連続で繰り出す。その動作すら見えない速度で拳が離れ、それぞれなのはの身体の至るところを狙って放たれるが、それらを全て腕や足、又はダッキングで回避しつつ捌いていく。
連打の最後に、管制融合騎は一瞬後には体勢を変えて、身体を捻っ

て腕を引く。そして思い切りの力を入れた拳をなのはにぶち込んだ。狙うは心臓部であり、胴の中心目掛けて拳が来るが、それを腕をクロスしてガードする事により、後方へと吹き飛ばされることによって衝撃を受け流す。

地面に着地しつつ、余った勢いを利用して後方へと足を動かして距離を取ろうとする。しかし体勢を整えることを管制融合騎は許さない。直ぐ様接近し、魔力を帯びた拳をなのはの頭部目掛けて振るうが、腕で防がれたことにより直撃には至らない。

なのはは地面を跳躍し、飛行魔法で上方へと飛び、同じく管制融合騎も距離を空けずに飛んでから蹴りを繰り出す。が、なのはは合わせるようにして管制融合騎の脚を蹴り、威力を衝突させることによって防いだ。だが体勢が崩れて逆さになってしまい、管制融合騎は脚を振り子の役目として、腕を突き出して拳を振るう。しかし逆さでも冷静に腕でガードして攻撃を通さない。

互いに間合いを詰めたところで、両者は一度身体を捻り、腕を引く。そして肉薄した瞬間に、同時に拳をぶつけた。

衝撃であたり一面が吹き飛ばされて、その周辺にクレーターが出来上がる。その地面に着地したのは、無傷のなのは。

同時に着地した管制融合騎もまた――無傷だった。

「まさか……完成された闇の書の力に対し、ここまでやるとは……」

互いに背を向けた状態で言葉を発し、管制融合騎はなのはの方へと振り向く。するとなのはも管制融合騎の方へ向き、衝突して煙が上がった拳を前に出しながら言う。

「うん――強いよ、貴女は」

２０撃目

管制融合騎――――否。ナハトヴァールが足を踏み込むと同時に衝撃で地面が崩壊する。

常人には視認することも出来ない速さでなのはに肉薄し、魔力を帯びた拳の連撃を繰り出す。対しなのははそれに合わせるように拳を繰り出し、噛み合う。一発一発が凶悪な程の威力である為、殴る度に辺りに衝撃が伝わる。だが、当人たちにとってはそんなのは意識の外だ。

連打の最後の一発が終わると同時に後方へと跳躍すると、ナハトヴァールは追いつき、腕一杯力を入れて作った拳を振り下ろすように繰り出す。それを身体を斜めに動かすことによって回避しつつ、その動きを認識されない瞬間に、ナハトヴァールの頭部の横へと拳を叩き込む。周りの瓦礫を粉砕しながらバウンドし、ナハトヴァールは吹き飛ぶが、あえてバウンドさせることによって衝撃を流している。

回転してから飛行して此方を確認し、ナハトヴァールが周囲に魔力弾【バレットシェル】を生み出し、それを此方へと放ってくる。正面から放たれる魔力弾【バレットシェル】を左手で拳を作り、それを裏拳で殴り飛ばしつつ、ナハトヴァールへと向かって踏み込む。

跳躍することによって地面にクレーターができるが、それを気にする事なく接近し、アッパーでナハトヴァールを殴り飛ばす。

殴り飛ばされながらも、防御魔法を展開していた為にダメージは少ない。故に後方へ飛ばされつつも再び周囲に魔力弾【バレットシェル】を展開する。それに気にする事無く飛び上がり、ナハトヴァールに肉薄する。周囲にはフェイト同様に雷を展開しており、常人ならもれなく即死できる状況だが、なのはには関係無い。躊躇する事無くナハトヴァールの頭を掴み、そのまま下方に向かって投げ飛ばす。

それをナハトヴァールが途中で回転しつつ受け身を取ることで回避するが、その隙を逃さずに踵落としを繰り出す。それをナハトヴァールは両腕をクロスして、踵を掴む。同時に周囲に魔力弾【バレットシェル】が展開される。それから逃れる為に身体全体を捻り、

空いている足でナハトヴァールの頭部に向けて蹴りを入れる。しかしそれを耐え、そのまま魔力弾【バレットシェル】をほぼゼロ距離でなのはにぶつける。それと同時に足が解放され、その勢いを利用しつつ、後方へ宙返りをしながら着地する。

と、次の瞬間にはこちらに拳を繰り出すナハトヴァールの姿がある。防御や回避をする暇も無く、胴に直撃し、ナハトヴァールはそのまま腕を振り抜く。ナハトヴァールによって出現した柱にぶち当たり、衝撃で柱が砕けるが、勢いは止まらずに更に後方へと飛ばされる。

柱は連続して聳え立っている為、また柱へとぶつかり、粉砕する。それが五回ほど繰り返され、やがて舞台は海へと移行する。ようやく柱によって受け止められたと同時に、ナハトヴァールは追いつき、跳躍してから飛び蹴りを繰り出してくる。

直撃し、更に後方へと飛ばされるが、一際大きな柱が後方に控えていた為、なのははその柱の表面に垂直に着地し、そのまま上方へと駆け上がるように跳躍する。それに追いつき、ナハトヴァールは身体を捻り、勢いをつけたまま魔力を帯びた拳を振り上げ、殴る。それを同時に拳をぶつけることで威力を相殺しつつ、更に後方。つまりは柱を登るようにして移動する。円を描くようにして駆け上り、やがて柱の天辺まで跳躍し、勢い余って宙に浮く。

正面には至近距離まで追いついたナハトヴァールが、裏拳し、それを屈むことで回避し、起き上がると同時にアッパーを繰り出す。だが上体を反らせることで回避して、そのまま一回転してから蹴りを頭部に向けてぶつけてくる。それを腕を上げる事でガードし、空いている手で拳を作ってから腕を引き、それをナハトヴァールの頭部へ繰り出す。ナハトヴァールはそれをダッキングで回避し、慣性を利用して反対の足で蹴りを胴に当ててくるが、腕をクロスさせることで受け止め、後方へと飛ぶ。

柱の上へと着地して、正面を見据える。一瞬後に、正面数一〇メートル離れた位置にナハトヴァールが着地した。

「――――良い動きだ。さすがに強いな。この私と互角に戦えるのは……お前が初めてだ」

なのはの方を見据え、ナハトヴァールは言い放つ。なのはは特に表情を変えずにジッとナハトヴァールを見る。
片腕を上げ、ナハトヴァールは魔力を集中させと、周囲に黒い魔力光が浮かんで出現していくのが分かる。それがナハトヴァールの腕に収束されていき、その手には一メートルほどまで形成された魔力が球体となる。
「遠き地にて、闇に沈め――デアボリック・エミッション!!」
詠唱を唱えると、その球体が膨らみ、ナハトヴァールを中心として広域殲滅魔法が展開され、魔力の爆発に巻き込まれる。凄まじい衝撃で、尖った柱の先端が刳り貫かれたように平らにされる。魔力が霧散されて辺りが確認できるようになると、そこには平然と立つなのはの姿がある。
だがナハトヴァールの姿はそこには無い。姿を探そうと視線を動かそうとした瞬間――。
「――後ろだッ!」
背後からの声が聞こえると同時に、なのはの頭部にナハトヴァールの拳が叩き込まれる。完全に油断していたところに叩き込まれた拳によって、なのはの身体は吹き飛ばされ、地面にバウンドして数メートルのところで回転し、着地して起き上がる。
そこで攻防は一旦止み、距離を空けたなのはとナハトヴァールは視線を交わらせる。
「手ごたえあったな。どうやら……勝敗が見えてきたようだな。私は闇の書の力と無限連環機構により、無限の魔力と力がある。お前に受けた傷も直ぐに元通りだ。こんな風にな」
言って、ナハトヴァールは傷ついた腕を瞬時に治して見せる。
「対し、お前はどうだ？　傷が増すばかりだ。いくら互角に戦っていても、結果として勝つのは――」
「――煩いの」
ナハトヴァールの言葉を遮り、なのはは首を鳴らす様に左に倒し、次に右に倒す。そしてナハトヴァールの方へ向き直る。
「ペラペラと……もう終わりなの？　――戦いは？」

その言葉に、ナハトヴァールは口を空けて呆気を露にする。が、直ぐに表情を切りかえてから、身体を屈んで力を集中する素振りを見せる。

「――――いいや、まだだッ!!」

言うと、背に生えた黒翼が大きく展開され、そこから魔力が放出される。すると全身に黒い魔力光が輝き、ガントレットとなった筈のナハトヴァールが解かれると、それが全身を侵食するように纏わりつき、ナハトヴァールの肌部位に青い紋様が浮かび上がる。

次の瞬間に、ナハトヴァールの姿が消え、目の前に姿を現す。気付いた瞬間には拳が胴に叩き込まれ、同時に魔力が放出する。巨大な魔力は砲撃であり、次元戦艦で撃つ主砲くらいのものだ。それに巻き込まれるが、ナハトヴァールはなのはの身体に追いつき、拳を繰り出す。

心臓や頭には勿論、全身を粉砕するように拳を叩き込んでいき、なのははそれに追いつかず、全て直撃で連打を受ける。連打の最後で吹き飛ばされ、ナハトヴァールは地面を跳躍し、その勢いを利用し、更に拳を胴に打ち込む。そのまま抱えるようにしてから下方に向かって投げ飛ばし、なのはが落ちるスピードを追い越して、今度は急上昇して蹴りを繰り出す。くの字に曲がったなのはは、そのまま直上に吹き飛ばされて、結界を突き破って彼方へと飛んでいく。

◇

衝撃で空の彼方へと飛ばされ、どこかにぶつかって勢いが止まる。正面に見えるのは――――地球である。まるで地球儀を見ているような気分であり、しばらくは思考を停止していたが、いつまでもそうしている訳にはいかないので状況を整理する。衝撃で吹き飛んだと思われる石が目の前に落ちてくる。だが、その落下速度がおかしい。明らかに遅い。まるで重力が少ないように思い、辺りを確認すると――――そこは月面だった。

「(宇宙ッ!? とりあえず息止めればいいのかな?)」

咄嗟に鼻をつまんで自分の身体を確認する。特に問題は無かった

為、改めて地球を見る。こうして宇宙から見た地球は実物では初めてなので、出来ることならばしばらく観察していたいが、そうも言っていられない。月の重力は地球の何分の一か思い出そうとするが、そんなものはテレビ等で得た曖昧な知識でしか無い。少なくとも地球よりは少ないという事だけ。

近くにあった手の平よりも少し大きめの石を投げ、再び手に落ちてくる感覚を見る。それを見て問題無さそうだと思い、石を捨て、屈んでから思い切り力を入れて、飛ぶ。

その瞬間――――月に新たなクレーターが出来た。

◇

ナハトヴァールは、結界の遥か上空に吹き飛んだなのはの方向を見るように上を向きながら呼吸する。その息は荒々しく、明らかに体力が少ないことが分かる。様子を見る限り、なのはが生存している事は無いだろう。いや、この形態になった時点で生き残れる存在は先ず居ない。全身から放たれる力は一切の生物を殺す。

しかし、この形態は無呼吸運動のように、身体にかかる負担が大きい為、本来は決着を早めたい時にのみ使用する切り札だが――――。

と、思考していた次の瞬間に、目の前に何かが衝突してくる。

衝撃は凄まじく、まるで隕石が落下してきたかのような衝撃であり、それにナハトヴァールは直ぐ様跳躍して距離を取る。巨大な柱は衝撃で削れていき、その高さを大分低くしてようやく衝撃が収まる。爆煙で辺りは見えないが、ナハトヴァールはまさかと予想できた。その為、目を見開いて、唖然としてしまう。

それは的中し、煙が晴れ、そのクレーターから出てきたのは、無傷のなのはであった。バリアジャケットは損傷していたが、レイジングハートの特性で直ぐ様元通りの姿に修正される。

「お、いけたの！」

なのはは月から地球の海鳴市まで一発で戻れるかなと思っていた

が、その結果は見事にど真ん中であった為、軽く笑みを浮かんで喜ぶ。対し、未だに唖然としていたナハトヴァールだったが、直ぐ様意識を切り変え、なのはを睨みつける。

「(――――お前には……私の全てをぶつけたくなった!!)」

咆哮をあげて、ナハトヴァールは地面を蹴り、そのまま疾走してから跳躍する。その瞬間にナハトヴァールは目にも見えない速さで先ほどと同様になのはの全身に攻撃を打ち込むが、なのははそれを正面に腕をクロスさせるだけで耐えている。

そしてナハトヴァールが正面から攻撃を繰り出そうかとした瞬間――――。

ナハトヴァールの胴に拳が打ち込まれる。

衝撃で吹き飛ばされ、後方へと飛んで行くが、両足を地面に突き刺すことで衝撃を殺し、何とか柱から落ちる寸前で留まる。上体を起こし、なのはの方へ向いて姿を確認するが、次の瞬間にはなのはの姿は目の前に移動していた。

「連続普通のパンチ」

放たれる無数の拳は、一発一発がナハトヴァールの一撃を遥かに超え、身体を砕いていく。吹き飛ばされつつも、宙で一瞬にして全回復して、なのはの方へ腕を構える。

「ならば、もう一つの切り札を喰らえッ！　全エネルギーを放ち、お前もろともこの世界を吹き飛ばしてやろう!!」

言って、凄まじい魔力を腕に集中させるナハトヴァール。恐らく言葉に通りに全ての力を集中させているのだろう。その衝撃はこの海鳴の街全域に振動を伝わせる。周囲は高エネルギーで融解し始め、ドクンと鼓動に合わせて魔力は高まる。

「――――響け終焉の笛――――ラグナロク!!」

叫び、ナハトヴァールから魔力が放出される。それは正しく世界をも崩壊する勢いの砲撃であり、これに触れれば即死は免れないだろう。だがなのはは特に回避することはせずに、その場に呆然と立ち尽くしている。だが、静かにその右腕に力を込めた。

「――だったらこっちも切り札を使うの……」

「必殺【マジシリーズ】」

「――マジ殴り」

その拳一撃によって、ラグナロクは霧散され、その衝撃がナハトヴァールに直撃する。そして、何かが砕ける音と共に、周囲の結界は解かれていった。

21撃目　END

アースラの食堂には、主にペースト状になった定食が出される。見た目はともかくとして、味はなかなか美味しい。お盆に乗る皿の一つにあったトマトペーストっぽいものを一口食べながら、同じテーブルに座るクロノの話に耳を傾ける。

「――まさか、防衛プログラムを切り離すどころか、その核を一撃で破壊するとは」

既に完食したクロノが腕を組んで、眉根を八の字に曲げて嘆息気味にそう言葉を漏らす。その言葉に苦笑いを浮かべたのは、未だに食事中であるフェイトと、クロノと同じく完食したエイミィだった。クロノの言うように、ナハトヴァールと決戦した際に、防衛プログラムの切り離しどころか、不可能と言われた核を生身で破壊する伝説を生み出した。

なのはとしてはかつて無い強敵に出会ったことから、本気の一撃を叩き込んだだけなのだが、結果として防衛プログラムを破壊できたので良かったとする。そう思いつつ、コンソメスープのようなものをスプーンで掬ってから一口飲む。

はやてと管制融合騎――リインフォース、そしてヴォルケンリッター達は、はやてとリインフォースの尽力によって、新たにヴォルケンリッターを防衛プログラムと切り離し、構築した事によって復活も出来た。はやてとリインフォースも防衛プログラムが消滅したことにより、本来の夜天の書として力も安定した。

「――だが、どうやら事態はそう上手くはいかないようだ」

「どういうこと？」

クロノの言葉に、フェイトが訊ねる。

「確かに一見すると、何もかもハッピーエンドに思える結末だが、管制融合騎……リインフォースの話によれば、直ぐに夜天の書自体が防衛プログラムを修復してしまうそうだ。だから、いずれにせよ夜天の書は完全に消滅させないといけない」

「それじゃ……！」

フェイトは目を見開き、クロノに訴えるように言葉を零すが、そこで言葉は詰まる。クロノに感情をぶつけても意味の無いことだ。一瞬席から立ち上がったのを腰を下ろし、顔を俯かせる。エイミィもそれに申し訳無さそうに表情を歪めた。

なのはは最後に残るご飯を食して、スプーンをお盆に下ろす。そして思考する。夜天の書を完全に破壊しなければ、また防衛プログラム――ナハトヴァールが復活するということだ。そうすれば、また同じことの繰り返しとなる。なのはとしては、また殴れば解決すると思ったが、同じ都合よく行くとは限らないのだ。ましてや、またこんな大事を起こす訳にはいかない。

そうなると、夜天の書の破壊――リインフォースとヴォルケンリッターを、破壊しなければならないのだ。

皆がどうしようも無い現実に、食らい表情を浮かべるが、その一同に一人の女性が近づく。

「――安心してくれ。消えるのは、私だけだ」

「！　リインフォースさん！」

そう言葉を放ったのは、チャイナドレス風の騎士甲冑を身に纏わせた銀髪の女性、リインフォースだった。ナハトヴァールが消滅したことによって、本来のユニゾンデバイスとしての姿となっている。そんな彼女は優しい笑みを浮かべ、そう言った。

「騎士達は、私……夜天の書とは別に新たにシステムを構築した。彼等が消えることは無い。消えるのは、私一人だ」

「それを、はやてちゃんには？」

訊ねると、リインフォースは首を横に振る。はやては夜天の主として覚醒した影響により、今は気を失って医療室で寝ている状態だ。命に別状は無く、現在はヴォルケンリッター達が見守っている。

「主には、騎士達がついている。もう心配する事はないだろう。お前達もいてくれる。だから、私も安心して己を終わらせること出来る。だが、主がこの事を知れば、とても悲しむだろう。なら主が知る前に、全てを終わらせた方がいい」

言うと、また皆が暗い表情になるが、リインフォースは申し訳ない

表情を見せつつも言葉を続けた。
「それで、お前達にお願いがある」

◇

翌日の海鳴市の夜は、雪が降っていた。クリスマスの聖夜に合わせたホワイトクリスマスである。その街の賑わいが、街の外れにある高台の公園にも光として伝わってくる。通常であれば、公園にもカップルなどが集まりそうではあるが、今日は管理局によって人払いがされている。よって公園にはフェイト、そしてヴォルケンリッター達が待機していた。
公園に向かう道の坂道。そこからは遠くの街が薄っすらと見える。先日の決戦では何とか結界が守ってくれたくれた為に、被害は出なかった。それを心から安堵し、リインフォースは溜息を吐いた。すると、坂の下から誰かが歩いてくる。
「……来たか」
「うん」
リインフォースが視線を向けると、そこにいたのはコートを身に纏ったなのはだった。コートは着ているが、寒そうには見えない姿は流石としか言い様が無い。対しリインフォースもノースリーブの姿で上着を着ていないので、どちらも同じだが。
そのままリインフォースの隣にまで歩き、並んで景色を見渡す。直ぐ下には林があり、遠くの方で光が輝く。街の中心では人々が賑わい、それは楽しい聖夜を過ごしているのだろう。暗い坂に街頭で照らされる淡い光と、雪が相まって中々幻想的といえる雰囲気である。言葉はかけずに、景色を見る。そのまま数秒が過ぎた後に溜息を吐いて、リインフォースが口を開いた。
「あの時は完全にナハトヴァールに意識を奪われていたが、薄っすらとは記憶に残っている。これもナハトヴァールが完全に消えては居ないという事なのだろうがな。――思い出せば、本当にお前は凄いと思うよ。覚醒した夜天の書の力にナハトヴァールの力と、対等に勝

負を繰り広げたのだからな」
「……うん。そうだね」
目線は遠くの景色に向けたまま、双方は言葉を吐く。それと同時に吐息が白くなり、それが夜空に向かって消えていく。静かな風と共に数秒が過ぎ、リインフォースは再び口を開いた。
「――嘘だな」
依然として視線を変えないまま、リインフォースは眉根を八の字にして言う。
「お前には余裕があった。まるで勝負にすら、なっていなかった。……あはは。今までの絶望は一体なんだったのかと思ってしまうよ。それくらいに、呆気ないものだった」
リインフォースが自傷気味に言葉を吐くと、なのはもどこか寂しげな表情を浮かべた。
「――お前は強すぎた。高町なのは」

最後に、なのはの方を向き、寂しげに表情を浮かべてから目を閉じ、リインフォースは坂を上っていく。公園で、自分を旅に出させてくれる騎士の元へ向かって。
なのははリインフォースが数歩進んだ後に、その背に向かって身体を向けた。
「……良い旅を」
聞こえるかどうか分からない程の小さな言葉を零す。だが、リインフォースはユニゾンデバイスであるが故に、その言葉が伝わっていたようで、なのはに背を向けたまま優しい笑みを浮かべた。
その後、数多の悲劇を生んでしまった、ロストロギア・夜天の書は、この聖夜に、騎士達と、駆けつけた最後の主、はやてに見守られ、その運命を終わらせた。

◇

事件から数日が経ち、闇の書事件の後始末も大分片付いた頃。はや

ては罪を償うために管理局に従事するヴォルケンリッターたちと共にその重荷を負うべく、魔導騎士としての保護観察を受け、嘱託魔導師となる。八神家の保護責任者はレティ提督となり、フェイト同様に、直ぐに地球で暮らせるようになった。

足の回復も順調であり、このままリハビリを続ければ完全に治るとの事。そして翌年には病院の通院も終了して、主治医の先生も大変喜んでいた。

管理局としても、一年後には嘱託ではなく、正式に入局する事になり、同じく正式に入局したフェイトと共に仕事を従事している。

クロノも事件後は、リンディの役職を継ぐ形となり、フェイトたちのサポートを行っている。その後、提督に昇進し、アースラの艦長を務める。ユーノは闇の書事件で、管理局本局の無限書庫での検索能力から、その司書補佐として就き、その後は司書長となる。

リンディは前線からは降り、現在では地上勤務となって、フェイトたちの生活を見守っている形となる。闇の書事件に終止符が打たれたことから、とても幸せそうに日々を過ごしている。アルフも、リンディと共にフェイトたちの暮らす家で家事を手伝い、帰る場所を守っている。

フェイトは管理局に正式に入局後、執務官を目指して日々努力に励んでいる。だが近年に、病院で入院していた母、プレシアが亡くなった。最後までプレシアはフェイトに対し、母親らしい事は何一つしなかったのだが、最後にフェイトが見届けた際に、初めて優しい笑みを浮かべた。プレシアの遺体はアリシアと同じ場所の墓に眠った。墓参りの際には、ハラオウン家と共に来て、花を届けた。

そして、なのははと言うと――――。

◇

『ごめんね、なのは。休みなのに、無理なお願いしちゃって』

「うん、まあ……フェイトちゃんやはやてちゃんたちにも手が負えないって言われたらねぇ……」

とある管理世界の一つの上空を飛行しながら、念話での通信で申し訳無さそうに言って来るフェイトに対し、なのははいつも通りの無気力な表情で言葉を返す。装備するのはバリアジャケットであり、現在目的地まで一直線に向かっている。途中に見える景色はどれも崩壊した街であり、大勢の死傷者が出たことが分かる。途中で見かける泣き叫ぶ子供が泣いている姿を見ると、その悲惨さが痛いほど分かる。

程なくして、目の前に大きな影が見えてくる。それは巨大化した原生生物だった。ロストロギアを取り込んだことで、世界崩壊レベルの災害を生み出してしまったのだ。管理局の応援は時間がかかり、かといってフェイトやはやて、ヴォルケンリッター達にも手に負えないこの怪物。だからこそ、フェイトはなのはに頼んだ。

なのはは管理局員では無いし、嘱託魔導師でも無い。地球に住む一般人に過ぎない。故に管理局に協力する必要は無いのだが、退屈な日常であった為に、身体を慣らすのも良いだろうと思い、現在ここに居る。

怪物までの距離はもう無い。そのまま衝突と同時に、拳を突き出す。

――異形の化け物は一瞬で消滅した。

その肉片が派手に飛び散る中、なのはは出来上がったクレーターに着地して、僅かに煙が出ている拳をワナワナと見つめる。

「また……ワンパンで終わっちゃったの」

――ＯＮＥ　ＰＵＮＣＨ―ＧＩＲＬ